

平成 29 年度環境教育・学習における
「ESD 推進」のための実践拠点支援事業

報告書

平成 30 年 3 月 30 日

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

1. はじめに

昨年度に引き続き、中部地方で ESD 推進を先導的に実践している拠点の支援を行った。

中部地方では、施設を持つ拠点を対象にした支援ではなく、多様な施設や人々の連携によるネットワークを拠点とし、施設等の既存の取組の組み合わせによる新たな ESD 取組、プログラムの創出を目的に、ESD 推進を先導的に進める支援を試行した。

継続案件である「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、昨年度に作成した ESD 教材を活用し、高校生を対象とした「揖斐川流域 ESD ツアー」を企画、実施し、その報告会である「揖斐川流域未来フォーラム」を開催した。拠点連携による学習効果、変容、ESD 推進の方向性を高校生の気づきや学びから得ることができた。テーマは「高校生が『流域』の価値に気づき、持続可能な地域づくりを実現するための要素をみいだすことができるか」であった。

今年度からの案件である「高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業」においては、愛知県事業と連携し、愛知県内 5 校の高校と高校生が作成した環境学習プログラムをツールに、高校間、高校生間、高校と地域間など多様につながる場を設け、高校生主体による高校生ネットワークを拠点とした支援を行った。テーマは、「高校生がつながることで、持続可能な地域を実現する新しい『何か』を生み出すことができるか」であった。

本取組は、2015 年に採択された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」並びに日本における「我が国における『持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム』実施計画」が重要としている「ユース」「コミュニティ」を領域にしている。

今回対象とする 2 つの取組と 2015 年に国連が採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」との関連を示し、「持続可能な地域づくり」に新たな ESD 取組がどう寄与するかを明らかにした。

今年度の特色は、「高校生」「SDGs」である。

それぞれのプロセスにおける変容には「物語」がある。本報告書はそのプロセスと成果をまとめたものである。

【平成 29 年度 伴走支援する対象拠点】

- ・揖斐川流域環境学習拠点等連携事業（三重県/岐阜県）
- ・高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業（愛知）

目次

1. はじめに	1
2. 業務概要	3
(1) 業務の目的	3
(2) 業務の内容	3
(3) 業務実施期間	7
(4) 実施体制	7
3. 業務内容	8
(1) 連携拠点の取組向上のための伴走支援	8
① 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業	8
② 高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業	56
(2) 関係主体との連携等	111
① 全国事務局	110
② EPO 中部運営会議委員	110
③ その他	110
(3) アドバイザリー会議への協力	110
(4) 伴走支援のポイントの可視化及び全国事務局が行う成果報告会への協力	111
(5) 報告書の作成	112
4. 本事業の成果と課題	113
(1) 支援拠点の変化	113
① 揖斐川流域環境学習等連携事業	113
② 高校生の環境学習・ESD ネットワーク形成事業	116
5. 総括	118
(1) 実践拠点支援の成果	118
① 各拠点支援のスケジュール	118
② 各拠点支援の成果	119
(2) まとめ	122
① なぜ「拠点連携」を支援したのか	122
② なぜ高校生、なのか。	123
おわりに	124
電子媒体収録資料	125

2. 業務概要

(1) 業務の目的

平成 23 年 6 月に成立した「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（以下「法」という）」において、法目的に持続可能な開発のための教育（ESD）の理念や協働取組の必要性が明示され、環境省においては、地域における環境教育等の自発的な取組みの促進のため、地方環境事務所ごとに設置する「地方環境パートナーシップオフィス（通称 EPO）」を活用し、地域の環境教育における「ESD 視点の取込み」に向けたコーディネートを実施してきた。

平成 28 年 3 月に策定された「我が国における『ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）』実施計画」においては、「国連 ESD の 10 年」の取組みを通じて、一定範囲の生産者や消費者の行動の変化、意識の変容といった成果が認められるものの、その成果が一部の人や地域に留まっていることが課題として挙げられている。

他方、地域や社会の態様は様々であり、環境教育の実践において画一的・絶対的な方法は無く、地方においては環境教育を通じた経済効果という視点も求められることから、地域の環境教育・学習拠点には、常に変化する社会的・自然的・経済的な諸条件や拠点自身の理解度・意欲に応じて取組みを柔軟かつ創造的に組み立てていく「プロセスデザイン力」が求められる。

本業務は、地域の環境教育・学習拠点の伴走支援を通じて、拠点のプロセスデザイン力を養成し、持続発展的な活動となるよう取組みに学びのサイクル（変化が継続する仕掛け）を組み込むことで、ESD の実践をより深め、広げることを目的として実施した。

(2) 業務の内容

① 連携拠点の取組向上のための伴走支援

ア アドバイザー打合せ

環境省が指名するアドバイザーと連携して支援を行った。支援に先立ち、昨年度事業の成果を活かした伴走支援をどのように行うか、伴走支援をする拠点の選定や事業の方向性について意見を得た。

事業実施期間において、プラットフォーム会議への参加の依頼や、事業の進捗状況の報告を行い、主に教育の専門家としての知見から支援内容や方法、事業評価についての意見、提案やアドバイスを得た。評価会議においては、アドバイザーとしての評価を得た。事業における監修の役割も依頼し、事業実施終了時には、成果及び今後の課題、可能性についての評価を得た。

- アドバイザー 大鹿聖公氏（愛知教育大学教授）

日時：平成 29 年 5 月 9 日（火）9：30～11：00

場所：EPO 中部

イ 協働プラットフォーム意見交換会

協働プラットフォーム意見交換会（以下、プラットフォーム会議）では、今年度事業計画及び支援内容を検討し、

- ・ 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業については昨年度事業で作成したツールの活用実践
 - ・ 事業成果の広域展開化・モデル化に向けて、他の拠点への移転可能性及び実現可能性について具体的な実践を交えた検討及び課題の把握
 - ・ 事業成果の把握及び持続発展的な活動に向けた学びのサイクルの構築
- の 3 点を重視し、意見を交わした。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

昨年度の成果である流域の拠点連携により作成した「揖斐川流域 ESD 教材」を活用した事業を今年度実施することとした。主に、以下の 4 点を中心に事業展開をした。

- ①制作した教材の活用
- ②関係性を育んだ各拠点、ステークホルダーとの関係性の深化
- ③他地域への汎用の検討
- ④本取組の評価・検証

特に、中部 7 県各地域の「流域」による持続可能な開発のための教育のモデル事業としての社会化を目指し、本事業の成果の汎用性をどう高めるかについて協議を深めた。

[会議の実施]

- 第 1 回プラットフォーム会議 平成 29 年 7 月 12 日(水)
- 第 2 回プラットフォーム会議 平成 29 年 9 月 8 日(金)
- 第 3 回プラットフォーム会議 平成 29 年 11 月 16 日(木)
- 第 4 回プラットフォーム会議 平成 29 年 12 月 15 日(金)

<高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業>

昨年度実施した「泰阜ひとねる大学」をモデルとして、愛知県内の各地域で行われている高校生の環境活動を核に、次世代の発想とアイデア、地域住民の知識や経験、自治体施策などを重ねた、持続可能な地域づくりを可能にする学習の場の継続的实施を目指した。高校生間の連携、各高校と地域の連携を強化し、つながることで、高校生の活動、高校と高校との連携による活動、高校と地域が連携した活動が広がり、質が高まり、愛知県の高校生（高校）を主体として持続可能な地域づくりに取り組むネットワークの形成を目指した。愛知県事業である、県内 5 校の環境学習プログラムづくり「あいちの未来クワイート部」と連携し実施した。

[会議の実施]

- 第 1 回プラットフォーム会議 平成 29 年 6 月 20 日(火)
- 第 2 回プラットフォーム会議 平成 29 年 7 月 31 日(月)
- 第 3 回プラットフォーム会議 平成 29 年 9 月 11 日(月)

第4回プラットフォーム会議 平成29年12月22日(金)

②協働プラットフォームの設置

支援対象拠点におけるパートナーシップの形成、地域性を鑑みた支援及び事業計画の作成、実施への助言等の伴走支援を行う為、各拠点に「協働プラットフォーム」（以下、プラットフォーム）を設置した。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

プラットフォームは、①ESD 教材活用、②揖斐川流域ツアー企画・実施、③流域フォーラム、④評価・検証(SDGs 指標)、の目的別に各1回実施し、それぞれの専門性をもつステークホルダーの参加を得て会議体を構成し、会議及び事業を実施した。

・プラットフォームメンバー 7名 内地方自治体（三重県桑名市）

<高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業>

プラットフォームは、連携した「あいちの未来クリエイト部」のファシリテーター4名と、愛知県職員、メディア関係者の計6名で構成をした。

・プラットフォームメンバー 6名 内地方自治体（愛知県）

③評価会議の実施

本事業をふりかえり、事業の成果・効果を評価する目的で、連携拠点ごとに評価会議を開催した。参加型評価手法であるMSC(Most Significant Change)をアレンジして実施した。

「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」は、プラットフォームメンバーと異なるメンバーで構成をし、1月20日（土）に開催した「揖斐川流域未来フォーラム」に参加した高校生の「揖斐川流域 ESD ツアー」の報告内容を素材に、評価を行った。

「高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業」は、プラットフォームメンバーと同じ構成で実施し、3月10日（土）に開催した高校生のワークショップの成果を素材に、高校生の変容を主な軸として意見交換をした。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

日時：平成30年2月7日（水）13:00～16:30

場所：錦パークビル 11階

<高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業>

日時：平成30年3月10日（土）17:30～20:30

場所：ウインクあいち 1209 会議室

④関係主体との連携等

ア 全国事務局

- ・毎月月次報告を提出した。
- ・EPO 連絡会にて、本業務の進捗状況の報告と成果報告会の企画、本業務の成果のとりまとめ方法等について意見交換をした。

・第1回全国 EPO 連絡会

日時：平成 29 年 6 月 7 日（水） 10:00～15:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

・第2回全国 EPO 連絡会

日時：平成 29 年 10 月 12 日（木） 13:00～17:00

場所：ウインクあいち

・第3回 EPO 連絡会

日時：平成 30 年 1 月 16 日（火） 10:00～15:15

場所：地球環境パートナーシッププラザ

- ・「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、全国事務局と WEB 会議を行い、効率的・効果的な情報共有・相互参照を行った。

イ EPO 中部運営会議委員

業務実施期間において、適宜意見、アドバイスを得た。

ウ その他

地方 EPO とは支援計画や内容、拠点の変容等について情報共有を図った。ESD 活動支援センターとは、事業の報告、フォーラムや交流会への広報、参加依頼を行った。

⑤アドバイザー会議への協力

ア 第1回アドバイザー会議

日時：平成 29 年 6 月 8 日（木） 10:00～12:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：1 名

イ 第2回アドバイザー会議

日時：平成 29 年 10 月 30 日（月） 13:00～15:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：1 名

ウ 第3回アドバイザー会議

日時：平成30年2月27日（火）16:30～17:30

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：2名

⑥ 伴走支援のポイントの可視化及び全国事務局が行う成果報告会への協力

連携拠点及び関係者の変化につながった伴走支援について考察し、他の拠点でも汎用できるポイントを可視化した。

また、可視化した内容を成果報告会において発表し、地方 EPO 及び全国事務局に共有した。成果報告会に出席した。全国事務局から指定のあった「ペチャクチャ形式」（PP20 枚、20 秒）で報告をした。

日時：平成30年2月27日（火）13:00～16:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：2名

⑦ 報告書の作成

本業務の実施内容及びその成果について取りまとめ、報告書を作成した。

（3）業務実施期間

平成29年4月17日～平成30年3月30日

（4）実施体制

中部環境パートナーシップオフィス担当 4名（新海洋子 越野健司 岡 智子 高橋美穂）

※ 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業のみ河合良太（中部環境パートナーシップオフィス 協働コーディネーター/NPO 法人泉京・垂井）

3. 業務内容

(1) 連携拠点の取組向上のための伴走支援

① 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業

ア アドバイザーとの打合せ

日時：平成 29 年 5 月 9 日(火)9:30～11:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：3 名（アドバイザー1 名、EPO 中部 2 名）

〈主な内容〉

今年度実施する事業について協議をした。

昨年度から引き続き実施する「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」については、昨年度作成した ESD 教材の活用方法について、流域にある小中学校での実践や教育委員会への説明について、ESD 教材を活用したツアーの実施等について意見交換をした。

アドバイザーからは、ESD 教材を活用して学校教育で ESD 授業を実施する場合と、社会教育として実施する場合では、手法も内容も変わるため、誰を対象にどのようなことをするのかを早急に計画したほうがよい、と助言いただいた。特に学校教育においては、すでに年間授業計画が作成されているので、出前授業程度であれば可能性はあるが、ツアーのように現場を見に行く、流域の人々に出会うといった内容は相当丁寧アプローチをしなければ不可能に近いという指摘も得た。

イ 協働プラットフォーム意見交換会

プラットフォーム会議においては、以下の 4 つのプロジェクトの企画・実施のための会議体とし、下記メンバーに参画を依頼した。今年度は、4 回程度予定し、会議内容によってメンバー構成を変更させながらメンバーの専門性がより活きる会議内容になるようにすすめた。

- ① ESD 教材活用プロジェクト（小・中・高校・拠点での実践）
- ② 流域ツアー企画・実施プロジェクト
- ③ 他流域連携フォーラムプロジェクト
- ④ 評価・検証（SDGs）プロジェクト

〈協働プラットフォームメンバー〉

嵯峨 創平氏（岐阜県立森林文化アカデミー教授）

野村 典博氏（NPO 法人森と水辺の技術研究会理事長）

神田 浩史氏（NPO 法人泉京・垂井副代表理事）

安田 裕美子氏（NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長）

鈴木 明氏（桑名市立中央図書館長）

川島 浩氏（桑員エコリーグ）

小寺 春樹氏（NPO 法人山菜の里いび理事長）

<第 1 回プラットフォーム会議>

日時：平成 29 年 7 月 12 日（水） 14:00～16:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

参加者：12 名（プラットフォームメンバー 5 名、アドバイザー 1 名、
地方事務所 3 名、EPO 中部 3 名）



<主な内容>

事業計画案について協議をし、事業目標の共有、今年度事業及びスケジュールを確認した。今年度の業務として、

- ①昨年度の課題である自治体の参加を得るための昨年度の成果物の説明を含めた挨拶まわり
- ②作成した ESD 教材を学校教育の現場で活用するための教育委員会及び学校への説明
- ③ ESD 教材を活用するために高校生を対象に揖斐川流域ツアー（以下流域ツアー）実施
- ④ 揖斐川流域ツアーの参加した高校生による報告のためのフォーラム
- ⑤ 本事業の成果の汎用化のための評価・検証作業

を提案した。

協議した結果、おおむね提案どおり実施することとなり、特に「流域ツアー」「フォーラム」に関しては今後具体的な企画内容を詰めていくこととした。流域ツアーに関しては 1 泊 2 日で 10～11 月を予定。フォーラムに関しては下流域の桑名市で実施し、高校生によるツアーの報告と揖斐川の恵みを使ったランチやおやつの提供、揖斐川の活動事例の展示等を行うこととした。1 月を予定しているが、日時や場所、企画については今後具体化する。

評価会議は昨年度同様、MSC 手法をアレンジし 2 月頃を実施予定とした。プラットフォーム会議は年間 4 回実施し、プロジェクトごとにメンバーを決め実施する。

協議内容を反映した事業計画を作成し、日程、会場、参加者確保など事業を進めることとする。昨年度作成した紙芝居の絵本化を検討することとした。

<支援内容>

プラットフォームメンバーの昨年度事業の評価を得て、成果をいかに活用した事業にするかを提案、助言した。特に上流、中流、下流の地域性、各メンバーの専門性を十分に活かす事業企画案を提示した。教育委員会や自治体への説明に関しては、7 月に開設された ESD 活動支援センターと連携して行うことを提案し、本事業で作成した ESD 教材が学校と地域の連携による授業づくりにいかに活用できるかについて、これまでの知見から説明をした。また、今年度実施する本事業の評価検証作業については、ESD と SDGs を活用することをアドバイザーとともに提示した。

<第 2 回プラットフォーム会議>

日時：平成 29 年 9 月 8 日（金） 11:00～17:00

場所：くわなメディアライヴ 4 階研修室

参加者：16 名（プラットフォームメンバー6 名、アドバイザー1
名、EPO 中部協働コーディネーター5 名、地
方事務所 2 名、EPO 中部 2 名）



<主な内容>

フォーラム開催を予定している「くわなメディアライヴ」で会議を行い、併せて、下流地域の拠点である赤須賀漁港、はまぐりプラザ、貝増商店の視察を行った。会議では、桑名市立中央図書館の鈴木館長の本事業への思いや流域思考、持続可能な地域づくりの必要性をいかに次世代に伝えるか、といった観点での話を聞き共有をした。その後、11 月に開催することとなった「流域 ESD ツアー」の企画の進捗状況の共有と意見交換、参加した高校の教員や、高校の授業の講師を行っている NPO など多様な主体から、大学入試改革、新学習指導要領の視点から流域ツアーのコンセプト、企画内容、達成目標についてのアドバイス、提案を得た。

また、本事業の検証評価を行うための指標として検討している SDGs の説明を神田氏が行い、その後、本事業と 17 の目標を照らし合わせる作業を行い、事業内容と成果に対する評価手法についての協議を行った。今回は、EPO 中部の協働コーディネーターの参加を得て、流域をつなぐ、自治体をつなぐ、という視点からの「協働」の有効性についても意見を交わした。

また、大垣市、大垣市教育委員会、海津市、海津市教育委員会、桑名市、桑名市教育委員会、揖斐川町、揖斐川町教育委員会に挨拶と説明を行った旨の報告をした。桑名市教育委員会の校長会にて本事業の説明の機会を得ることができたことも報告した。

<支援内容>

会議前にプラットフォームメンバーや拠点の方と調整し、ESD 教材の活用、拠点の連携をベースに作成した流域ツアーの企画書のたたき台を作成した。企画書をもとに、高校生に何をどう伝えるか、のコンセプト及び手法を検討するために、流域ツアーに参加予定の高校の教員の会議参加を促した。

<第3回プラットフォーム会議>

日時：平成29年11月16日（木）14:00～16:00

場所：環境省中部地方環境事務所 第1会議室

参加者：16名（プラットフォームメンバー4名、アドバイザー1名、EPO中部協働コーディネーター5名、地方事務所3名、EPO中部3名）



<主な内容>

実施した「流域ツアー」の報告及びふりかえりを、当日の様子をまとめたスライドショーを上映し、また参加者のアンケート結果、参加したプラットフォームメンバーにコメントをいただき、行った。流域ツアーに参加した高校生の流域やダム、漁業、地域の自然の恵みに対する気づきから、流域ツアーの目的が達成されたことを共有した。一方で、高校生間のコミュニケーションの時間やふりかえりの時間が十分にとれなかったこと、プログラムの詰めすぎや時間管理など課題についても共有し、今後の改善案について意見を交わした。

1月に予定しているツアーに参加した高校生を中心に開催するフォーラムについて、企画案を提示し、意見を交わした。ツアー後各学校への生徒の様子やフォーラム参加への可能性についてのヒアリングを行い、1校を除く高校が参加し、ツアーに参加していない高校生の参加も得られることを報告した。

本事業の評価・検証については、ツアーに参加した高校生のふりかえりで抽出されたコメントやアンケート内容から、その成果効果をESDの構成概念と育みたい力、SDGsの17目標の視点から図るという手法により行うこととした。ESDについてはアドバイザーの大鹿先生、SDGsについては神田氏が中心となりすすめることとした。評価検証に関する会議（第4回プラットフォーム会議）を来月行い、たたき台を示し、意見交換をすることとした。

先回同様、今回もEPO中部協働コーディネーターの参加を得て、今後の事業の展開、他流域への汎用の可能性について意見交換を行った。

<支援内容>

流域ツアーの成果・効果を参加していないプラットフォームメンバーと共有できるように、スライドショーやアンケート、ワークショップ内容をまとめ提示した。高校生の気づきを本事業の成果・効果としていかに可視化するか、について主な論点として会議が進むようにした。また、流域ツアーでの成果・効果をいかにフォーラムにつなげ、フォーラムで高校生間のコミュニケーションを図り、高校生自身が今後取り組みたいことを自分の言葉で話させる場をつくることできるか、についての協議を促した。

<第4回プラットフォーム会議>

日時：平成29年12月15日（金）15:00～17:00

場所：じゅうろくプラザ研修室4

参加者：7名（プラットフォームメンバー3名、地方事務所1名、
EPO 中部3名）



<主な内容>

昨年度及び今年度実施した事業の成果を可視化するために、第4回プラットフォーム会議では、評価・検証に知見のあるメンバーを構成員とし、本事業の目的である「拠点のESD化」についての評価、検証を行った。

① 揖斐川流域全体を拠点として見た場合のESD化

② 揖斐川流域の各拠点のESD化

の2つの視点を軸に、

① この間関係性を育んだ環境学習施設や社会教育施設が本事業で実施した活動をSDGs、ESDの目標と照らし合わせての可視化

② 各拠点間が連携し補完しあうことによる有効性、可能性の可視化

を目的とした。

各拠点の役割、可能性や期待、他の拠点と連携することによる可能性、期待、提案等を示し、フィードバックすることとし、その素材として、揖斐川ツアーに参加した高校生のふりかえり、アンケート、フォーラムでのワークショップ内容を活用した評価検証レポートを作成する。

ESDに関しては、揖斐川ツアーに参加した高校生のふりかえり、アンケート、フォーラムでの発言からESDとの関連性、行動の変容等をアドバイザー（大鹿氏）の監修のもと作業を進める。

各拠点及び拠点連携により取り組まれた内容とSDGsを照らし合わせる作業を神田氏中心に進めることとした。

<支援内容>

評価検証に必要な素材を整理し提示した。また想定される評価手法、内容についてたたき台を作成し、今後の作業が具体的になるように示した。また、本事業の目的の再認識の作業、評価検証チームメンバーの目標を再設定した。

ウ 支援計画

(ア) 目的

揖斐川流域には、上流、中流、下流の各流域に環境学習拠点や社会拠点が多数あり、それぞれの地域性を活かした環境学習が展開されている。また、環境、まちづくりをテーマにした NPO 活動が活発であり、NPO ネットワークが形成されており、自治体との連携した環境学習プログラムも実施されている。本事業では、それら各流域で展開されている環境学習活動をつなぐことで、「流域」という観点での持続可能な地域づくり、各拠点における ESD 取組を促進させることができるのではないか、と仮説をたて、

①流域にある各拠点の ESD 推進の支援

②流域にある各拠点の連携によるネットワークを「拠点」とした ESD 推進の支援

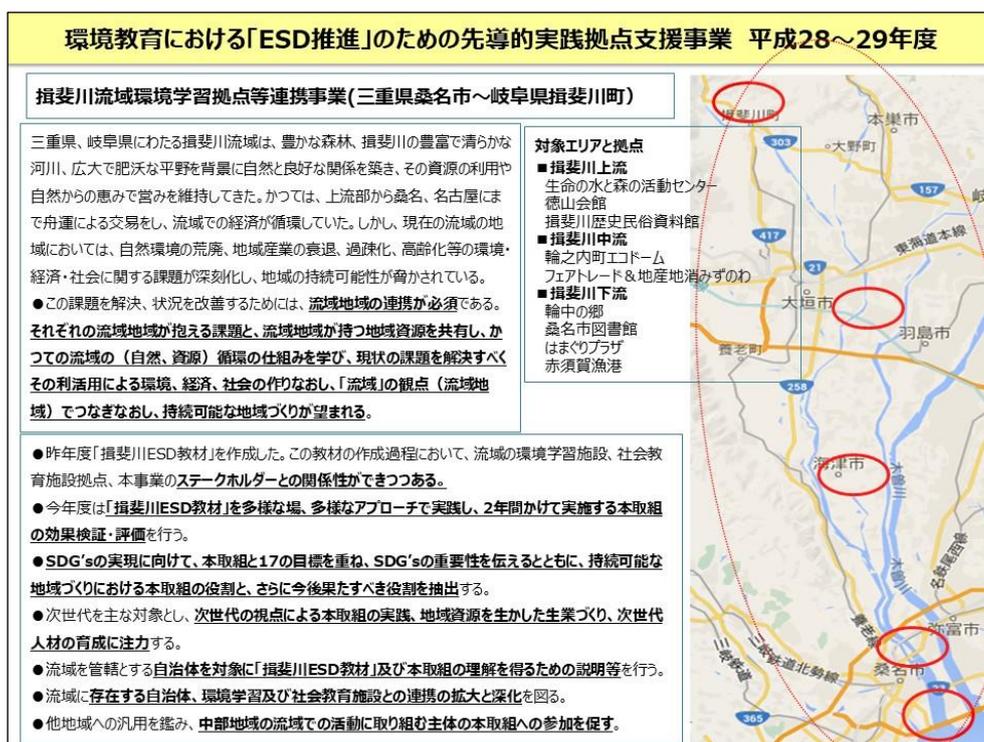
の 2 点を目的に 2 年間実施した。

さらに、流域にある環境学習等拠点をつなぐことで、「流域」という拠点を形成し、「流域」における ESD 推進の支援、ひいては、持続可能な地域づくりをけん引する教育/学習のありかたの検証を試みた。

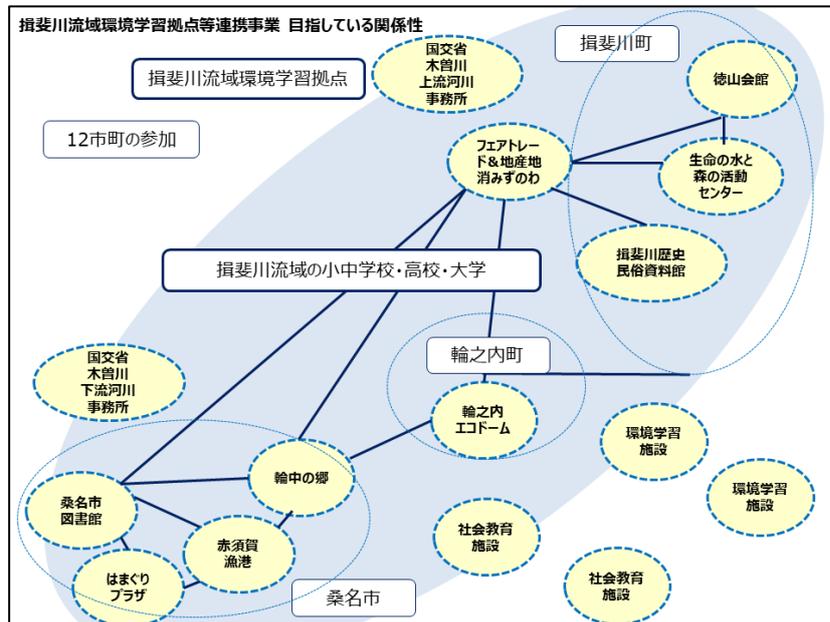
また、本事業を進めるにあたり、揖斐川流域にある環境学習等拠点の連携を強化し、拠点間の連携、流域全体での環境学習等拠点連携ネットワークの形成を目指した。

各拠点との連携強化及びネットワーク形成によって、揖斐川流域が抱える課題の改善、持続可能な地域づくりのための教育、ESD を継続的実施する可能にすること、ひいては他の地域の流域においても本事業の成果が活用できることを目的とした。

<目指すべき揖斐川流域 ESD 拠点等連携図>

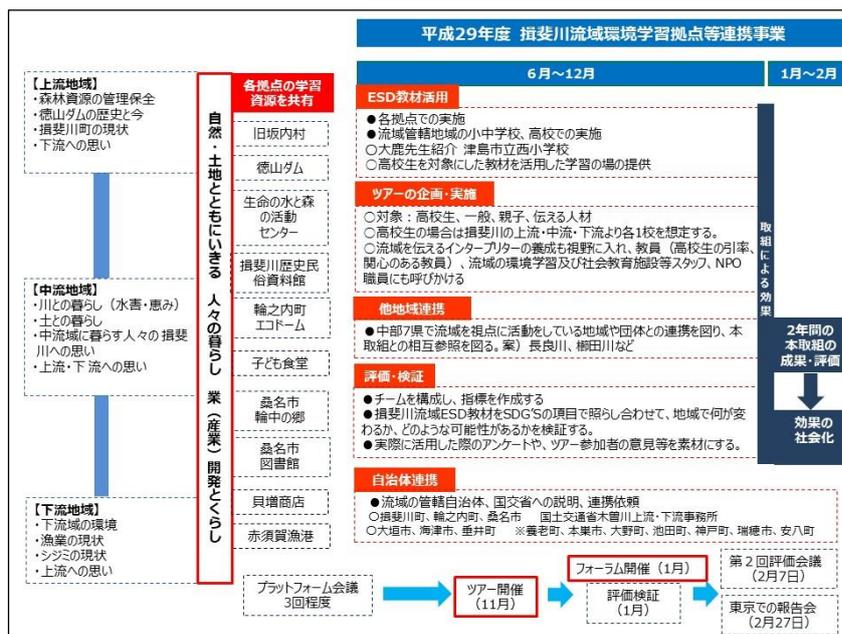


＜揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 目指している関係性＞



(イ) 事業構成・事業目標の設定

1年目に作成した揖斐川ESD教材の活用を検討するにあたり、ESD的な学びを展開するためには現場での体験学習が必須であることを説くために、ESD教材を活用した「揖斐川流域ESDツアー」（1泊2日）を実施することとした。また、実施するツアーの評価を行うために、ツアー参加者による報告会である「揖斐川流域未来フォーラム」を行うこととした。今年度はこの2事業をメインとし、本事業の目的の達成を評価・検証をする作業を行った。併せて、流域にある自治体、教育委員会、事業者への本事業説明、参加依頼を行うこととした。



エ 支援内容

(ア) スケジュール

日程/場所	内 容
4 月	教材使用の広報のため、制作した教材の活用を促すチラシ、DVD を追加作成し、関係拠点施設及び団体に配布した。さらに、広報のために DVD を追加作成した。
4 月 17 日(月)	昨年度の評価会議メンバーと打合せを行い事業企画と方針を検討、今年度の事業方針及びスケジュールなど打合せを行った。
5 月 9 日(火)	アドバイザーとの打合せ。 今年度取組の検討、実施場所の確認、及び揖斐川流域で実施すべき内容の検討を行った。
5 月 19 日(金)	拠点の代表者と打合せを行い、事業企画を持ち寄り、企画内容・方針を検討、今年度の事業方針及びスケジュールを確認した。
6 月 6 日(火)	拠点の代表者と打合せを行い、事業企画内容の調整、事業実施に必要なステークホルダーの検討、スケジュールの確認を行った。
6 月 12 日(月)	昨年度制作した ESD 映像教材の You-tube 公開を昨年度プラットフォームメンバー及び映像製作に関わった学校の先生等に連絡し周知し、今年度の事業継続を伝え、協力を依頼した。
6 月 20 日(火)	アドバイザーと拠点の代表者と打合せ。 流域ツアー及び流域フォーラムの企画内容について検討、本事業の実施内容について意見交換を行い、主に学校教育現場との連携による企画についてアドバイスを得た。
6 月 26 日(月)	事業の中心メンバーに今年度及び、今後揖斐川流域における展開に必要なステークホルダーについてのヒアリングを行った。
7 月 12 日(水)	第 1 回プラットフォーム会議の実施 (P9 参照) ※参考資料 1-2 参照
7 月 25 日(火)	下流地域（桑名市）のステークホルダーに昨年度事業の報告及び今年度の事業内容説明、事業への協力を依頼した。下流地域の高校に流域ツアー及び流域フォーラムへの参加協力を依頼した。
7 月 26 日(水)	上流域（揖斐川町、大垣市）のステークホルダーに、昨年度事業の報告及び今年度の事業内容説明、事業への協力を依頼した。今年度より新たに協力をいただく自治体環境部局に説明をし、自治体が行われている環境学習に関する情報提供をしていただいた。特に流域ツアー及び流域フォーラムへの参加依頼を行った。
7 月 27 日(木)	三重県で毎年継続的に行われている奈佐の浜プロジェクト（鳥羽市、答志島）での本事業の紹介と説明を依頼され、他流域への汎用性を高めるため、奈佐の浜プロジェクト事務局会議に参加した。
7 月 28 日(金)	桑名市教育委員会に、昨年度の報告と今年度の事業内容説明を行った。学校教育における本事業の成果物である ESD 教材の活用や、流域ツアー及び流域フォーラムへの協力、支援を依頼した。
8 月 3 日(木)	大垣市、大垣市教育委員会、海津市、海津市教育委員会、国交省木曾川上流事務所、輪之内町住民に、昨年度の報告と今年度の事業内容の説明、流域 ESD ツアー及び流域 ESD フォーラムへの協力、支援、情報提供を依頼した。教育委員会では、学校教育における本事業で作成した ESD 教材の活用について説明及び意見交換をした。
8 月 21 日(月)	国交省木曾川下流事務所に、昨年度事業の報告及び今年度の事業内容説明、事業への協力、揖斐川に関する情報提供や、流域 ESD ツアー及び流域 ESD フォーラムへの協力を依頼した。

8月23日(水)	イビデン株式会社、揖斐川町教育委員会など関係部局、坂内諸家の住民、輪之内町役場に昨年度事業の報告及び今年度の事業内容の説明、事業への協力、流域 ESD ツアー及び流域 ESD フォーラムへの協力を依頼した。
9月	メンバー間の情報共有、企画内容の検討、特に11月に実施する流域 ESD ツアーについての参加者調整、旅行代理店等との調整を行った。
9月8日(金)	第2回プラットフォーム会議の実施 (P10 参照)。※参考資料 1-3 参照
9月16日(土)	地域の未来・志援センター・一般財団法人 セブン・イレブン記念財団主催 愛知・岐阜・三重 環境活動 情報交流会 2017「山・川・里・海 大交流会」～豊かな自然を活かすネットワーク in 三重 北勢～にて汎用性を高めるために本事業を紹介した。
9月25日(月)	揖斐川町にある西濃学園を訪問し、昨年度事業、今年度事業の説明を行い、特に流域 ESD ツアーについての詳細に説明をし、参加の可能性を打診した。
10月4日(水)	桑名市教育委員会の紹介により市内小中学校の校長会に出席し、揖斐川流域 ESD 教材の説明と桑名市で ESD 教材として活用の提案を行った。
10月8日(日)	三重県鳥羽市答志島で行われた奈佐の浜海岸清掃活動に参加し、その参加者を対象に揖斐川 ESD 教材を紹介する時間と、教材及び教材活用について意見交換をする場をもった。イオンチアーズの子どもたちに絵本の読み聞かせを行った。また、伊勢三河湾流域における本教材の活用、汎用化についての意見交換をした。
10月26日(木)	揖斐川流域 ESD ツアーに参加する高校（不破高校・池田高校）と、訪問先である輪之内町エコドーム、輪之内町にてツアーに関する打合せを行った。事務局会議を行った。
10月27日(金)	揖斐川流域 ESD ツアーに協力いただく下流地域である赤須賀漁港・はまぐりプラザ・輪中の郷、上流地域である揖斐川町の徳山会館・生命の森と水の活動センター・揖斐川民俗歴史資料館でツアーに関する打合せを行った。事務局会議にて今後のスケジュールの確認を行った。
11月	11月はツアー実施のための準備作業が中心となった。ツアー実施後は、参加した生徒のアンケートとりまとめ、プラットフォームメンバーへのふりかえりのとりまとめ、ツアーの簡易レポートの作成、各関係者への報告などを行った。1月20日のフォーラムの企画準備、関係者との調整、本事業の評価検証作業の準備などを行った。
11月7日(火)	揖斐川流域 ESD ツアーに協力いただく赤須賀漁協青壮年部とツアー当日の高校生とのセッションやスケジュールの確認を行った。他、ツアー中の食事の手配、下流域でのステークホルダーとの最終打合せを行った。
11月11日(土) ～12日(日)	揖斐川流域 ESD ツアーの実施 (P18～27 参照)
11月13日(月)	プラットフォーム会議の準備としてツアーのアンケート、ワークショップのふりかえりなどの資料作成、スライドショーを作成をした。
11月16日(木)	第3回プラットフォーム会議の実施 (P11 参照)。※参考資料 1-4 参照
12月	12月は揖斐川流域 ESD ツアーを経て、この間の事業のふりかえり、評価・検証作業についての打合せや、資料作成が中心となった。また1月開催のフォーラムに向けて、企画内容、関係者との調整を行い、フォーラムの広報を行った。今後の展開を見据え、行政等必要となるステークホルダーに広報を行った。
12月4日(月)	揖斐川流域 ESD ツアーに参加した4校（池田高校、桑名高校、津田学園高校、三重高校）に伺い、ツアーの報告、ツアー時の高校生の気づきと学びをまとめた資料やアンケート内容等を共有し、1月に開催するフォーラムについての打合せを行った。

12月6日(水)	揖斐川流域 ESD ツアーに参加したうち2校（不破高校、大垣東高校）に伺い、ツアーの報告や、ツアー時の高校生の気づきと学びをまとめた資料やアンケート内容等を共有し、1月に開催するフォーラムについての打合せを行った。
12月15日(金)	第4回プラットフォーム会議（評価・検証チーム会議）の実施 （P12 参照） ※参考資料 1-5 参照
12月22日(金)	アドバイザーとの打合せ。 この間の事業の進捗等を共有し、評価・検証チーム会議で出された意見等や今後のスケジュールを共有した。教育の専門家として ESD、新学習指導要領との関連性をいかに可視化するか、について意見を交わし、学校教育現場との連携を促進ための見せ方を検討した。高校生の変容を図るためのアンケートをどのような項目で作成するかアドバイスを得た。
1月11日(木)	桑名市（桑名市役所、教育委員会、赤須賀漁協、桑名市中央図書館、NPO 団体など）に訪問し、1月20日に開催する揖斐川流域未来フォーラムの説明、広報・出席依頼を行った。
1月11日(木)	アドバイザー、プラットフォーム会議メンバー神田氏、事務局の打合せ。 揖斐川流域未来フォーラムの企画内容について、参加した高校生以外の参加があること、報告内容の確認、SDGs ワークショップの進め方、アンケート内容、広報強化について協議をした。
1月20日(土)	揖斐川流域未来フォーラムの開催（三重県桑名市） （P28～41 参照）
1月31日(水)	アドバイザーとの打合せ。 本事業2年間の成果、効果を ESD・SDGs の視点から評価する作業について、意見を交わし、アドバイスを得た。本事業の ESD・SDGs 評価のとりまとめができつつある。2月7日の評価会議の準備を進めた。
2月	評価会議の開催に向けて、フォーラムでの高校生の発表内容やワークショップでのコメント、発表内容をとりまとめ成果・効果を抽出する作業を行った。また、SDGs・ESD 評価報告書への成果のインプットを行った。本事業での成果・効果をとりまとめ、各拠点及びステークホルダーへの報告、各拠点の SDGs、ESD の観点での効果、拠点や取組が連携することによる相乗効果を可視化し、拠点の取組が深化すること及び、周知広報のツールとして活用できるパンフレットを、更なる展開を図るために作成している。
2月5日(月)	本事業の最終拠点フィードバックシートの作成をプラットフォームメンバーの神田氏に依頼し事業評価、伴走支援評価等について意見交換を行った。
2月7日(水)	評価会議の実施 （P42～45 参照）。※参考資料 1-1 参照
2月20日(火)	「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 SDGs・ESD 評価・報告書」の作成を行った。評価会議にて出された意見を基に、アドバイザーの大鹿氏と評価検証シートの主に SDGs、ESD の構成概念、培いたい能力・態度について議論し、ブラッシュアップした。
2月27日(火)	平成29年度環境省環境教育・学習における「ESD 推進」のための実践拠点支援事業成果共有会出席。本事業の成果をまとめ発表し、共有した。
3月	本事業の報告書とパンフレットの作成

オ 主な支援した取組

(ア) 揖斐川流域 ESD ツアー

<目的>

1年目に作成した揖斐川 ESD 教材の活用し、「揖斐川流域の上流から下流までの多様な施設（拠点）や人々、暮らしに出会うことで、何に気づき、何を大切に思うか」をテーマに、流域連携による現場での学習効果を把握するために実施した。

<概要>

日時：平成 29 年 11 月 11 日(土)～12 日(日)

参加者：33 名（高校生 16 名、教員 4 名、プラットフォームメンバー6 名、環境省（本省 1 名、地方事務所 1 名、EPO 中部 5 名）

<プログラム>

■ 1 日目/11 月 11 日（土）

Time	場所	詳細
9:00	大垣駅北口集合・受付	●貸し切りバス利用
9:15	出発	下流域の高校生は大垣まで養老鉄道を利用
10:30	【揖斐川町】 生命の水と森の活動センター見学	<ゲスト>生命の水と森の活動センター センター長 岩崎政彦さんの話と工作
11:30	出発→移動	
12:00	昼食 雨のためバスの中で昼食	●Kitchen marco お弁当 (揖斐川町の山菜・野菜など)
12:30	【揖斐川町】 徳山会館 見学	<ゲスト>徳山会館館長 中村治彦さんの話・意見交換
14:00	出発→移動	
14:45	【揖斐川町】 揖斐川歴史民俗資料館 見学	<ゲスト>揖斐川歴史民俗資料館館長 古野幸博さんの話・意見交換
15:30	出発→移動	
16:30	【輪之内町】 輪之内町エコドーム 見学	<ゲスト> NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長 安田 裕美子さんの話・意見交換
17:30	夕食・子ども食堂「このゆびとまれ」	色々な事情で十分に食事ができていない子どもたちや一人暮らし高齢者への夕食を提供している食堂。
18:15	懇親会 輪之内町の水害の話 輪之内町の農業の話	<ゲスト> 加藤正昭さん（輪之内町住民） 國島まきさん（輪之内町住民）
19:00	出発→移動	
19:30	【桑名市】宿泊場所到着 オリエンテーション	●翌日のスケジュールの確認
20:00	自由時間/就寝	

■2日目/11月12日(日)

Time	場所	詳細
5:30	起床	
6:00	出発→移動	●バスの中で朝ごはん 「桑ぱん」では「体にやさしく、おいしい」全粒粉パンを作りたいとの思いから国産小麦100%を使用。
6:20	【桑名市】赤須賀漁港 見学	<ゲスト> 桑名市立中央図書館館長 鈴木明さんの話
9:00	出発→移動)	
9:30	【桑名市】輪中の郷 見学	<ゲスト>輪中の郷 職員の方のお話 伊東和也さんの話
10:30	出発→移動	
11:00	【桑名市】赤須賀漁港 セリ見学	<ゲスト>赤須賀漁業協同組合 伊藤秀治さん
11:20	昼食	●ランチ「焼きはまぐり定食」
12:30 (60)	【桑名市】はまぐりプラザ	<ゲスト> 赤須賀漁業協同組合青壮年部研究会 貝増商店 服部高明さん
13:30	【桑名市】 ツアーふりかえり（はまぐりプラザ）	●ツアーで気づいたこと、感じたことを共有。
15:00	出発→移動	
15:30	桑名駅 東口 解散	

<主な内容>

上流域では、環境学習等拠点3ヶ所と地元住民、中流域では3拠点と地元住民、下流域では2拠点と地元住民による体験、対話による学びあいを1泊2日、ツアーという形で実施した。

参加者は、揖斐川流域の高校6校の高校生16名であり、引率教員、プラットフォーム会議メンバーの参加も得た。

1日目は、揖斐川上流及び中流の施設等（生命の水と森の活動センター、徳山会館、揖斐川歴史民俗資料館、輪之内町エコドーム、子ども食堂）を訪問した。上流域では、森林の様子と課題、徳山ダムの歴史的経緯、ダムに沈んだ村の生活、揖斐川の舟運等かつての暮らしと生業、中流域では、水害対策や揖斐川の水利用など、揖斐川と流域に暮らす人々の近い関係性、さらには上流域から中流域にかけてのつながりについて学んだ。流域の地域性を体感するプログラムを行った。

2日目は、早朝の下流域の赤須賀漁港の漁を見学、セリの見学、赤須賀漁協青壮年部からの説明とインタビューを行い、下流部の川及び漁業（はまぐり、シジミ漁）の過去や現状について、また漁師という職業について、将来の赤須賀漁港での漁業についての学びを得た。途中、輪中の郷に移動し輪中の歴史、暮らしを模型や展示を通して学んだ。本ツアーのふりかえりとして、高校生全員による気づき、学びを発表する「1分プレゼンテーション」を行い、共有をした。

ツアー中の食事、お茶などは、各流域の地域の自然の恵みをふんだんに使用したメニューを提供した。

〈ふりかえりワークショップで出された高校生の気づき〉（一部抜粋）

[上流]

- ・落葉樹の下は土がやわくなる。
- ・子ども達と協力して森を戻す
- ・DVD で徳山村の様々な人々の思いや決意が伝わった。
- ・徳山ダムのお話を、体験者から聞いて、徳山村が村全体で支え合っていたことを知った。
- ・自分たちの豊かな生活は多くの人や自然の犠牲の上に成り立っていることを改めて、感じた。
- ・自然を守るのとはかかっておくことが守ることじゃなくて、手入れをして守る必要がある。
- ・昔の人たちはもっと自然と近しかったんだと知った。

[中流]

- ・考えを貫けば、おのずと人はついてきてくれるということ。
- ・エコドームで言われた自分が大切だと思ったことを貫くとそれがあたりまえになったりする。
- ・子ども食堂での食事の様子を見て、とても温かいと思った。
- ・地域のことに目をむけることが大切。人々が協力してこそ、いい地域ができる。
- ・ども食堂のごはんがとても美味しく、幸せになれた。地域のつながりを重視し、皆が関わりあって生きていけるのはすてきなことだと思った。
- ・に水がつかった年の次の日は肥料がいらないくらい栄養豊富で驚きました。
- ・輪中は長い年月をかけて工事されてゆき、細い流れがなくなり洪水が起きなくなった。

[下流]

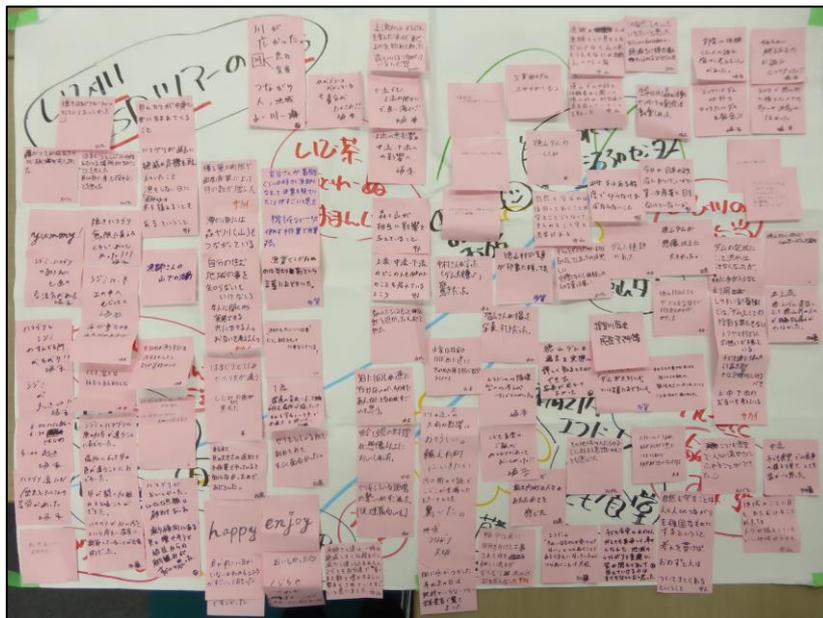
- ・岩谷さんが高校生ぐらいの時から漁師になるって決意を持っていたことがすごいと思った。
- ・機械など一切使わず手作業で作業する。
- ・漁業で人が死ぬのは当たり前という言葉に驚いた。
- ・「漁師はカッコいい仕事」だと自信をもって仕事をしている。
- ・来るまで貝の大きさの選別を手作業でやっていると知らなかったのでおどろいた。
- ・セリをしている現場の勢いがすごかった。

[流域]

- ・上流から、養分を含んだ水が来ているのを初めて知った。森と川はつながっているんだ!!
- ・森と山が相互に影響を与えている。
- ・海の漁には森や川（山）もつながっている。
- ・環境の変化によって生物が住む場所が減っていて、それを守るという点で共通点を感じた。
- ・絶滅の危機から様々な努力をし、資源を増やす。今ある資源を未来に残すため厳格な資源管理。
- ・ハマグリが 10～15℃という冷たい温度に調節していることが印象的だった。
- ・ハマグリ漁にも歴史とたくさんの苦労があった。

- ・上・中・下流のお互いを考えている。
- ・人々の協力なしで、解決できない多くの課題。
- ・自然を守るということは人と人とのつながりを強固なものにすること。
- ・上流、中流、下流のどこの人も他のことを考えている。
- ・自分の住む地域の事を知らないといけない。
- ・本人に聞くから実感できる
- ・ともに生きる人々、お互いを考える人々。

＜ふりかえりワークショップの様子と成果物＞

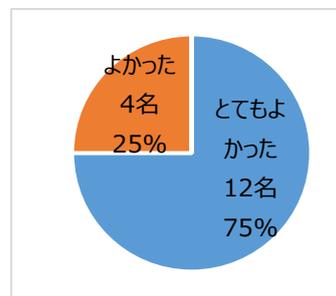


<揖斐川流域 ESD ツアー 高校生アンケート> (一部抜粋)

回答者 16 名 / 参加者 (生徒) 16 名中

■ 揖斐川流域 ESD ツアーに参加してどうでしたか。

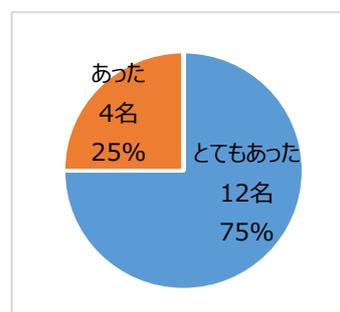
とてもよかった	12 名
よかった	4 名
ふつう	0 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名



- ・普段学ぶことができない上流～下流域について学ぶことができた。
- ・直接聞くのが難しい人達の生の声を聞くことができた。
- ・私たち高校生が中心となって、いろんな人たちの話を聞け、楽しく学べたから。
- ・他校との関わりもでき、環境のことも学びました。
- ・揖斐川流域に住んでいる高校生の色々な目線から環境問題を考えることができ、ああこんな感じ方があるんだと何回も思い、ものすごく楽しかった。
- ・初めての知識、人との出会いがとても貴重なものであったから。森、川、海のつながりの大切さを知ったから。
- ・自分の住んでいる町と違う地域の歴史を知れて、とても面白かった。
- ・色々な人に会えた。その中でも漁師さんと話せてよかった。

■ 揖斐川流域 ESD ツアーに参加して、学び、気づき、得るもの等ありましたか。

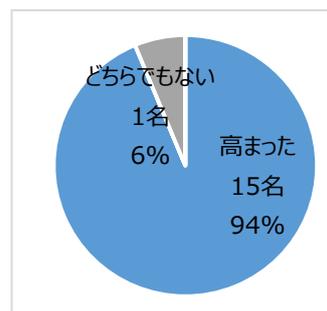
とてもあった	12 名
あった	4 名
あまりなかった	0 名
なかった	0 名
どちらでもない	0 名



- ・ダム completion によっていろんな事が変わったこと。
- ・実際に体験した人の思いまで知れた。
- ・ダムに沈んだ村があったことや今のことを知れた。
- ・上流、中流、下流どこにでも課題があったのが分かった。
- ・特に普段聞けないような漁師さんからの話を聞けたり、現場の人の話に重みがあった。
- ・海と森がつながっているということを実感できて、より自然を大切にしようと思えた。
- ・ツアーすべてがほとんど初めてだから全部が学びです。
- ・最後に言われた SDGs にすごく興味をもった。「持続可能」「循環型」の本当の意味がわかった。
- ・森の広葉樹の大切さや、地域における課題があり、その解決には人々の協力が必要不可欠である。
- ・海の環境がいいのは川がきれいだから、そして山が健康だからというすべてつながっているんだということがよくわかり、一人一人が意識して守っていかねばならないと教えてもらいました。
- ・ダムに沈んだ色々な思いや漁師の人々の努力が分かったから。

■ 揖斐川流域への関心が高まりましたか。

高まった	15名
高まらなかった	0名
どちらでもない	1名



- ・問題点がいっぱいだった。
- ・他の地域を知る事はどんどん自分の知らない世界を知る事と同じだと思った。
- ・いび川について上流から下流までの水の色もかわって関心が高まった。
- ・上流～下流域を実際に行って、つながりがよくわかり、より一層興味がわいた。
- ・川によって、遠くの人たちと私たちはつながっているということに感動した。
- ・自分の常識をくつがえすようなお話をいただいた。
- ・自分の高校にも関わってくるから、もっと知りたいと思えた。
- ・知らないことを知り、自分の周りの人などに少しでも広がって伝えたいと思った。
- ・ものすごくよい体験になった。でも、この体験をしたことで揖斐川ではなく、自分にとっても関係のある他の川をもっと知りたいなと思った。

■ 上流地域、中流地域、下流地域、今回のツアーで出会った方へのメッセージをお聞かせください。

[上流地域]

- ・地域の食材を使ったお弁当はすごくおいしかったし、ダムには様々な思いがたまっている事がわかりました。
- ・徳山村の人を想う気持ちがあったからダムができた。でも徳山村の人々を忘れてはならない。
- ・森について正しい知識を得られた。
- ・自分の自然に対する考えをほとんどくつがえされました。森の恵みを感じました。ありがとうございました。
- ・田中さんの言葉を聞いて、日本政府の地域への関心のなさを感じたため、なにか自分からも動いてみたいと思った。

[中流地域]

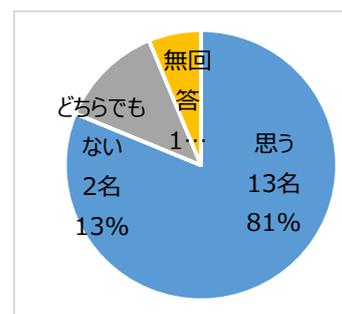
- ・地域のつながりを大切にして、育て上げられた野菜などがすごくおいしかったし、ごみがきれいにい出されている事に驚きました。
- ・エコドームの「あたりまえ」を自分の学校でも「あたりまえ」に出来るように取り組んでいきたいと思いました。
- ・関わりを大切にしたいと思いました。
- ・資料にはあまり載らないような小話を聞くことができ、本当に楽しかったです。
- ・輪之内町のあたたかさ心打たれた。自分もそんな村に住みたい!!

[下流地域]

- ・漁師の人々の努力により今もおいしいはまぐりを食べられていることがわかったし、かっこいいと思いました。
- ・岩谷さんの話を聞いて言葉では表せないほどかっこよかった。
- ・生物が住む場所を守るという点で、私たちはハリヨの調査をしているため、共通点を感じました。
- ・家が山のほうで、川や海とは縁がないと思っていましたが、むしろ逆だということを実感しました。ハマグリを再
- ・漁師さんたちも植林していると聞いて、すごいなと素直に思った。

■ 揖斐川流域 ESD ツアーを継続したほうが良いと思いますか。

思う	13名
思わない	0名
どちらでもない	2名
無回答	1名



- 揖斐川流域 ESD ツアーをもっとこうしたい、こうだったらいい等ご提案、アイデアをお聞かせください。
- ・中 2 のいとこが参加したいと言っていたので、今後も企画してほしいです。
- ・バス内等で話し合いながら意見を深めたい。
- ・いろいろな人との関わりを通じて知ることは、記憶に残りますし、重みがあります。正直そこまで環境に興味があったわけではない私も、ツアーではすごく好奇心をくすぐられる良いツアーだったので、継続すべきだと思います。
- ・このことを少しでも多くの人に知ってもらい伝え続けなければならない。

<当日の様子> 1 日目



生命の水と森の活動センター



徳山会館



田中正敏氏の話聞く



揖斐川歴史民俗資料館



輪之内町エコドーム



子ども食堂



ふりかえりタイム



記念写真

〈2日目〉



赤須賀漁港



赤須賀漁港



輪中の郷



貝増商店



赤須賀漁港 漁師さんにインタビュー



はまぐりプラザ

＜揖斐川流域 ESD ツア-広報チラシ＞

揖斐川流域の高校に通う高校生のみをのぞいて
揖斐川流域 ESD ツア

揖斐川流域ESDツアーは、揖斐川の上流から下流の自然や地域の人々との出会いを通して、揖斐川の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
今回は、ぜひみるべきとして、揖斐川流域にある高校の高校生を対象に行っています。



2017年11月11日(土)～12日(日)

●集合 11月11日(土) 9:00 大野駅 ●解散 11月12日(日) 15:30 森本駅

【参加費】 無料 (現地参加費 別途お申し込み) / 三重県参加費

●今年度参加の高校生がいる高校
 岐阜県立揖斐高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校

プログラム

【1日目】
 9:00～10:30 大野駅集合・移動
 10:30～11:30 生命の水の活動センター (森本駅集合)
 11:30～12:00 移動
 12:30～14:00 飯山山荘 (飯山駅集合)
 14:00～14:45 移動
 14:45～15:30 揖斐川歴史資料館 (揖斐駅集合)
 15:30～16:30 移動
 16:30～17:30 飯之内町エコーム (飯之内町集合)
 17:30～19:00 夕食・懇談会
 19:00～19:30 移動
 19:30～20:00 エコエントランス

【2日目】
 6:00～6:30 起床・移動
 7:00～9:00 伊藤先生 (伊藤先生集合)
 9:00～9:30 移動
 9:30～10:30 飯中の橋 (飯中集合)
 10:30～11:00 移動
 11:00～13:30 飯土蔵でくまの物語 (飯土蔵集合)
 13:30～15:00 ツアーふりかえり / 各々がエコームを制作する
 15:30 森本駅解散

※各学年別で、プログラム上流より下流まで移動する場合があります。
 詳細についてはお問い合わせください。

【お問い合わせ先】
 下流の高校に申し込みを、上流の先生に連絡し各校に FAX もしくは Email で申し込みください。
 事務局 岐阜県立大野高等学校 ESD推進センター (伊藤先生) / 057-218-4450
 事務局 岐阜県立大野高等学校 ESD推進センター (田中先生) / 057-218-4450
 TEL: 057-218-4450 FAX: 057-218-4600 E-mail: ofbc@ip-pchubu.jp

【2017年11月23日現在】

「揖斐川流域 ESD ツア」参加者一覧	
学年・高校	
高校生	伊藤先生
学年	

※個人による変更や、未参加者の訂正はご遠慮ください。

＜揖斐川流域 ESD ツア-報告チラシ＞

揖斐川流域の高校生と揖斐川流域をめぐり、未来のヒントを見出したい。
揖斐川流域 ESD ツア
2017年11月11日(土)～12日(日)

●参加校数: 高校生116名
 岐阜県立大野高等学校 (岐阜県飯本地区) 3名
 ●スタッフ数: 21名

【揖斐川流域 ESD ツアとは?】
 揖斐川流域の自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。今回は、ぜひみるべきとして、揖斐川流域にある高校の高校生を対象に行っています。

【今年度参加の高校生がいる高校】
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校
 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校 岐阜県立大野高等学校

【参加校数】
 2017年11月11日(土) 大野駅集合 11:30 森本駅解散

【参加費】
 無料 (現地参加費 別途お申し込み) / 三重県参加費

【お問い合わせ先】
 下流の高校に申し込みを、上流の先生に連絡し各校に FAX もしくは Email で申し込みください。
 事務局 岐阜県立大野高等学校 ESD推進センター (伊藤先生) / 057-218-4450
 事務局 岐阜県立大野高等学校 ESD推進センター (田中先生) / 057-218-4450
 TEL: 057-218-4450 FAX: 057-218-4600 E-mail: ofbc@ip-pchubu.jp

【2017年11月23日現在】

「揖斐川流域 ESD ツア」参加者一覧	
学年・高校	
高校生	伊藤先生
学年	

※個人による変更や、未参加者の訂正はご遠慮ください。

【上流から下流へ】
 ●上流から下流へ、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【下流へ】
 ●下流へ、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯中之橋】
 ●飯中之橋、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯土蔵】
 ●飯土蔵、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯土蔵でくまの物語】
 ●飯土蔵でくまの物語、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯土蔵でくまの物語】
 ●飯土蔵でくまの物語、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯土蔵でくまの物語】
 ●飯土蔵でくまの物語、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

【飯土蔵でくまの物語】
 ●飯土蔵でくまの物語、自然の恵みや、山、川、川沿いの風景や生き物など、地域の人々の生活や文化の大切さを知り、流域から持続可能な地域づくりのヒントを探るツアーです。
 ●今年度参加の高校生がいる高校

<成果>

ESD 教材に掲載されている拠点や人々、地域の課題をすべて網羅した企画となった。1泊2日という限られた時間を最大限に活用したため、タイトなスケジュールのプログラムであったが、上流から下流までの風景、人々、暮らし、歴史に触れ、それらの変容とそこに暮らす人々の言葉から「つながっていることがいかに大切か」に気づいた。「流域の大切さ」という当企画のコンセプトに対する気づきや学び、高校生が「流域に関心をもつのか」「流域への理解やそこに暮らす人々への共感は生まれるのか」についてもふりかえりのコメントやアンケート内容から達成されたことが読み取れる。

また、今回は ESD 実践であるため、最低限の情報・知識を提供するのみで、自分で見て考え、地域の人々に質問をし、仲間と共有をし、気づきや学びを深めるというプロセスをとった。その手法が今回参加する高校生にどの程度響くかについてもスタッフ間での重要課題であったが、高校生は今の高校生の持つ知識、情報、学習意欲、好奇心によって、「伝えたいこと」をしっかりと受け取った。現場の人の本心、本音、生の言葉からの共感による学びができた。

さらに、上流、中流、下流の拠点、人々すべてが「つながる」「流域」という視点で実感を込めて語られたことでさらに共感性が増した。昨年度 ESD 教材を連携して作成した成果だと捉えている。各拠点のみの学習ではここまで「つながる」「流域」という視点での気づきはなかったであろう。

各拠点と連携して作成した ESD 教材で学び、各拠点のある地域をめぐり、出会い学びを深める、このプロセスの重要性を高校生のコメントや変容する姿から明らかになった。

<アドバイザーのコメント>

揖斐川流域には、もともと地域ごとに地元を理解するための施設が点在しており、そこでは揖斐川での歴史や特徴を紹介している。今回のツアーでは、これまで個別に行われていた各施設とその活動を、揖斐川という大きな主題でつなげて、流域を理解するという展開をはかっている。このツアーによって、上流の地点の活動が下流に、また下流域の活動が上流にという視点をもって、提供側も参加側も揖斐川を流域として意識できるようになっているのが特徴である。

今回のツアーの参加者は高校生を対象としている。高校生はいろいろな可能性や能力を有しているが、それを発揮する機会が少ない状況にある。行動するためのきっかけとして、このようなツアーを企画することで、高校生の豊かな感受性や行動力を呼び起こすものであると考えている。今回の参加者は、まさにそのことを裏付けるような発言や感想、行動を示してくれたものと思う。今後、地域の原動力となる若者に、きっかけを与えるような企画、さらにその後の活動を支援する拠点を提供する意味で、今回のようなツアーは非常に意義深いものと考えられる。

(イ) 揖斐川流域未来フォーラム

<目的>

揖斐川流域 ESD ツアーに参加した高校生による報告と、揖斐川流域ツアーで学んだことの共有、持続可能な揖斐川流域へのヒントを探るワークショップを高校生が主体的に行い、ツアーに参加した高校生、ツアーに参加していない高校生、一般市民などに「流域でつながることの大切さ」や、こうあってほしいという揖斐川の未来像を伝える。

<概要>

日時：平成 30 年 1 月 20 日(土) 12:00～16:30

場所：くわなメディアライヴ

参加者：69 名（高校生 21 名、高校教員 11 名、一般 31 名、地方事務所 1 名、EPO 中部 5 名）

<スケジュール>

12:00～13:00：ランチ 高校生コミュニケーション TIME

13:30～14:30：揖斐川流域環境学習拠点等連携事業の紹介

14:00～14:30：高校生の報告～高校生によるツアー報告と各高校の取組紹介

14:30～15:30：揖斐川流域の未来を考える SDGs ワークショップ

15:30～16:00：流域発地域、世界への発信

<主な内容>

「流域から持続可能な地域を語る～高校生が見つけたこと」をタイトルに、揖斐川流域 ESD ツアーに参加した高校生を中心に、ツアーの報告、高校生が取り組んでいる環境活動の紹介をした。

発表の内容には、流域で各地域を思いやる人々の存在やつながりの大切さ、森と川、海のつながり、環境を守る意味や大切さ、食の大切さなどのコメントが多くあった。

後半の「揖斐川流域の未来を考える SDGs ワークショップ」は高校生が中心となって 4 つのグループに分かれて、ツアーで見て聞いたことや、自分の学校取組、参加した一般の方の活動などを、SDGs の 17 の目標に照らし合わせ、揖斐川流域の持続可能性、未来を可視化するワークショップを行った。それぞれの地域や分野だけでは達成できない目標でも連携することで達成に近づくこと、流域全体を一つに見立て活動や人々をつなげていくことが持続可能な未来につながっていくことなどを発表し、共有した。

● 高校生の報告～高校生によるツアー報告と各高校の取組紹介（一部抜粋）

岐阜県立池田高等学校

特に印象に残っているのは「赤須賀漁港」と「揖斐川歴史民俗資料館」である。ここでは川の生み出す豊かな恵みとそこに暮らす人々の姿に感銘を受けた。「揖斐川歴史民俗資料館」には船やいかだによる舟運に関係する資料があり、揖斐川流域の人々は川と共に生きてきたということを実感した。そこで改めて気づいた事は濃尾平野の人々の暮らしは水と共にあってこれからも同じということである。豊かな水環境のある濃尾平野のその豊かな水環境の元に人々が集まり豊かな文化や生活を築いたことが今回のツアーでよくわかった。その豊かな環境と昔からの人々の暮らしが共存することによって豊かな生態型そして魅力ある揖斐川流域の

文化や資源を生み出していることがわかった。

現在地域の魅力を発信する、持続可能な社会を目指すことが言われているが、地域の魅力も人々の社会も豊かな環境が支えていることを忘れてはいけない。豊かな水環境上に今後地域の文化や祭りそして食文化が作られてき。豊かな水環境を守ることが持続可能な社会の発展において、この地域においては1番大切な事ではないか。これを再認識出来たことが揖斐川流域 ESD ツアーに参加した1番の意義だ。

池田高校のある池田町にはハリヨが生息している。ハリヨは西濃地区と滋賀県を残して絶滅している。ハリヨを守ることは私達の住む池田町の環境を守ること、そして豊かな環境を守るとは私達の住む池田町の魅力的な文化や社会を守ることにもなる。これは池田町のハリヨだけでなく全ての地域に言えることだと思う。

現在日本にある豊かな生態系の上に人々の歴史や文化はある。生態系を守ることが魅力的な社会を守る。今回ツアーに参加しそのことを再確認すると同時に、普段保護活動をしている中川本流である揖斐川全体の姿に興味をもち、また理解を深められた。これからは揖斐川の生態系を把握し、出来れば保護に関わる研究活動も同時に行い、濃尾平野の魅力を後世に残していきたい。今回のツアーに参加出来て大変有意義な体験ができ、普段の生活の大切さも理解できた。

岐阜県立不破高等学校

上流地域の徳山会館では、徳山村という大きな犠牲の元に徳山ダムが成り立っていることがわかった。同級生にも聞いてもらいたい貴重な話だった。川とともに歩んだ先人の足跡を知ることができ、とても貴重なものが見られて勉強になった。中流地域の輪之内町エコドームでは輪之内町の人々がみんなで協力して自然を守ろうとしていて素敵なまちだと思った。揖斐川歴史民俗資料館では揖斐川町で栄えた舟運による貿易の様子を見学することができた。下流地域では漁師の方々から話を伺い、目先の利益だけを追求せず、各機関と協力し市民の教養の向上や健康の増幅を目標として活動しており、上流地域に植林などの活動を行い、山から海までの幅広い範囲での環境を良くするために活動していることを聞いた。下流の人達のために川にごみを捨てている人がいれば注意していきたい。上流、中流、下流を通して全ての人々が川に関心を持って生活しないと川が衰退していってしまうと思うので、SNSなどで川や徳山村について発信していきたい。

学校の自然科学部でニホンジカについての研究をしている。現在、ニホンジカの個体数が増加傾向にあり農林業や生態系の被害が多く報告されている。南宮山に生息するニホンジカに関する生態学的研究をした。人が生態系に積極的に関わりつつ生態系を保全する「住民参加型保全」を目標としている。野生のニホンジカを放っておくと山の植生の植物が減って山が衰退する。ニホンジカを捕獲して人とシカが共存出来るようにしたい。自然に関わることは山も川も同じく人が川を汚したりして川が衰退してしまう。山と一緒にもっと自然と人間が関わっていかないと自然が衰退してしまう。

岐阜県立大垣東高等学校

今回の揖斐川流域 ESD ツアーによって上流から下流までの水の流れについて学ぶことができた。定期的に人の手が入る広葉樹森は水を多く蓄えて少しずつ流し、ダムによって大雨でも川の水量を調節して洪水を防ぐ。この流れを知っている漁師さんたちは森に木を植えることで栄養を含んだ水の流れを保つ。この流れは私達の生活や、水中や水辺の生物に大きく関わる。大垣東高校の自然科学部ではハリヨの研究と保護を行っている。ハリヨは生息条件の厳しい魚であるため、水温や水質、水深などが大きく変化してはいけない。

今まではハリヨの住んでいる池についてしか考えていなかったが、より広い視野で物事が見られる良い機会になった。これからは上流や下流、またそれらを整えるために影響を受ける人々のことを、より深く考えていきたい。

三重県立桑名高等学校

揖斐川を含め木曾三川の知識は全くない状態でこのツアーに参加した。ショートホームルームで担任の先生がこのツアーを紹介してくれて、少しでも桑名のことを知ることができたらいいと思いこのツアーに参加した。今回のツアーで出会った人達は、川の中流で暮らす人は、上流下流の事を、下流に暮らす人達は、中流上流のことを考えて生活していることがわかった。これが“つながっている”ということだと思った。

私は津に流れている中ノ川の近くに住んでいる。草ばかりで川の水も濁っているし、汚いなとしか思っていなかった。生態系や川の流れ、人の暮らしなど何も考えずに通り過ぎていた。ツアーを終えて、生態系について考えるようになり、自分にできることは何だろうかと考えた。ごみを捨てない、周りの人に働きかけるというような小さなことですが、実践していきたい。

桑名高校の衛生看護科に通っていて、将来看護師を目指している。私はコミュニケーション能力が大切かを感じた。コミュニケーションから患者さんの気分を察し状態を判断し、安全安楽につながられるような援助ができるようになりたい、と日々勉強に励んでいる。

今回出会った皆さんも、コミュニケーションを通して山や川を守っていると感じた。思いを伝え合い、自分たちができることを続けている。コミュニケーションの大切さを知った。たくさんのことを教えていただきました。

学校法人津田学園津田学園高等学校

この2日間で環境のことを一生懸命考えている人達にたくさん出会った。その中で感じたことは、みんな他の人のことを思っていることである。例えば上流の人は下流のこと、エコドームの人は地域の人のことを思っていたり、下流の人は上流の人に感謝の意を持っていたりして、人のことを思っていることをすごく感じた。人を思いやる気持ちが環境を思いやる気持ちを生み出すのかと思った。このツアーを通して、周りに人を思いやることの大切さを伝えることが、環境を守ることに間接的につながるのではないかと思った。

学校法人梅村学園三重高等学校

科学技術部では松名瀬干潟、巻貝について調査をしている。松名瀬干潟に異なる3つの環境の干潟があり、3つ残されていることがすごく貴重だとされている。松名瀬干潟は伊勢・三河湾の中でも生物の種類が1番多く記録されている豊かな干潟だとされている。海と川とつながっているということで森の環境にも目を向けてみよう、現状の環境を調べてみることから始めた。

このツアーに参加して豊かな山があって、豊かな栄養が川を伝ってそれぞれの地域に様々な産物を生み出すそのつながりと、流域に住む人々は揖斐川の事を考えて様々な活動をしているという人々のつながりをすごく感じた。このことから山、川、海の繋がりについて意識することを知り、これからはもっと広い視点で物事を考えていこうと思った。また今回出会い、話を聞いた方々は、赤須賀漁港は若い人の活躍はあったが、他の地域ではあまりそういう話は聞けなかったのもっと若い人にこういうことを知って活動してほしいと思った。

少し視点を変えてダムから考えたことを発表する。たくさん話を聞いてダムには良いところも悪いところもたく

さんあることがわかった。結局ダム建設はやってよかったのかな？ダムは必要やったのかな？と私の中に残ったが、簡単に結論が出せる問題ではないと思った。この問題の解決策はすぐに出てこなく、それを導き出すことが大事だが、まずこの現状を知ることが大事かと思ひ、それを知ることが出来た。ツアーではすごく良い経験をさせてもらった。

● 揖斐川流域の未来を考える SDGs ワークショップ^o（一部抜粋）

テーマ：ワークショップの感想と未来に向けて大切に思っていること

Cグループ

やってみて文字にすることが難しいと思った。すごくたくさんのことを学んだが、文字にしてどうまとめたらいのかをすごく考えた。SDGsのマークを貼っていく時に「ジェンダー」がどこに繋がっているのかわからなくて、それだけはどうしても貼れなかった。頑張って考えてはみても環境とジェンダーのつながりが見えてこず、悔いが残った。「揖斐川流域の未来を考える」ために、上流、中流、下流の人々との直接的なつながりを増やすことを考えた。上流には若い人がいなくて困っていると聞いた。上流は下流に少しでもいい水を届けるために努力をし、下流でいい魚が獲れるようになると下流の経済がまわって潤う。上流にもそういうメリットがないと若い人が来ない。僕達の結論として、「上流、中流、下流の直接的なつながりを増やす」ことが大事である。



Bグループ

僕は実際にそのツアーにも参加しておらず、実は揖斐川についてあまり知らない状態でフォーラムに参加した。住んでいる人それぞれの揖斐川に対する思いが確かで、しかもそれぞれの思いが最終的につながってくるということの印象を持ち、にすごく感銘を受けた。

これからについて出た意見は、「まずは現状を知らないといけない」、そして「全体的に知る」が大事になっていくと思った。「地球温暖化防止のための活動が重要」、「環境は違うが考えられることは一緒に、最終的に

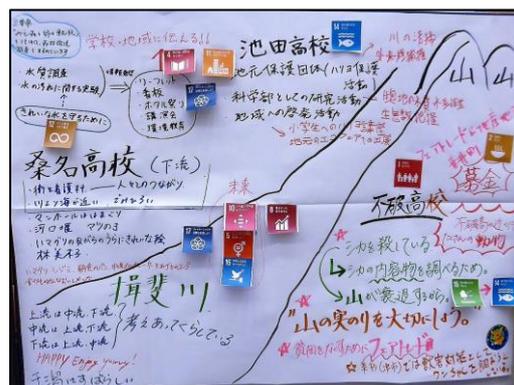
行き着く先は同じで全部つながっている」、他にも「川だけでなく山、海の全体的なつながりも大切に」という意見や「支えてもらっているから自分達が支えていこうという思いが大事」という意見も出た。

このツアーから「持続可能な社会」が何か？と考えると、「持続可能な社会」というのは自然だけではなくて人間、社会といったつながりがあって、それが持続的につながっていく、みんながこれこれ、それぞれ、こうつなげたらどう考えるということ。実際にこの揖斐川のツアー、フォーラムには、人々のつながりや自然への思いがあつてつながっていくんだと気づき、すごくいい機会になった。



Aグループ

池田高校科学部には SDGs 目標 14「海の豊かさを守ろう」が貼れたが、家庭クラブではあと4つのSDGs マークが貼れたり、池田高校以外なら池田高校のしていない活動にも貼れて、自分の取り組んでいることと、取り組んでいないことの協力が出来たら、17「パートナーシップ」と未来につながるにまともり、全部つながっていることがわかった。



「これからの未来につながること」は、自分の学校で出来ることをしっかり未来につなげていって、出来ないところを他の出来ているところで協力して全体的にやっけていこうと、揖斐川の上流から下流、海につながって、未来にいい自然が残せると思った。

全然興味なくてお出かけ気分であつたが、話をいろいろ聞いて、ツアーにも行きたくなって、後悔した。結論を言うと、全部つながって、全部幸せにつながるのだから、各学校の活動もすごく、これからも大事になってくるからやり続けなくてはだめだということである。各学校全部別の活動だが、別々ではなく1つの活動にしていきたいと

思った。

Cチームでジェンダーが貼れなかったと言っていたが、このグループでは貼った。真ん中に未来と書いて貼っており、皆がつながっていったら平等や不平等が無くなっていった結局は平等につながる。環境と関係がないかもしれないが、環境に企業や今回のツアーをしてくれた人々、私達がつながることで目標が達成するだろうと考えた。

Dグループ

ツアーにも行ってなく、環境にもあまり興味がなかったが、今回の揖斐川の話聞いて、ダムイメージは最初洪水を止めてくれるでかいものという印象しかなかったが、水質にも影響があるなどのデメリットがあることを実感し、驚いた。

僕の住んでいる地域の川はすごく汚い。学校の先生に聞くと80年前はすごくきれいで泳いでいたというが、汚すぎて泳いでいたことが想像できない。池田高校の実験で水が汚れていく様子を見て、こんなものを捨てたり、油を出したりしたら水質が変わってしまうという驚きもあって、価値観がいろいろ変わった。

興味がなくて参加したという人もいるが、こういうイベントやツアーで参加した人は、少しはこういったことについて興味があって参加していると思う。実際は、こういうことに全く関心がない人のほうが多分多いと思うので、私達が、環境が段々悪くなっていくことを伝えていくべきだと思った。

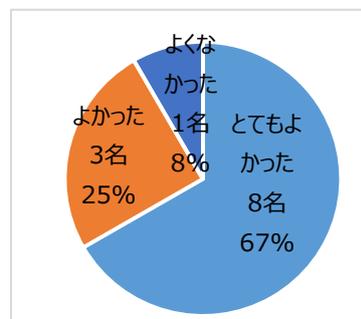


<参加者アンケート> (一部抜粋)

[ツアーに参加した高校生 回答者 12名/参加者 12名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

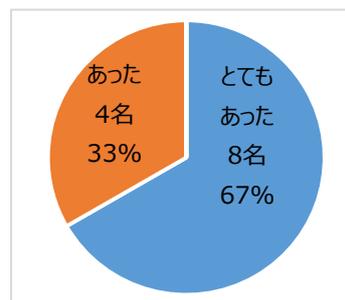
とてもよかった	8名
よかった	3名
ふつう	0名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	1名



- ・他校の発表からもいろいろなことを学べた。
- ・あまり興味のなかった自然に関心をもつきっかけになった。
- ・ツアーに参加した他の高校の人がどのように感じたのか、また活動についても知ることができたから。自分の意見を発信できる機会となったから。
- ・ツアーで思ったことが、この大きな場で様々な事をしている人たちと交流できてよかった。
- ・ツアー参加者以外とも交流できて、人によって全然違う意見や感想をきけて本当によかったです。
- ・自分がこれからどうい生活を中心に心がけていけば良いか知れた。
- ・自分の動植物・川に対する意見がまとまった。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

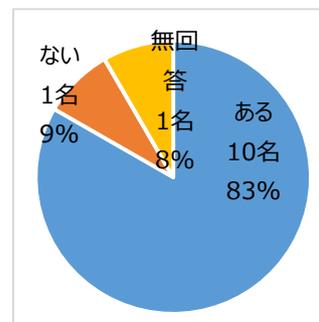
とてもあった	8名
あった	4名
あまりなかった	0名
なかった	0名
どちらでもない	0名



- ・知らなかったことばかりで、すべてが学んだ事でした。
- ・拠点の人からの学びということに気づいた。
- ・上流から下流の人々はつながっている。川も山もすべて大事。
- ・今回学んだ揖斐川流域だけでなく、もう少し視野を広げたら、もっといろんなことがあった。
- ・他の高校もさまざまな活動をしていた。(シカ、ハリヨなど)。再び流域の人の話を聴くことができた。
- ・最初は興味がなかったと言っていた人も興味があった人も最後に思うことはほぼ変わらないんだなということに気づいた。
- ・人間より上、下と決めず対等と考え生活するという事が分かったから。

■揖斐川流域 ESD ツアーの前と、今とで自分自身が変わったところがありますか。

ある	10名
ない	1名
どちらでもない	0名
無回答	1名



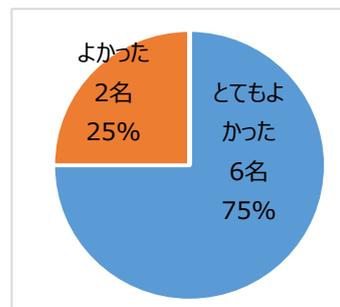
- ・自分の動植物への考え方が変わった。
- ・広い視点で環境を守りたいと思い始めた。
- ・将来何らかの形で環境にたずさわりたいと思った。
- ・多くの人と触れ合うことができ、自分のコミュニケーション能力の向上につながった。
- ・考え方が変わりました。環境を守るためには、人を守らなければならないと私は理解しました。

- ・地元の自然や川などの深みをしれて、地元の揖斐川を大切にしていこうという気持ちができました。
- ・多くの人と触れ合うことができて、自分のコミュニケーション能力の向上につながった。
- ・海・川・山は 1 つのものとして考えていたが、つながりが大切だと思うようになった。未来は自分たちにかかっていると感じた。
- ・自分達の川に対する見方や考え方が変わった。地元の方の話や歴史を知れて、見方が変わった。

[ツアーに参加していない高校生 回答者 8 名/参加者 9 名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

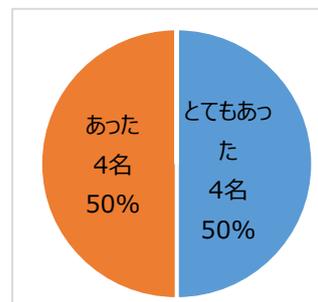
とてもよかった	6 名
よかった	2 名
ふつう	0 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名



- ・知らないことを知ることができたから。
- ・いび川のこともっと知れたし、すべて人々の幸せにつながるということが分かった。
- ・普段なら知る事のできない濃い話を聞いて学べて良かったです。
- ・他校で、川をどうすればきれいになるか、やっていることがわかりました。
- ・自分の価値観がガラッと変わった。
- ・グループワークがあって楽しかったし、意見を深めあえた。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

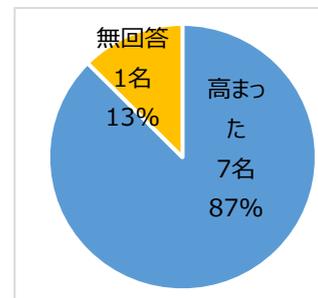
とてもあった	4 名
あった	4 名
あまりなかった	0 名
なかった	0 名
どちらでもない	0 名



- ・環境と人はつながっている。
- ・今、現在の揖斐川の状況を知れてこれからについて考えさせられました。
- ・ダムのことや川の水質変化。
- ・揖斐川上流～下流、海までつながっていて、全体が一つのものを守るために、活動していることが分かった。
- ・上流、中流、下流別々に考えるのではなく、つながりをもって考えることができた。
- ・人々、自分たちが水を汚しているということ。

■ 揖斐川流域への関心が高まりましたか。

高まった	7 名
高まらなかった	0 名
どちらでもない	0 名
無回答	1 名

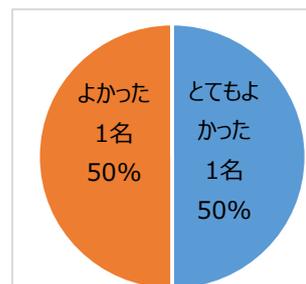


- ・今まで、環境とかには興味がなかったから。
- ・身近に感じていると思っていたけど、知らないことがたくさんあったし、中流、下流の方々とのつながりも大切だと知れた。
- ・揖斐川だけとは限らず、全ての川にあてはまる。川がいかに大切で地域住民が努力しているか。
- ・参加していなければ揖斐川について知りませんでしたが、いろんな場所・人によって考え方は変わり関心が高まりました。
- ・一つの川でのたくさんの活動や歴史を知ることができたから。
- ・揖斐川流域で、みんなが努力していることや他校とコミュニケーションをとることができて、楽しかった。

[ツアーに参加した教員 回答者 2 名/参加者 3 名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

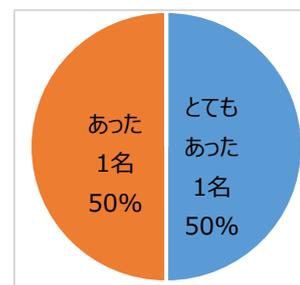
とてもよかった	1 名
よかった	1 名
ふつう	0 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名



- ・高校生たちの気づきがすばらしかった。機会があれば生徒たちは大人の想像以上に学ぶことを再発見した。
- ・生徒の学びは、学校だけにとどまらせてはいけないことを再認識できた。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

とてもあった	1 名
あった	1 名
あまりなかった	0 名
なかった	0 名
どちらでもない	0 名

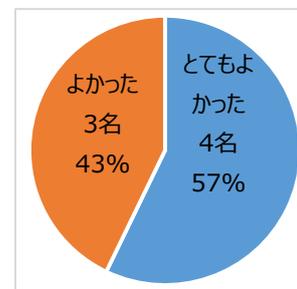


- ・高校生たちは自然体でどんどん学べる。知らないからこそ自由に・発見できるようだと気づいた。
- ・生徒たちが我々の想像以上に揖斐川について真剣に考えてくれたことがとても嬉しかった。

[ツアーに参加していない教員 回答者 7 名/参加者 8 名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

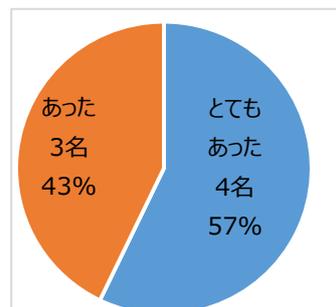
とてもよかった	4 名
よかった	3 名
ふつう	0 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名



- ・今日見ている中でも生徒の成長が見つかった。気づき、納得している姿、多面的に考えられるように。プログラムの運営が大変良かった。生徒全体を考えて進められていた。みんなが考える機会をつくってもらっていた。
- ・この場でしか生まれぬ発想、気づき、誰かと話すことで生まれるもの。そのようなものがたくさん見られた。
- ・ツアーに参加した生徒が参加していない生徒に学んだことを伝え、参加していない生徒が興味を持ち、考えるきっかけを得て、次はどんどん質問していく。このような生徒の動きが活発に見られて大変良かった。
- ・参加した 6 校の高校生からツアー報告と各校の取組を聴くことができ、彼等が揖斐川の自然、環境、歴史、生き物などについて真剣に考え、取り組んでいることを知るよい機会となりました。
- ・他校での取り組みについて知ることができた。
- ・「揖斐川流域未来フォーラム」に参加することで、池田町の東川だけにとどまらず、下流の三重県の高校生の方々にもお会いでき、お話を聞かせていただけたということは、有意義でした。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

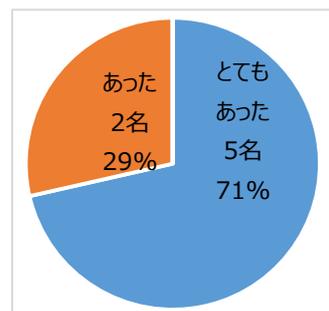
とてもあった	4名
あった	3名
あまりなかった	0名
なかった	0名
どちらでもない	0名



- ・ダムの良いこと・悪いこと、上・中・下流域それぞれの生活とそのつながり。
- ・答えがなかなか出ず、それに対して、考えることを生徒が気づいていたところ。みんな建設的に前向きに考えているなと思いました。
- ・環境や自然を守るためにどんな行動ができて、どんな行動が現に行われているのかを知ることができた。
- ・印象的な言葉が「上流の方々は、中流・下流の方々を生活をも考えておられる」ということでした。私どもの生徒もほたる祭のイベントをする（作る側）に参加させて頂き、「周りの人々の温かい気持ちと行動に感謝することが大事だ」と感じておりましたから、ツアーでの気づきはかけがえのないものになったと思います。
- ・長良川河口堰反対の水上デモに参加したことがあるが、当時赤須賀漁協の将来を危うく感じたが、若い漁業者も多く元気なことを知れてよかった。

■他校の発表や、高校生同士の意見交換による、学び、気づきなどありましたか。

とてもあった	5名
あった	2名
あまりなかった	0名
なかった	0名
どちらでもない	0名

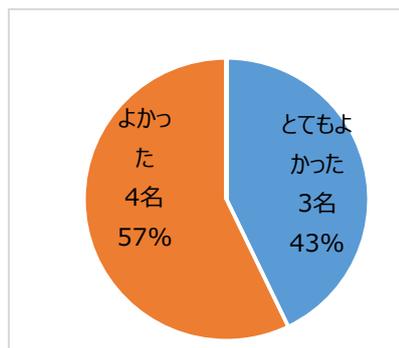


- ・想いを感じた。考えているなと思いました。
- ・生徒たちの発想の豊かさを再認識できました。
- ・ハリヨを守る活動は続けて欲しいと思った。
- ・話し方、伝え方がそれぞれ違っておもしろかった。興味のなさそうな子たちの意識が進化していくのがよかった。
- ・はまぐりを初めて食べておいしかったことなど高校生の素直な感想や、ダムに関わる環境問題などについて率直な意見を聴くことができて楽しかったです。また、地域、学校により取組に特色があってお互いから学び合い、刺激を受けることができたと思います。
- ・他の地域の高校生同士が交流を持つことで、普段自分たちが気づかないことに目を向けることができたと思う。
- ・ダムについては賛否両論あると思いますが、考えさせられました。

[関係者 回答者 7名/参加者 7名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

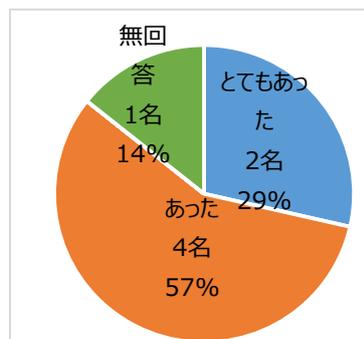
とてもよかった	3名
よかった	4名
ふつう	0名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名



- ・高校生たちの活躍につきますと思います。
- ・次世代の人材育成に高校生を対象にした事業は大変よかったと思う。
- ・高校生達が色々な地域で生の声を聞いて知識を広げられたこと。
- ・ツアー参加していない高校生がどの程度、主体的になれるかが心配であったが、予想以上に後半の活動では動けるようになっていた。
- ・高校生達が真剣に揖斐川流域のことを知ろう、学ぼうとしている様子に感動しました。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

とてもあった	2名
あった	4名
あまりなかった	0名
なかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	1名

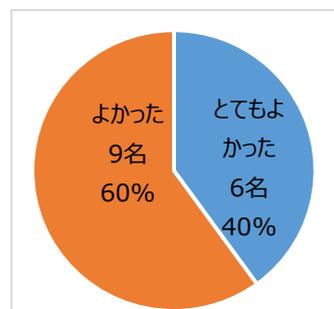


- ・自分の住む地域が他の地域とのかかわりについて学ぶ機会と関心を持つ事ができた。
- ・高校生たちの飲み込みの早さ。理解の深さ。SDGs は唐突では？との心配が杞憂だったこと。また、それとも関連するが、彼ら彼女らが想像以上に複眼的に物事をとらえている（SDGsのワークショップでの情景）ことも大きな発見。
- ・一般の人があまり知らないレベルで決まった SDGs という開発目標を、揖斐川流域という多様な問題を含んだ身近なフィールドに引き付け、さらに高校生個人レベルの実感にまで繋げると、十分に関心や討論が起こることを発見した。
- ・高校生同士が自分の体験や活動に基に、気づかされるなどお互いを刺激し合えること、学校が違っていても、共通する話題に対して議論などが積極的にできる。

[一般参加者 回答者 15名/参加者 21名中]

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加していかがでしたか。

とてもよかった	6名
よかった	9名
ふつう	0名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名

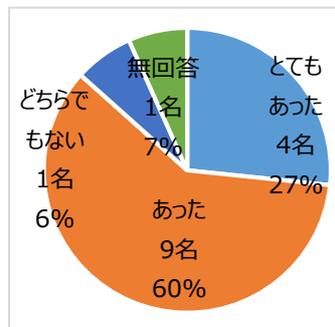


- ・高校生の視点がおもしろかった。
- ・高校生が生き生きと発表する姿に感動しました。
- ・小学生では環境学習の時間が設けられているが、高校生が上流から下流域まで自分の目で見えて話を聞いて感じ、思った事を発表したのも良かったし、発表の内容も良かった。
- ・高校生が自分たちの感性で自分たちの考えをそのまま伝えていたのが、良かったです。

- ・高校生の新鮮で真剣な学びを見ることができた。
- ・高校生が「変わった」という場面に参加できたこと。

■「揖斐川流域 未来フォーラム」に参加して、学んだこと、気づいたこと等ありますか。

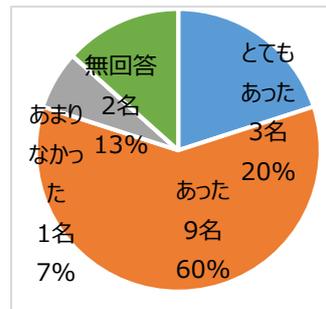
とてもあった	4名
あった	9名
あまりなかった	0名
なかった	0名
どちらでもない	1名
無回答	1名



- ・取組を通じて、高校生の意識が如実に高まることがわかった。
- ・ESD の一つの形態を見ることができた。
- ・今回のツアーがフォーラム等で高校生の学びは素晴らしいものがあると思いました。いろいろな面で力がついたと思います。このような高校生が増えるといいと思います。今後へつなげてほしいと思いました。

■高校生の発表や、高校生同士の意見交換による、学び、気づきなどありましたか。

とてもあった	3名
あった	9名
あまりなかった	1名
なかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	2名



- ・気がつかないところに高校生ならではの意見があって感動した。
- ・環境問題（SDGs）はすぐに答えがでないという気づきに、高校生が自ら気づいたこと。
- ・観察力がすごい。源流に住む人たちと源流から恩恵を受ける人たちが協同で資源を守るしくみをつくることの大切さ。
- ・環境問題（SDGs）はすぐに答えがでないという気づきに、高校生が自ら気づいたこと。
- ・「今、結論は出さなくてもよいと思う」という発言、とてもよかったです。昨今大切なことをしっかり議論せず、結論が出される世の中になってきましたが、じっくり考え、何が大切なのか、それぞれの立場を考えていくことが大切であることを高校生の方たちは今回の体験から学ばれたように感じました。
- ・高校生がツアーで学んだことを受け止め、理解していること。まだまだこれから答えを出したり、探求していく事があると思いますが、現実を見て、自分の言葉で発言し、行動していく姿が頼もしく思えました。発信していくことも大事ですが、自らの日常生活でも何か行動を起こして変化してくれると嬉しいです。

＜成果＞

ツアー実施後 2 ヶ月で開催したが、久しぶりに会った高校生（大垣東高校のみ欠席）はすぐに打ち解け、かつツアーに参加しなかった高校生の参加者もすぐになじんだ。午前のランチミーティング・交流会ではそれぞれの近況を報告し、午後のフォーラムの準備をすすめた。午前の打合せでは、今回 SDG s に関するワークショップを行う旨を伝えると、「やりたい！」と意欲的な高校生もあり、午後のフォーラムで報告できることや他校生徒とのワークショップを楽しみにしている様子が見られた。

当企画のねらいの一つである、「揖斐川流域 ESD ツアーでの気づきを伝える」については、高校生は日頃の環境等の活動紹介を交え、ツアーでの気づきや学びと関連づけて報告をした。また、SDG s に関するワークショップにおいては、ツアー最終日のわずかな時間を利用した SDG s に関するレクチャー、当日資料配布の SDGs17 目標と 169 項目に目を通す程度の事前の情報提供に留まったが、ツアー及び学校での活動にマーク付けをし、17 の目標を達成するためには何が必要なのかを各グループで考え、意見を出し合い、提案をした。

ESD 教材の活用、ツアーによる現場学習、フォーラムにおけるプレゼンテーション、ワークショップでの学び、このプロセスがまさに ESD であり、高校生のコメントやアンケート内容から、彼らの学びに効果があったことを捉えられ、ESD モデルの展開の可能性を見出せた。この成果は流域にある各拠点や人々の連携によって可能になった。

課題はこのモデルプロセスをどのように継続実施していくかである。対象、日程、揖斐川流域にある素材の組み合わせ方法など検討が必要である。

＜アドバイザーのコメント＞

高校生が中心となって、揖斐川の未来を語るフォーラムである。従来、このようなフォーラムでは、あるテーマにしたがって、話題提供者が一方的に話題を提供することが多い。しかしながら、今回のフォーラムは、「揖斐川流域」というテーマに対して、この流域を理解するためのツアーに参加した高校生、揖斐川自体についての興味はないが、高校で独自に活動を行う高校生が、それぞれの経験や体験を語り合い、その中で、自分たちが揖斐川に対して何ができるかを真剣に語り合う場となっていた。ツアーに参加したことで、揖斐川流域を意識し始めた高校生が語る体験が、ツアーに参加していない高校生の気持ちを揺さぶり、彼らの意識を変革させた。他人事だった流域が、それぞれの立場の高校生にとって身近で重要なものへと変わった瞬間である。大人が用意する場ではなく、高校生自身が主役となったフォーラムの凄さを垣間見た。参加した大人も同感していると思う。

<当日の様子>



高校生レポート～ツアーに参加して～



未来を考えるSDGsワークショップ



揖斐川流域での気づきを共有



揖斐川流域から発信～SDGs達成に向けて～

<揖斐川流域未来フォーラム広報チラシ>

自然を
守ることは、
人々との
つながりを
確かなもの
にする

自分たちの
地域のことを
知ることが
大切

流域って大切！高校生と揃って
**揖斐川流域
未来フォーラム**

揖斐川流域で暮らす人々と一緒に、
揖斐川流域のもつ魅力、未来について語り合います。
揖斐川流域ESDツアーに参加した高校生の発表も！
ぜひ、ご参加ください。

お話し、申請、下道、
お互いのことを
考えている

1 平成30年1月20日(土) 13:30～16:30
(受付13:00～)

2 様々なメディアライブ (告知PRや体験など)

参加費 60名程度

3 SDGsって？

4 揖斐川流域ESDツアーって？

5 会場

6 主催

7 協賛

8 後援

スケジュール

13:30～14:30 (開会)
揖斐川流域環境学習拠点等連携事業の紹介
揖斐川流域ESDツアーに参加した高校生レポート

14:30～15:30 (開会)
ESDとSDGsによる絆画ワークショップ

15:30～16:00 (開会)
流域発地域、世界への発信

16:00～16:30 (開会)
ふりかえりTIME

参加費 無料

申込方法 下記の参加申込書に記入してA5もしくはB5-sizeにて送付ください。
※お名前をいれる、お名前がわかるものをご用意ください。

申込締切 2018年1月5日(金)

申込先 環境省中部環境パートナーシップオフィス
〒460-0003 名古屋市中区東2-4-3 第1階(パークビル4階)
TEL / 052-218-8605 FAX / 052-218-8605 E-mail / office@epo.chubu.jp

会場MAP

【揖斐川流域未来フォーラム】参加申込書 (一筆)

お名前	フリガナ
氏名	
団体名	電話番号
職業	参加動機

※転記する場合は、本欄裏面の住所記入欄に必ずお名前を、E-MAILには、変更する場合は必ずご記入ください。

カ 評価会議の実施

(ア) 構成メンバー

嵯峨 創平氏（岐阜県立森林文化アカデミー教授）
野村 典博氏（NPO 法人森と水辺の技術研究会理事長）
神田 浩史氏（NPO 法人泉京・垂井副代表理事）
安田 裕美子氏（NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長/
輪之内町エコドーム）
鈴木 明氏（桑名市立中央図書館長）
岩間 誠氏（西濃環境 NPO ネットワーク事務局長）

(イ) 会議内容

日時：平成 30 年 2 月 7 日(水)13:00～16:30

場所：錦パークビル 11 階会議室

参加者：16 名（評価会議メンバー6 名、アドバイザー1 名、ゲスト 1 名、スカイプ参加 GEOC1 名、地方事務所 1 名、EPO 中部 7 名）

<評価会議メンバー>

嵯峨 創平氏（岐阜県立森林文化アカデミー教授）
野村 典博氏（NPO 法人森と水辺の技術研究会）
神田 浩史氏（NPO 法人泉京・垂井）
安田 裕美子氏（NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長/輪之内町エコドーム）
鈴木 明氏（桑名市立中央図書館長）
岩間 誠氏（西濃環境 NPO ネットワーク事務局長）
野村 佳世氏（中部地域 ESD ユースレポーター）
藤本 亜子氏（地球環境パートナーシッププラザ） ※スカイプ参加

<アドバイザー>

大鹿 聖公氏（愛知県教育大学教授）

<主な内容>

「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」をふりかえり、本事業の成果及び課題を共有し、評価する会議を行った。高校生のツアーの「発表レポート」とフォーラムでの SDGs ワークショップの成果を素材に MSC 手法に基づく手法で評価、ふりかえりを実施した。また、今年度が最終となるこの事業を地域の持続性に今後どう活かすことができるのかを SDGs の目標、ESD の概念等に照らし合わせて評価し、まとめた報告書(案)の説明をし、共有し、意見を求めた。

それぞれの評価会議メンバーに、事前に送付した「発表レポート集」に効果、成果などの重要ポイントを記し、いただき、説明いただいた。

主な重要なポイントは以下である。

- ・高校生が上下流の繋がりと環境を守ることが人への思いやりにつながると、我がこととして捉えている。
- ・自分たちの地域のこと、流域のことを知って、自分たちなりに考え共有していくことが、どの学校からも読み取れる。
- ・高校生たちが現場からの生の声に揺らぐことがいくつも見られ、いろんな観点が提示される機会を得て、自分たちなりにどうしていくのか、行動に結びついている。
- ・我がこととして捉えている。私がどうするのか、自分たちの高校の活動にどう結びつけていくのか。そこに思いをきたしている。
- ・A か B かという結論を直ちに下すのではなく疑問を抱え込んでいられる強さタフさがあり、複雑な社会の中では大切な態度。こういった結論をすぐ出さないという学びの仕方も ESD では大切。
- ・誰もが活用できる教材と感性を通じて学べるツアーの組み合わせである。教材を見た人はこの人に会ってみたい、話を聞いてみたい、この場所に行ってみたいと思う。現場に行くと人の温かさや思いやり、水に関して戦った先輩たちの思いを感じたことで初めて自分の活動や悩みと照らし合わせ、意味づけにまで及ぶことができた。

主な成果及び効果は以下である。

- ・どんな活動も最終的には人と人のコミュニケーションが根本であり、その根本を高校生が理解してくれた。
- ・拠点で頑張っている方々の声を聞いたからこそいろいろ深く考える、考え始めた。
- ・高校生が主体的にやりたいこと、やらなければいけないことに気づいた。
- ・高校生たちが担い手になれるのではないかと表現をした。
- ・流域にある複数拠点が流域の持続可能性を高めていくための学びの拠点であるということを再認識し伝えていくチャンスをもった。
- ・教材やツアーなどのツールを開発でき、上流から下流に至るまで馳せていた思いが動画やツアーを通じて見える化され流域間のつながり直しになった。

「今回の成果、効果を今後いかに活かすか」については、

- ・1年かけて1つの 이슈を考えると展開ができる。
- ・主権者教育につなげる。
- ・持続可能な開発は何かという議論を1つの分野をテーマに行い、利害関係との合意形成のスキルを育む学習を学校教育、体験や学習の場で行う。
- ・同じ参加者で5回シリーズにして組み入れるといった方法を検討する。
- ・拠点側が今回の事業の成果を学び、スキルアップ、コンセンサスについての視点をもってプログラムを提供できるよう事業の成果をフィードバックする。
- ・今回の成果からツアー企画側のマネジメントや拠点側への提案などアレンジをする。

等の意見が出された。

また、参加した高校生から、「今回だけで終わるのではなく、それをつなげる方法を考え、提案して方向

づけが必要」といった意見が出されたことから、「未来につなげるためには現場に行って直接話を聞かなければいけない。少人数でも現地へ行って話を聞いて、感じて行動へどのようにつなげていけばいいか考えることが重要である」といったコメントもあった。

第4回プラットフォーム会議（評価・検証チーム会議）で作成した「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 SDGs・ESD 評価報告書（案）」を説明した。各拠点の取組を SDGs の目標との照し合せ、それにツアーに参加した高校生が感じたことを重ねて、評価・検証チームとしての評価コメントを入れ、本事業の成果とすることを共有した。また、拠点を始め、一般、学校関係者に配布できる本事業の成果をまとめたパンフレットを作成し、今後の展開に活用できるツールとすることを説明し、意見交換をした。年度内のスケジュールを確認、共有し、終了した。

<アドバイザーのコメント>

ESDの育みたい能力と態度では、4つの力と3つの態度があり、いずれも育まれたと捉えている。特に『コミュニケーションを行う力』と『つながりを尊重する態度』である。『コミュニケーションを行う力』についてはツアーやフォーラムでいろいろな人から話を聞くことや自分から問いかけることによっていろんなことがつながっていくことを実感したのではないかと。自分の活動を今後展開するときのコミュニケーションの重要性に気づいたのではないかと。伝える、聞く、話すことが自分達にとって重要で必要な学びであることに気づいた。

また、高校生は、各拠点や自分たちの活動だけではできない、流域として全体を捉え、他の場所とつなげて行動していくことの大切さについてもコメントしている。高校生が自らのハリオ活動を今後地域に還元したい、シカの話も生態系や里山へ関連づけたいと言っていた。まさに『つながりを尊重する態度』である。

また、上流から下流の状況や人々の話を聞いて、ダムがいいのか悪いのかと揺らいでいる姿は、『多面的総合的に考える力』である、同じ題材について、異なる拠点で話を聞いて、正しいのか正しくないのかを考えることは『批判的に考える力』にもつながってくる。いろいろな人の話、生の体験から本当にそうなのか、と考えた高校生の揺らぎ、違う考え方、違う見方ができるようになったことが『批判的に考える力』につながる。

『他者と協力する態度』はツアーに参加した高校生だけではなく、ツアーに参加していない高校生と関わる、他の高校の活動を知り、他の高校ともっと繋がりたい、連携していきたいという発言が態度として表れている。

『活動している方に高齢者が多いので自分たちがやらなければいけない』『今後地域に還元しなければいけない』という発言は『進んで参加する態度』である。

『未来を考える必要がある』というコメントもあり、『未来像を予測して計画を立てる力』も見られた。ESDの育みたい力と態度に結びつくコメントを高校生が自分の言葉で話している。そのことやそういった場を作ったことが成果であり、拠点をつなぎ流域という視野でツアーを実施したこと、自分の活動に近づけてツアーの報告をしたこと、他校やツアーに参加していない高校生と作業をしたこと、などすべて ESD に結びついている。

<成果>

「揖斐川流域未来フォーラム」での高校生のツアーの報告内容をそのまま「エピソード」にし、MSC手法をアレンジし、評価・ふりかえりを実施した。高校生が発した言葉には思いや願い、そして自身の変化が込められていた。評価会議委員が抽出した最も重要な要素、成果、効果について、抽出した理由とともに共有し、ほぼ全員が共感したことで、本事業の成果が可視化できたと捉えている。

アドバイザーから、高校生の発言とESDの育みたい力と態度が紐づけられ、本ツアーでの拠点連携により実施するプログラム内容、手法による主体的、対話的な学びを検証することができた。

SGDsとの連携についても、一つの拠点だとアイコンが少ないが、連携することでアイコンが増えてくる。高校生発表にもあったように、自分にはないものは持っている人を探して組み合わせること、それが連携であり、協働であることの認識が深まった。

今回は上流から下流までほぼすべての連携拠点を訪問し、人に出会い、ワークショップを取り入れ、発表も行うというハードなプログラムであった。このプログラムでの実施は難しいかもしれないが、今回の検証・評価において示したように、ねらい、対象、育みたい力や態度など様々な観点から、各拠点の組み合わせによるESD実践、SDGs達成に近づくアプローチを見出すことができた。

評価会議においてもその点は高く評価された。この成果を活かし、今後いかに継続するか、誰が主体としてどのように実施し、実施した成果を共有し、さらに持続可能な地域づくりに近づく形へ進化させていくか、が最大の課題であり、拠点連携による学びをツアー等によりアレンジしながら継続することが必須であることを共有した。今後、学校現場や、地域で展開するためのスキーム、課題についての意見交換ができ、今後すべき方策が明らかになった。

キ 本事業の成果と評価 ※別添「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 評価・検証報告書」参照

(ア) 目的

本事業は、「流域」全体を対象フィールドとし、流域全体を視野に入れた、持続可能な地域づくりのための環境教育、ESD 推進を多様なステークホルダーと連携し、実施した。

本事業の成果を可視化し、

- ①流域の各拠点を ESD 推進拠点として活用することができるか
- ②各拠点をつなぐことで効果的な ESD 推進につながるか
- ③ESD 教材の作成や ESD ツアーに参加による効果的な学びがあったのか

について、各拠点及び流域全体において「SDGs（持続可能な開発目標）」「ESD の構成概念」「ESD が育みたい力と態度」と照合をし、検証を行う。

(イ) 検証の方法

今回連携した揖斐川流域 8 拠点及び地域（地域住民 2 名）では、揖斐川流域の持つ課題の解決をテーマにした ESD 取組がされており、各地域の特色、自然、環境、地域の持続性について学ぶ機会が多い。しかし、課題は、各拠点が各拠点のある地域課題をテーマにした学習を実施しており、「流域」という観点での課題解決プログラムが十分にされていないことであった。流域という観点で各拠点をつなぎ、学習プログラムをつなぐことにより対象者の学びを深めることが出来るか、流域での持続可能性を高めるのか、が本事業のコンセプトであり、命題であった。

今年度は 1 年目に作成した「ESD 教材」を活用し、高校生を対象に流域ツアーを行い、高校生が上流から下流までの地域が抱える課題、現状、地域の人との対話を重ねることで、流域全体として何を学ぶか、気づくかを把握することとした。ツアーとフォーラムでの高校生のコメント、発言から紐解き、本事業と ESD の概念、育みたい力と態度、流域全体と SDGs との関連性を可視化を行う。

(ウ) 検証のための指標

【ESD 構成概念と ESD が育みたい力と態度との関連性】

国立教育政策研究所教育課程研究センターは「ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」を作成し、「ESD 構成概念」と「ESD が育みたい力と態度」を整理した。揖斐川流域 ESD 教材を作成する際に、教材との関連性をまとめた。

〈ESD 構成概念（視点）〉

構成概念		揖斐川流域 ESD 教材
多様性	いろいろある	流域には多様な自然、資源、暮らしのありよう、なりわいがあることに気づく。
相互性	関わりあっている	流域の自然、資源、暮らし、なりわいは関わり合いながら、営みを持続させていることに気づく。
有限性	限りがある	森林資源、川の恵みには限りがあることに気づく。 ※赤須賀漁港では資源管理をしながら漁を行っている。
公平性	だれもが幸せ みんな大切	揖斐川流域地域の人々の命や暮らしが安心した営みとなるよう、ダム、輪中、頭首工といった人為的な方策、流域地域の人、資源、なりわいのつながり（循環）をつくることの重要性を伝える。
連携性	みんな一緒に協力して	揖斐川流域の資源が持続可能に得られるよう、上流から下流域のつながり、関係性を深め、連携しながら、それぞれの暮らしが持続的な営みとなるようヒントを得て考える。
責任性	責任をもつ	上流・中流・下流、各地域で責任をもって川との関係性をつくり、1本の線として川を捉えた上での各地域での暮らしやなりわいの営みを作ることの大切さを知る。またそのための方策を考える。

〈ESD が育みたい力と態度〉

育みたい力と態度	揖斐川流域 ESD 教材を活用した一例
批判的に考える力 （批判）	徳山ダム建設によるメリット、デメリットを把握し、双方の視点から、ダム建設の持続可能性について考える。
未来像を予測して計画を立てる力 （未来）	上流、中流、下流が関わる課題を認識し、未来がどうあるとよいか、そのために何ができるか、を考える。
多面的、総合的に考える力 （多面）	上流、中流、下流がもつ課題を流域全体でとらえ、どのような解決策があるのか、それぞれの地域の特性から考える。
コミュニケーションを行う力 （伝達）	上流、中流、下流の児童・生徒、さらには地域の人々との交流を図り、学びを伝え、意見交換、揖斐川の未来について話しあう。
他者と協力する態度 （協力）	上流・中流・下流の暮らす児童・生徒、地域の人々と揖斐川の未来について考え、計画をつくる。 上流・中流・下流のクリーンアップ、水生生物調査、各地域の恵みの試食会などを行い、流域がつながることの価値を体験する。
つながりを尊重する態度 （関連）	上流、中流、下流と連携し、各地域の特徴の共通性と相違性を明らかにし、流域でつながる価値を見出す学習を行う。
進んで参加する態度 （参加）	実際のフィールドに出かけ、暮らす人々の話を聞き、ほんものから学びを得る。 ※源流ツアー、川下り体験、下流域での干潟体験、暮らす人々にインタビュー調査他

【SDGs の 17 の目標との関連性】

2015 年 9 月に第 70 回国連総会で全国連加盟国 193 カ国の全会一致で採択された「持続可能な開発のためのグローバル目標(SDGs)」である。17 の目標と 169 のターゲットがあり、前文には「だれ一人取り残さない」という理念が掲げられている。

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業、特に 2 年目実施の揖斐川流域 ESD ツアーの成果を SDGs の目標を紐づけ、事業の成果を検証した。また、本事業において、目標 4、目標 6、目標 11、目標 17 は共通目標として位置付け、他目標との関連性を検証した。



<関連する主な SDGs 目標>



- 揖斐川流域にある環境学習拠点等をつなぐことで、効果的で質の高い教育を提供する。



- 揖斐川及び揖斐川流域を対象にした事業であるため、すべての環境学習拠点において、また拠点連携の取組において、「安全な水の供給」を位置付け、提供している。



- 揖斐川流域の歴史、現状、課題を知ること、未来に向けての持続可能な地域づくり（まちづくり）を行う。



- 揖斐川流域の環境学習拠点や自治体、NPO、人々、高校生が連携、協働することで SDGs 目標の達成に近づける。

＜損斐川流域 評価検証シート＞

<p>流域全体（拠点）の 特色</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 上流域の林業が、従来型の広葉樹中心の樹林から針葉樹に転換が図られ、手入れが十分にされていない状況により、森林の持つ水源かん養機能が損なわれている。 ● 上流の森林が豊かであり続け、中流の田畑が耕され続けていけば、流域全体の水の流れは安定する ● 上流域から損斐川によって運ばれた豊かな養分によって、中下流域の輪中地帯では肥沃な土地が生まれ、豊かに農産物が生産されている ● 損斐川は、豊かな栄養分を運ぶ大動脈でもあり、流域全体に魚介類の豊かさをもたらしている。 ● 中流域に耕作放棄が増えていくと、田んぼの持つ多面的機能が失われつつある ● 流域の水産業は下降傾向であり、一方で若手漁業者を育成するなど地元の産業である漁業の活性化を図ろうとしている漁協がある。 ● 上流・中流の人たちは下流のことを考えて、水を汚さず、ゴミを流さず、気を配って日常の暮らしを営んでいる。下流の人は上流の森林環境のために植樹をしている。 <p>＜本事業のプログラム＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 損斐川流域 ESD 教材の作成 ● 損斐川流域 ESD ツアーの実施 ● 損斐川流域未来フォーラムの実施
<p>ツアーでの学びのねらいと SDGs 目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 損斐川の風景の特色から、人々の暮らしや生業と損斐川のつながりとその大切さに気づく ● 流域の自然環境や、暮らしや産業のありかたを見つめなおし、流域の一次産業の多様な役割について考える ● 流域に暮らす、昔そして今の人々の暮らしや営みから、持続可能な損斐川流域の姿を考える。 ● 上流、中流、下流の人々の暮らしがや生業が流域のつながりにより持続可能になるための必須な重要ポイントを見つけ出す。 <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  </div>

<p>高校生コメントとSDGs 目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 上流から、養分を含んだ水が来ているのを初めて知った。森と川はつながっているんだ!! ● 海の魚には森や川（山）もつながっている。 ● 上流から、養分を含んだ水が来ているのを初めて知った。森と川はつながっているんだ!! ● 森と山が相互に影響を与えていること ● 海の魚には森や川（山）もつながっている。 ● 環境の変化によって生物が住む場所が減っていて、それを守るという点で共通点を感じた。 ● 上・中・下流のお互いを考えている。 ● 上流、中流、下流のどこの人も他のことを考えているところ。 ● ともに生きる人々、お互いを考える人々。 ● 自分の住む地域の事を知らないといけない。 ● 自然を守るということは、人と人とのつながりを強固なものにするということ。 ● 環境の変化によって生物が住む場所が減っていて、それを守るという点で共通点を感じた。 ● 人々の協力なしで、解決できない多くの課題。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
<p>ESD 構成概念</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 相互性 <ul style="list-style-type: none"> ・ 上流から、養分を含んだ水が来ているのを初めて知った。森と川はつながっているんだ!! ・ 上・中・下流のお互いを考えている。 ・ 人々の協力なしで、解決できない多くの課題。 ・ 自然を守るということは、人と人とのつながりを強固なものにするということ。 ・ 上流、中流、下流のどこの人も他のことを考えているところ。 ■ 連携性 <ul style="list-style-type: none"> ・ 上・中・下流のお互いを考えている。 ・ 人々の協力なしで、解決できない多くの課題。 ・ 自然を守るということは、人と人とのつながりを強固なものにするということ。 ・ 上流、中流、下流のどこの人も他のことを考えているところ。 ・ 本人に聞くから実感できる。 ・ ともに生きる人々、お互いを考える人々。 ■ 責任性 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の住む地域の事を知らないといけない。
<p>ESD 培いたい力と態度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 批判的に考える力 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の住む地域の事を知らないといけない。 ■ 多面的、総合的に考える力 <ul style="list-style-type: none"> ・ ともに生きる人々、お互いを考える人々 ■ コミュニケーションを行う力 <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人に聞くから実感できる。 ■ 他者と協力する態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 上・中・下流のお互いを考えている。 ・ 人々の協力なしで、解決できない多くの課題。 ・ 自然を守るということは、人と人とのつながりを強固なものにするということ。 ■ つながりを尊重する態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 上流から、養分を含んだ水が来ているのを初めて知った。森と川はつながっているんだ・森と山が相互に影響を与えていること。 ・ ともに生きる人々、お互いを考える人々 ・ 上・中・下流のお互いを考えている。 ・ 人々の協力なしで、解決できない多くの課題。 ・ 自然を守るということは、人と人とのつながりを強固なものにするということ。 ■ 進んで参加する態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人に聞くから実感できる。

<成果>

各拠点には ESD、SDGs 目標達成に向けての取組やスキームがあり、対象者の学びに効果があることは明らかになった。さらに、流域にある各拠点の取組を組み合わせることで、各拠点、各拠点の連携により、より効果のある ESD、SDGs 達成の取組が生じることも明らかになった。

今後、多様な対象者に向けて、すべての拠点を網羅した企画を実施しなくても、組み合わせによって実施できることはいくつもある。小学生、中学生、幼児とその保護者、高齢者、環境問題に関心がない層、他の社会課題に関心のある層を対象にした企画への本取組の汎用性は高い。また、流域にある自治体の参加、事業者の参加も実施内容、手法によって可能になるであろう。新たな拠点、新たな分野のステークホルダーの参加も可能になるであろう。

さらに SDGs マークの補完性を重視した取組、一つの目標に特化した取組も可能である。多様な組み合わせや補完性等が新しさと効果を生み出す。それらの主体が、参加しやすいテーマ、ストーリーを作ることが重要な戦略となる。今回関わりを強めたステークホルダーとより連携をし、いくつもストーリーを提示し、参加の拡大、地域波及を進めることが重要である。ストーリーを重ね、汎用性をさらに高めることも重要な課題である。

これが「各拠点の ESD 化」であり、「拠点・人の連携による ESD 化」である。

しかし、継続実施をする際に、最も重要課題となるのは、つなぐ人材、コーディネーター（有給）の存在と費用の確保である。

下記に今後のプログラム案を提示する。

<プログラム案> 企業または自治体の新入社員（職員）向け持続可能な社会づくりのための研修

対象：企業（SDGs に取組む企業）、自治体職員の新入社員

実施：1泊2日

目的：SDGs を学び、地域の持続可能性を「環境」「経済」「社会」の視点から捉え、SDGs 達成に向けて自社、自治体が地域で、国際社会ですべきことを見出す。

プログラム

1 日目 徳山会館

2 日目 赤須賀漁港

徳山会館 (揖斐川町)	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分たちが生まれた場所、自分たちが生活する場所、それを大事に思う心を育む ● 先人の文化や生き抜く知恵を受け継ぎ、次の代に送り続けることの大切さを学ぶ ● ダムに沈んだ村の文化や知恵、暮らしを送り続けることができないことを知る ● ダム建設のおけるメリットとデメリットの情報を習得し、自分の考えをもつ ● ダム建設に伴い村を失った人々の思いを想像する ● 開発によるメリットと損害（被害、破壊）を知り、持続可能な開発の在り方を考える <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div>
赤須賀漁港 (桑名市)	<ul style="list-style-type: none"> ● 経済成長と開発が引き起こした環境悪化を知る ● 悪化した環境を生業にしている人々を知る ● 若手の漁業者の志に学ぶ

	<ul style="list-style-type: none"> ●先人の知恵を引き継ぎ、未来引き継ごうと取り組む漁師に学ぶ ●持続可能な漁業のありよう、環境保全、資源管理、資源回復から持続可能な社会づくりへのヒントを得る。 
揖斐川流域～ ツアー中の食事	<ul style="list-style-type: none"> ●揖斐川流域の自然の恵みの豊かさを知る ●地産地消の大切さを学ぶ ●揖斐川流域の自然の恵みを生業にしている人々に学ぶ ●人と生態系のつながりを学ぶ 

<アドバイザーのコメント>

流域には、場所があり、人があり、営みがある。場所が違えば、風景や特徴が異なる。人が違えば、意見や想いは異なる。営みにも違いが見られる。

このように流域には、いろんな面があり、いろいろなことを提供できる風景があり、場所があり、人がいる。それぞれの思いや願い、意義や価値、立場や考えは、その土地、場所によって異なっているのは当然である。そのために、いろいろなことを学べることができる。

個々は違いかも知れないが、流域の未来、今後ということを考えたとき、それらは目指す方向が一つになる。流域に関わる人が他の地域のことを思い、自身の行動へとつなげていく。流域とは関係のない人が流域の人と関わり、流域のことを自分のこととして考えたり、自分の地域のことを捉え直したりする。そのような機会や場を提供できることが今回の事業から明らかとなった。

今回は、未来を考えていく若い高校生を対象に、そのことを検証した。その結果、異なる人やもの、場所に触れ、いろいろな考えを吸収した高校生が、考えを変え、行動を変える意識へと変革していった。今後は、小さな子どもからお年寄りまで全ての人が関わられる機会を、様々に提供してけるようにする必要がある。

そのような価値が流域という場には存在している。今回関わった施設や拠点だけでなく、新しい拠点も加え、今回できた流域の基本的なネットワークがさらに強化され、粗い網の目が細かな網へと、また二重、三重の輪となって強固なものへと変わること、そこに関わる人の協働もより深くなっていくものと考えている。

今回の揖斐川流域の各施設を拠点としてつなぐ事業を総括すると、以下のようにまとめられる。

まず、1年目の事業において、揖斐川の上流から下流まで、各地域・流域での河川を中心とした活動や特質を1冊の拡大紙芝居（絵本）としてまとめた。また、それらを補足する教材として流域の風景と人の語りで綴ったDVD教材、さまざまな情報を盛り込んだ資料集を作成した。

これらの教材には、使い方のマニュアルは示されていない。それぞれの拠点の活動や想いを含めて、自由に使うことが想定されている。また、それらの教材を通して学ぶ学習者も、一通りの知識を得るのではなく、個人それぞれの体験を通して、揖斐川について感じ、自身の考えや想いとして行動に移していくものとなっている。

教材のゴールであり、揖斐川流域で活動する人々のゴールは、未来にわたって、持続可能に発展していく揖斐川流域である。また、教材を通して学ぶ学習者のゴールも、揖斐川流域の未来である。

事業 2 年目では、この大きなゴールを掲げて開発した教材を基に、学習者や流域の人々に揖斐川についての意識を高め、自身の問題、課題として行動していくよう働きかけることをめざし、拠点をつなぐ流域ツアーと、その集大成としてのフォーラムを実施した。2 年目の事業の成果をはかる指標として、持続可能な揖斐川流域に向けて、2 つの観点、一つは教材を活用することで持続可能な開発のための教育としての ESD の構成要素や育むべき資質・能力が具体的に育成されるのか、もう一つは、持続可能な開発目標としての SDGs それぞれの拠点や活動が合致しているのか、また反映されているのかについて検証を行った。

その個別の詳細については、すでに触れてあるため、ここでは総括として評価を行いたい。

今回の事業の発展として実施したツアーでは、流域の上流から下流までさまざまな拠点を巡った。その中で、自然とのふれあい、人とのふれあい、自然の驚異、人の営みについて、参加した高校生がどのように感じたかをコメントから拾い上げている。それらをひもとくと、ESD との関連については、川が場所によって姿や働きが異なる多様性や、他の地域に与える相互性や連携性、資源の有限性、ダムから学ぶ公平性などを感じていた。

しかし、流域でのことを自分自身のことと捉える責任性についてのコメントは少なかった。しかし、そのことは、フォーラムにおいて、高校生同士がツアーでの体験と彼ら自身の活動を語り合うことで、彼ら自身の責任と捉えることにつながった。また、ESD の資質・能力については、未来を予測し計画を立てる力や、多面的、総合的に考える力、人と語り合うコミュニケーションなどは育めたが、態度についてはあまり積極的なコメントを得ることはできなかった。このように、ツアーによりさまざまな事象に出会うことで、つながりや能力は育めるが、ツアーという性質上、受け身にならざるを得ない点で態度の育成は難しいことが明らかとなった。態度についてはフォーラムなど、高校生が主体的に活動できる場面設定を行う必要があることがわかった。今後の事業展開を図る際には、これらの点を考慮すべきところである。

また、SDGs からの評価については、今回、流域という点を考慮し、17 のうち、4、6、11、17 は全ての拠点が基盤にしているため、それ以外の項目について精査した。拠点の活動が表面的にわかりやすい、海洋資源の保全や陸上資源の保全などは、高校生にも比較的容易に理解できるが、活動の根っこにある目標、また拠点のつながりから見いだされる目標、10 の人や国の不平等をなくそう、12 のつくる責任、つかう責任、13 の気候変動に具体的な対策を、16 の平和と構成をすべての人になどは提供側の思いが高校生には伝わりきっていなかったように思われる。今後、質の高い教育として、この事業を継続的に実施していくためには、このような伝わりにくい部分をいかに、具体的な手法で示していくか、また高校生や他の人々に伝えていくかがポイントとなると考える。

今後、さらに周辺、関連の施設や拠点が加わり、連携の網の目が細かく・太くなるにつれて、包括的な目標が立てられるようになっていけると思われるが、個々の拠点の活動の目標やねらいを明確にしていくことが、より重要になってくると思われる。

持続可能な社会のゴールに向けて、未来を築く若い世代を巻き込みながら、発展的につながっていくことを願っている。

<作成したパンフレット>



② 高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業

ア アドバイザーとの打合せ

日時：平成 29 年 5 月 9 日(火)9:30～11:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：3 名（アドバイザー1 名、EPO 中部 2 名）

〈主な内容〉

今年度実施する事業について協議をした。

昨年度から引き続き実施する「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」については、昨年度作成した ESD 教材の活用方法について、流域にある小中学校での実践や教育委員会への説明について、ESD 教材を活用したツアーの実施等について意見交換をした。

アドバイザーからは、ESD 教材を活用して学校教育で ESD 授業を実施する場合と、社会教育として実施する場合では、手法も内容も変わるため、誰を対象にどのようなことをするのかを早急に計画したほうがよい、と助言いただいた。特に学校教育においては、すでに年間授業計画が作成されているので、出前授業程度であれば可能性はあるが、ツアーのように現場を見に行く、流域の人々に出会うといった内容は相当丁寧アプローチをしなければ不可能に近いという指摘も得た。

イ 協働プラットフォーム意見交換会

〈第 1 回プラットフォーム会議〉

日時：平成 29 年 6 月 20 日(火)16:30～17:30

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

参加者：7 名（プラットフォームメンバー2 名、アドバイザー1 名、地方事務所 1 名、EPO 中部 3 名）



〈主な内容〉

愛知県環境活動推進課が平成 29 年度より 3 年間実施する「あいちの未来クリエイト部」と、EPO 中部で展開する「環境教育・学習における「ESD 推進」のための実践拠点支援事業」との連携方法、取組方針について意見交換した。連携により、高校を中心に自治体、地域団体のネットワークによる拠点の形成を行うこと、環境学習プログラムの更なるブラッシュアップ、ESD 化を図っていくことを共有した。

[対象となる活動]

- ・愛知県立木曽川高等学校 総合実務部 イタセンパラ広報活動
- ・愛知県松平高等学校 学校家庭クラブ活動 竹の駆除と活用に関する活動
- ・愛知県立知立東高等学校 自然科学部 河川の生態を調べる活動
- ・愛知県立安城南高等学校 自然科学部 水生昆虫を指標に水質を考える活動
- ・愛知県立武豊高等学校 自然科学部 湿地の調査活動

事業における役割分担および今後のスケジュールを確認した。今後、依頼予定のプラットフォームメンバーの拡充をめざし、愛知県事業に関わるファシリテーターや高校のクラブ顧問、地域で活動する団体などへの声かけを進めていくことを確認した。

<支援内容>

愛知県事業である「あいちの未来クリエイト部」が作成する環境学習プログラムをツールに、高校間、高校生間、高校と地域間をつなぐ支援をすることとした。環境学習プログラム完成予定が11月であることから、それまでの期間、高校間の関係性づくりのための取材や、地域連携のありよう、作成したプログラムの実践の場の確保等を行うこととした。また、多忙な高校、高校生の連携を可能にする企画をどのように進めるか、新たなプラットフォームメンバーを加えた会議を早急に行うこととした。

<第2回プラットフォーム会議>

日時：平成29年7月31日(月)18:00～19:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

参加者：9名（プラットフォームメンバー4名、アドバイザー1名、
地方事務所2名、EPO中部2名）



<主な内容>

本事業の目的の共有をした。愛知県の事業で作成する環境学習プログラムを通じて、高校生と高校生、高校と高校、高校と地域（自治体や社会教育施設、団体）がつながるようなネットワークの形成を行う。ネットワーク形成を行うために、高校生間の学び合いの場、高校と地域が出会い、学びあう場をつくる。スケジュールとしては愛知県事業、環境学習プログラムを10月中に作成をし、11月18日19日のイベントで各校紹介することになっているため、それを見込んでのネットワーク化のためのヒアリングを各校に行う。地域に対しては、環境学習プログラム作成後に、説明・紹介を行う。同時に学びあいの場への参加依頼、各自治体の環境学習施策の状況等を把握する。

<支援内容>

支援拠点となる5校の高校が生み出す成果の地域活用や、高校生が地域で実践できる環境づくりについて提案をし、プラットフォームメンバーのもつネットワークを活かした高校生が主体となる高校生(高校)ネットワークのありようについて積極的な意見が交わされるよう促した。愛知県事業と環境省事業のすみわけが明確になりにくいこともあり、連携することでの相乗効果をどう生み出すことはできるのかについて、案をだし、メンバーとさらに協議をし、お互いのリソースを活かしながら、高校、地域それぞれのモチベーションが高まる仕組みづくりを検討した。

<第3回プラットフォーム会議>

日時：平成29年9月11日(月)18:00～19:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

参加者：7名（プラットフォームメンバー3名、アドバイザー1名、地方事務所1名、EPO中部2名）



<主な内容>

5校の高校をつなげるための仕掛けについて意見交換をした。10月29日のユネスコスクール交流会、11月18日、19日の愛知県主催のレッツエコアクションに高校が参加する予定であるため、その機会を大切に高校生間の学びあい、知り合う場を少しずつ形成することとする。

成果物として紙媒体（動画も検討）を作成するが、掲載するための高校生、教員、ファシリテーター、必要によっては専門家のヒアリングを行う。ヒアリングの内容は、環境学習プログラムを何故つくったのか、何を伝えたいのか、自身の変化についてであり、教員やファシリテーターには生徒の変容についてもヒアリングすることとした。

愛知県事業と環境省事業のすみ分けが、プラットフォームメンバーの中でまだ十分にできていない部分があるが、愛知県事業はあくまでも5校が環境学習プログラムを作成し可視化すること、環境省事業は5校の高校生、教員、高校が学び合う場を提供し、高校のネットワークの価値を可視化すること、また高校と高校のある地域の自治体、小中学校、社会教育施設（環境学習施設）が、作成した環境学習プログラムをツールにして連携し地域の環境活動に展開するなど関係性を強める連携を可能にすること、を役割としていることを確認した。3月10日の交流会までに、成果物となる紙媒体の作成、自治体など連携可能な地域主体への本事業の説明と紹介を行うこととした。

<支援内容>

高校生が作成する環境学習プログラムの活用方法を軸に事業をどう展開するかについて提案をした。5校の高校生が出会い、お互いのプログラムを相互参照する場が主となる事業とすることとした。5校それぞれ地域との連携状況が異なるため、自治体への情報提供、マッチングの可能性を早急に行うことを提案した。10月29日に開催される愛知県ユネスコスクール交流会のブースで、作成した環境学習プログラムのお披露め、体験を行うことを提案した。また、3月10日に行う予定である高校生のプログラム紹介の場の企画をプラットフォームメンバーの提案、アドバイスを反映させた企画を作成した。

<第4回プラットフォーム会議>

日時：平成29年12月22日（金）17:00～19:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

参加者：10名（プラットフォームメンバー5名、アドバイザー1名、地方事務所1名、EPO中部3名）



<主な内容>

「あいちの未来クリエイティブ部」の各5校の環境学習プログラムの紹介を行い、その後、当取組の進捗状況について報告をした。愛知県ユネスコスクール交流会に2校（安城南高校、木曽川高校）が参加し、取材した旨を報告した。各自治体への訪問について、5校それぞれの自治体の環境部局へ訪問し、高校生がつくった環境学習プログラム及びその活動の紹介、それぞれの自治体の環境政策についてヒアリングし、3月10日（土）の交流会の紹介と参加を依頼した。また、知立東高校が12月5日（火）に実施した知立市立竜北中学校にて出前授業、木曽川高校が12月21日（木）に羽島市立正木小学校への出前授業について報告した。

3月10日の交流会にむけて、広報参加呼びかけやプログラム進行について意見交換した。プログラムを紹介する冊子の作成にあたり、実際に活用してもらうためのアイデアを意見交換した。

<支援内容>

各高校の環境学習プログラムが完成したこともあり、それをツールに何をするかを提案した。小中学校の出前授業や、自治体が行うイベントでの実施、ユネスコスクールとの連携などプラットフォームメンバーのもつリソースを活用しながら提案をし、実施した。また出前授業の際には取材に行き、授業を受けた子どもへのアンケート、実施した高校生へのアンケートを行い、地域で活動することへの思いを把握した。また、出前授業の様子をHPに掲載し、周知を図った。3月10日の交流会に向けて、各校に環境学習プログラム紹介動画を高校生に撮影してもらい、環境省のYouTubeにアップすることとした。また、交流会当日に、SDGsと関連させるワークショップを行うことを提案した。

ウ 支援計画

(ア) 目的

地域に暮らす次世代が、地域の持続可能性に関わる地域課題の現状を把握しておらず、課題解決の担い手としての教育（学習）が十分にされていない。持続可能な地域を可能にする地域社会経済のありようを学習する機会と場がない。地域課題を自分事として捉えるために、地域住民や自治体職員との関係性を深め、地域の現状を把握し、学習する場、機会を、地域の拠点を生かして創出する。図書館、環境学習拠点、里山、田んぼ等学習拠点は多様である。拠点間のネットワークを形成し、地域に多様なESD実践の場を次世代と地域のステークホルダーが作り出し、拠点における学習効果を高める。そのことによって、地域を担う次世代の創出を図る。

環境教育における「ESD推進」のための先導的実践拠点支援事業の概要

高校生による環境/ESD活動拠点ネットワーク形成事業(愛知県)	
<p><課題> 地域に暮らす次世代が、地域の持続可能性に関わる地域課題の現状を把握しておらず、課題解決の担い手としての教育（学習）が十分にされていない。持続可能な地域を可能にする地域社会経済のありようを学習する機会と場がない。</p> <p><望ましい姿> 地域課題を自分事として捉えるために、地域住民や自治体職員との関係性を深め、地域の現状を把握し、学習する場、機会を、地域の拠点を生かして創出する。図書館、環境学習拠点、里山、田んぼ等学習拠点は多様である。拠点間のネットワークを形成し、地域に多様なESD実践の場を次世代と地域のステークホルダーが作り出し、拠点における学習効果を高める。そのことによって、地域を担う次世代の創出を図る。</p> <p>○昨年実施した「春の大学」をモデルとして学び、各地域の次世代の発想とアイデア、地域住民の知恵や経験、自治体職員などを重ね、持続可能な地域づくりを可能にする学習の場が継続的実施を目指す。</p> <p>○各地域の地域性によって行われている高校生との取組に、地域の多様なステークホルダーが参加することで、次世代の学習や活動の社会化を行う。</p> <p>○次世代や地域住民が実習することで、地域課題を明確化し、その解決のために、地域資源を活用した方策を地域として検討する場をつくることできる。次世代を中心とした活動主体が創出される。</p> <p>○次世代が連携することで、地域連携が生じ、相互参照の場が生まれ、次世代を主体として持続可能な地域づくりに取り組むネットワークが形成される。</p> <p>○他地域への内用を鑑み、中部地域において地域と次世代と連携した他地域の次世代による活動との連携を図る。</p>	<p>対象とする拠点 愛知県内高等学校</p>  <p>参加する高校（高校生）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●愛知県立木曽川高校（一宮市） ●愛知県立安城南高校（安城市） ●愛知県立武豊高校（武豊町） ●愛知県立松平高校（豊田市） ●愛知県立知立東高校（知立市）

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 目指している関係性>

高校生による環境/ESD活動拠点ネットワーク形成事業	
<p>●愛知県内の高校生の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ●愛知県立木曽川高校（一宮市） イタセンバラを守れ！広報活動とワンドの保全活動 ●愛知県立安城南高校（安城市） 学校周辺河川の水質改善 ●愛知県立武豊高校（武豊町） 学校周辺の湿地と希少種等保全 ●愛知県立松平高校（豊田市） 竹の有効活用による里山の保全 ●愛知県立知立東高校（知立市） 猿渡川の環境と生きもののかかり <p>【6～10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各高校の活動のブラッシュアップ（ESD化） ○各高校がある地域のステークホルダーとの学びあい <p>【7月/9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地元大学生との交流 <p>【7月/9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○春の大学との学びあいの場 <p>【10～12月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各高校の活動振興ツアーの実施 ○各高校の活動を共有し社会化するフォーラムの実施 <p>【12～1月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高校生の活動とSDGsの関連性を検証 ○高校生の活動を可視化（VCR制作等） 	<p>各高校の活動を地域とつなぎ、高校生間をつなぎ、地域のESD拠点化、高校生主体による愛知県内ESDネットワーク化（拠点化）を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●高校生の活動をESD実践と学習意欲の入れ替え ●高校生の活動を地域化（地域の学習拠点、図書館などのコラボレーション）する。 ●愛知県内の高校生間の活動共有の場と学びあいの場をつくる。 ●愛知県内の大学生が参加し、世代をつなぎ学びあいの場をつくる。 ●可視化するツールや、社会化するツール（SNS）を開発する。 ●高校生の活動を「ネットワーク」をSDGsの視点から評価検証をする。  <p style="text-align: center;">高校生による環境/ESD活動拠点ネットワーク構想</p> <p>高校生が地域課題の当事者意識を育む。ESDの担い手の育みを支援する。</p> <p>高校生主体による地域の学習拠点等と連携したESD拠点（ネットワーク）が形成される。</p>

(イ) 事業構成・事業目標の設定

愛知県事業である「あいちの未来クリエイティブ部」と連携し、各5校の環境学習プログラム作成と並行して、地域連携の可能性、高校間の関係性の育み、高校生と大学、高校生と小中学生がつながる場面を作り出す。高校生を核に、多様な主体、世代、施設をつなぐ基盤を地域内、地域間のネットワークを形成する。ただし、県事業は初年度であるため、各高校のニーズや高校及び高校生の状況を十分に把握し、スケジュール等に無理がないように実施し、高校生が主体となって事業に参加できる関係性と環境作りを最優先した。



エ 支援内容

(ア) スケジュール

日程/場所	内容
4月28日(金)	愛知県及び愛知県内の高校へのヒアリング。
5月1日(月)	愛知県との連携について協議。
5月9日(火)	●アドバイザーとの打合せ 実施拠点の検討及び福井県鯖江市の実践の可能性の検討。
5月30日(火)	●アドバイザーとの打合せ 今年度の対象事業、実施拠点についてアドバイザーの大鹿氏と情報共有し、検討を行った。
6月9日(金)	愛知県環境活動推進課と打合せをし、今年度の事業計画(案)を作成し、ステークホルダーと調整を行った。
6月20日(火)	●第1回プラットフォーム会議を実施。(P56～57 参照) ※参考資料 2-2 参照
7月20日(木)	木曽川高校で愛知県、高校教員とのヒアリングを行い、事業への参画のお願いと今後のスケジュール調整を行った。
7月31日(月)	●第2回プラットフォーム会議を実施。(P57 参照) ※参考資料 2-3 参照
8月4日(金)	木曽川高校の生徒と教員に本事業の説明を行い、他地域の高校との交流促進、地域の問題、課題、取組などを共有し合えるネットワーク形成を提案した。
8月9日(水)	知立東高校の教員を対象に、本事業の説明と事業参画への依頼を行った。その後日程調整をした。高校の取組についてヒアリングを行った。
8月17日(木)	武豊高校の教員を対象に、本事業の説明と事業参画への依頼を行った。その後日程調整をした。高校の取組についてヒアリングを行った。
8月22日(火)	松平高校の教員を対象に、本事業の説明と事業参画への依頼を行った。その後日程調整をした。高校の取組について、生徒やファシリテーター、専門家の同席のもとヒアリングを行った。
8月22日(火)	安城南高校の教員を対象に、本事業の説明と事業参画への依頼を行った。その後日程調整をした。高校の取組について、生徒やファシリテーター、専門家の同席のもとヒアリングを行った。
8月25日(金)	木曽川高校の活動にファシリテーターとして参加し、他4校の活動を共有、交流や発表の場について生徒の意向を確認し、意見交換をした。
9月11日(月)	●第3回プラットフォーム会議を実施。(P58 参照) ※参考資料 2-4 参照
10月20日(金)	木曽川高校での環境学習プログラム作成プロセスのファシリテーションを通して、生徒や教員の変容、さらなる課題意識の育みを捉えることができた。生徒や教員に地域や他高校との連携の必要性や形成方法についてヒアリングを行った。
10月23日(月)	木曽川高校の最終回に参加し、生徒、教員にヒアリングをした。
10月25日(水)	武豊高校の最終回に参加。学校周辺の湿地の重要性を伝える為にパワーポイントで作成した湿地に関するクイズ形式のゲームの説明を受けた。生徒、教員、ファシリテーターにヒアリングをした。浅井豊司氏のヒアリングを実施。
10月29日(日)	●愛知県教育委員会主催の「愛知県ユネスコスクール交流会」に出展。 (P85～86 参照) 安城南高校のファシリテーター白上昌子氏のヒアリングを実施。

10月31日(火)	知立東高校の最終回に参加。猿渡川に生息している植物や生き物、特にカメに関する調査の発表及びボードゲームを通して人間が連れてきた外来種のカメが自然に対して与える影響についての説明を受けた。生徒、教員にヒアリングをした。
11月2日(木)	安城南高校へのヒアリング取材を実施した。鹿乗川の水質、川に生息している生き物の調査を通して「地域の小学生たちが川の環境を守る行動を起こすきっかけ」となるように作られた環境学習プログラムの説明を受け、実際に出来上がった紙芝居の実践を体験した。生徒、教員にヒアリングをした。他校の取り組みについて情報提供を行い、今後のネットワーク化を図ることでの学びあいの場づくりの説明をした。
11月7日(火)	松平高校へのヒアリング取材を実施した。学校周辺の松平地区にある竹を使つての環境学習プログラム、地域の人たちに身近にあるこの地域の竹林や自然環境の抱える問題について興味を高めるための、竹で作られたけん玉や竹トンボでの遊びも体験できるカードゲームを体験した。 生徒、教員にヒアリングをした。他校の取組についての情報提供を行い、今後のネットワーク化を図るための学びあいの場づくりについて説明をした。
11月10日(金)	本事業の周知のためのパンフレット及びパネルを制作した。3月の交流会に向け、関係者との企画調整、自治体ヒアリング日程調整、プラットフォーム会議の日程調整などを実施した。
11月15日(水)	松平高校のファシリテーター長谷川明子氏へのヒアリング取材を実施。
11月18日(土) 19日(日)	愛知県主催レッツエコアクションにて本事業のパネルと活動紹介パンフレット配布を行った。本事業に参加している5校が参加し、作成した環境学習プログラムを実践した。1日目に3校(木曽川高校、松平高校、知立東高校)、2日目に2校(安城南高校、武豊高校)が参加し、各学校との交流、情報共有を行った。パンフレット、パネル展示を行い、本事業が、高校5校、愛知県、環境省と協働で実施し、さらに高校生の環境活動/ESD ネットワーク形成をすすめていることを周知した。
11月22日(水)	知立市役所訪問(市民部環境課)。知立東高校の環境活動及び環境学習プログラムの紹介と説明を行った。同時に知立市の環境政策及び環境学習施策についてのヒアリングを行い、知立東高校との連携等今後の展開に向けての情報収集を行った。知立市では現在、第2次知立市環境基本計画を作成中であり、次年度、地域の学校と一緒に外来種の駆除をすることを検討中であった。今後、知立東高校との連携も考えられる。高校生の活動を中心に地域での活動を生み出したい旨も伺った。高校と自治体とのネットワーク形成に向けての一步となった。3月の交流会について説明し、参加を促した。
11月22日(水)	知立東高校のファシリテーター大鹿聖公氏へのヒアリング取材を実施。12月5日に実施される知立東高校生の知立市竜北中学校への出前授業に関する竜北中学校関係者への最終打合せをした。本事業による学習効果及び学びあいの仕組みの形成についての意見を得た。

12月5日(火)	<p>武豊町役場（生活経済部環境課）へ訪問。武豊高校の環境活動及び作成した環境学習プログラムの紹介と説明を行った。武豊町役場の環境政策及び環境学習施策についてのヒアリングを行い、武豊高校との連携等今後の展開のための情報の収集をした。湿地に関しては、町内にある寺町田湿地の管轄を歴史民俗資料館が担当していることを把握し、武豊町役場訪問後に、同歴史民俗資料館に伺い、武豊高校の活動の紹介と説明を行った。武豊町役場の教育委員会にも訪問し、武豊高校との連携について状況を聞いた。武豊高校とは連携しているが、本事業の取組については把握していないとのことであった。歴史民俗資料館を通して高校と自治体とのネットワーク形成に向けての可能性はあるのではないかとアドバイスを得た。3月の交流会について説明し、参加を促した。</p> <p>知立東高校、自然科学部6名による知立市立竜北中学校への出前授業に参加した。作成した環境学習プログラムを使って中学1年生（1年4組）を対象に50分の授業を実施した。高校1年生の自然科学部員が学んだことを中学生に自分の言葉で伝えていた。自分たちが学んできたことを授業で行うことにより、世代間交流ができていた。授業後には高校生6名及び顧問の教員への振り返りのインタビューを行った。また、竜北中学校の校長及び1年生の担任にヒアリングを実施した。中学生は外来種のカメがどう自分たちの未来に影響を与えるかということ、授業を通して意識を持てるように変わったという学習効果を把握することができた。3月の交流会について説明し、参加を促した。</p>
12月6日(水)	<p>一宮市環境センター（環境保全課）を訪問。木曽川高校の環境活動及び環境学習プログラムの紹介と説明を行った。一宮市環境センターの環境政策及び環境学習施策についてのヒアリングを行い、木曽川高校との連携等今後の展開のための情報収集を行った。木曽川高校のイタセンパラに関する活動は知っているが、水辺の環境学習に関しては、公園緑地課、生涯学習課、歴史民俗資料館の担当であり、歴史民俗資料館を通して高校と自治体とのネットワーク形成に向けての可能性はあるのではないかとアドバイスを得た。3月の交流会について説明し、参加を促した。</p>
12月8日(金)	<p>豊田市役所（環境政策課）を訪問し、松平高校の環境活動及び作成した環境学習プログラムの紹介と説明を行った。豊田市の環境政策及び環境学習施策についてのヒアリングを行い、松平高校との連携等今後の展開のための情報収集を実施した。松平高校との繋がりは今のところなく、環境政策課では竹林を対象にした環境保全活動や環境学習活動は展開していないが、豊田市の自然観察の森という拠点が実施しているとのことであった。自然観察の森では、年に1度ふれあいフェスタを開催しており、このイベントに参加する可能性があるのでは、とのことであった。自然観察の森等を通して、高校と自治体とのネットワーク形成に向けての可能性を検討する。また、3月の交流会について説明し、参加を促した。</p> <p>訪問後に環境政策課より、豊田市自然観察の森が松平高等学校の取組に興味を持ったとの連絡が入り、松平高校の担当教員に連絡をし連携を促した。</p>
12月8日(金)	<p>安城市役所（環境政策係）を訪問。安城南高校の環境活動及び環境学習プログラムの紹介と説明を行った。安城市の環境政策及び環境学習施策についてのヒアリングを行い、安城南高等学校との連携等、今後の展開に向けての情報収集をした。安城市と安城南高等学校との繋がりはなく、今後については安城市が設置している環境学習施設「エコきち」や、その運営業務を現在になっているNPOであるエコネットあんじょうとの連携の可能性はあるとのことであった。3月の交流会について説明し、参加を促した。</p>

12月21日(木)	木曽川高校、総合実務部5名による岐阜県羽島市立正木小学校への出前授業に参加。高校生が作成した「イタセンパラかるた」を使って小学5年生に授業を行った。木曽川高校と正木小学校は2016年より「イタセンパラ」の飼育を通じて交流がある。授業後には小学生及び担任、高校生及び顧問の教員へのふりかえりのアンケートを依頼した。3月のフォーラムについて説明し、参加を促した。
12月22日(金)	●第4回プラットフォーム会議を実施。(P58参照) ※参考資料2-5参照
1月5日(金)	3月に行う交流会のチラシの高校生用、一般参加者向け用の2枚のチラシを作成した。今後、このチラシを高校及び関係者に案内、送付しフォーラムの広報を行う。
1月25日(木)	交流会の広報として、愛知県主催のイベントでのNPO関係者へのチラシ配布と参加の呼びかけを依頼した。一般参加者への広報を行った。
1月29日(月)	第4回プラットフォーム会議議事録をプラットフォームメンバーに送付し、内容の確認を依頼した。また、先回の会議で協議をした作成した環境学習プログラムの動画撮影に関して、5校の教員に電話をし、趣旨を説明し、全ての教員に了解を得た。依頼文書を作成し、正式に依頼をした。
1月31日(水)	●アドバイザーとの打合せ 大鹿氏と交流会の企画内容や、評価会議の内容や持ちかた、パンフレット作成等について意見を交わし、アドバイスを得た。評価会議を3月10日(土)の交流会後に行うこととした。
2月5日(月)	各校に作成したプログラムの紹介動画制作の依頼文書作成及び各教員への連絡調整をした。
2月16日(金)	本事業のフィードバックシートの作成をパートナーである愛知県に依頼した。
2月20日(火)	交流会の広報及び集客のため市民団体等への訪問のアポイントを取った。豊田市自然観察の森に連絡をした際に5月に開催する「自然ふれあいフェスタ」に松平高校が参加し、環境学習プログラムのプレゼンテーションを行うという報告を受けた。
2月26日(月)	昨年度実施した「泰阜ひとねる大学」の成果物であるパンフレットをベースに、本取組の成果をまとめたパンフレット作成作業を行った。
2月27日(火)	●平成29年度環境省環境教育・学習拠点における「ESD推進」のための実践拠点支援事業成果共有会へ出席。(P111-112参照)
3月2日(金)	本事業の紹介及び交流会の広報のために豊田市矢作川研究所及び豊田市自然観察の森を訪問し、ヒアリングを行った。豊田市自然観察の森は既に松平高校と連携があり、他の4校との連携についても可能性があることをヒアリングから把握した。
3月6日(火)	本事業の紹介及び交流会の広報のために安城市にあるエコネットあんじょうを訪問し、ヒアリングを行った。エコネットあんじょうが開催する3月17日(土)の「環境サミット」へ安城南高等学校が参加する報告を受けた。
3月10日(土)	●あいちの未来を考えた！高校生が伝える“たいせつなこと”交流会開催 (P92~105参照) ●評価会議の実施 (P106~109参照)
3月	●本事業の報告書・パンフレット作成

オ 主な支援した取組

(ア) 生徒へのヒアリング

<目的>

活動当初とプログラム作成後の生徒の変容及び環境学習プログラムを作成する過程での効果や変容、今後やってみたいことを把握することで、高校生の思いを十分に理解し、その思いのもとで今後の高校生のネットワーク形成のための要素を抽出することを目的とした。

各高校の生徒に主に下記の項目をグループインタビュー形式で行った。

- なぜ〇〇〇〇をつくったのですか
(〇〇〇は紙芝居やカルタ、クイズなど作成した環境学習プログラムツール)
- 何を伝えたいのですか
- 今後やってみたいことは何ですか
- 自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

<主な内容>

[愛知県立安城南高校]

日時：平成 29 年 11 月 2 日(木)16:30～18:00

場所：愛知県立安城南高校

対象：生徒 6 名

<主なヒアリング内容>

●なぜ紙芝居をつくったのですか

- ・大人の方でも子どもでも分かりやすいようにと思い何で発表しようという話になったときに紙芝居で発表しようという考えになりました。
- ・私たちが行った川の生き物について、いろいろ知って欲しくて、下敷きを作りました。
- ・私たちの行った川に住んでいた魚などを知らうため。
- ・誰にとっても分かる紙芝居にすることで、年代を選ばなく、伝えたいことを伝えることができると思ったため。
- ・昔からある紙芝居で小さい子にも興味をもって欲しかったから。
- ・誰にでも楽しんでもらえるかなと思って作ろうと思いました

●何を伝えたいのですか

- ・身近な川にいる生き物について知ってもらいたい。川の中にどれだけたくさんの生物がいるか知ってもらいたい。川にどのような影響が出てしまうのか知ってもらいたい。
- ・自分たちが行った川の生き物を知って欲しかったから。下敷きにすることで、みんなの目につくから、これをきっかけに川に行ったりして欲しいと思います。
- ・私たちが調べた川について色々知って欲しかったから。
- ・一見、汚れていて、何も生物がいないように見える川でも、たくさん生物はいるから、よく目をこらしてほしい。
- ・自分たちの身近な川について伝える事によって川の楽しさなどを知って欲しかった。



- ・こんな様な川でも生物はいろいろいる。
- ・川の生き物調べのおもしろさ。川のきれいさ。

●**今後やってみたいことはなんですか**

- ・就職をした後も暇な時に調査をしてみたい。他のことにも挑戦してみたい。
- ・鹿乗川へもう一度行って、魚（生き物）の調査をして、分離同定をしてみたいと思います。
- ・今回出来なかった生き物の分離同定をしてみたいです。
- ・蛍を調べてみたい。
- ・次は山へ。
- ・豊田市などにある愛知の森林を調べてみたいです。

●**自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください**

- ・身近な川だけでなく様々な川についても調べてみたいという意欲がわいた。川に起きている問題についてもっと知ってもらいたい。
- ・魚や生き物は好きなんです、その魚や生き物の名前、種類までは知らなかったのものですごく勉強になりました。そして、科学の実験もしたいなと思います。あと、川にいる魚やカニを食べてみたいです。
- ・川での調査にはあまり参加できなかったので、今度、川に入る以外の事には参加したいです。
- ・川に対する見方が変わった。
- ・県外の川について行ってみたいくなった。
- ・今回のことで川や魚のことについて詳しくなった気がします。

[愛知県立木曽川高校]

日時：平成 29 年 10 月 23 日(金)16:30～18:00

場所：愛知県立木曽川高校

対象：生徒 8 名

〈主なヒアリング内容〉

●**なぜカルタをつくったのですか**

- ・小さな子どもにも分かりやすく伝えて大切にしてほしい。
- ・楽しくインタンパラやイタセンパラの周りの環境を知ることができるから。
- ・小学生に木曽川やイタセンパラをしてほしいから。
- ・カルタという身近なゲームを通して幅広い年齢の人にイタセンパラについて知って欲しい。
- ・楽しくイタセンパラや木曽川のことを知ってもらいたかったから。
- ・イタセンパラのことをしてもらいたいから。
- ・楽しみながら、イタセンパラについて知ってもらいたいと思ったから。
- ・子ども（小さい子）にもわかりやすく楽しくしてもらおうため。楽しみだ！！

●**何を伝えたいのですか**

- ・イタセンパラの大切さや貴重性。



- ・少人数ではイタセンパラを守りきれないこと、みんなの力が必要だということ。
- ・イタセンパラやイタセンパラの周りの環境、イタセンパラが現在おかれている環境。
- ・絶滅する危険があること。他人事ではなく自分たち一人一人が守っていかねばいけないこと。守→知ってもらおう。
- ・イタセンパラが絶滅危惧種だということ。みんなの力が必要だということ。
- ・イタセンパラの存在。
- ・イタセンパラについては絶滅危惧種で天然記念物だから、なくなる（絶滅する）とかわいそう。
- ・イタセンパラが身近な魚であること。知ってほしい→守る人増える

●**今後やってみたいことはなんですか**

- ・色々な絶滅危惧種について知りたい。
- ・他の絶滅危惧種の研究。外来種の美味しい食べ方。
- ・木曾三川について調べる。
- ・イタセンパラについて以外の魚の飼育研究？
- ・外来種クッキング。
- ・他の魚についても調べてみたい。
- ・アンケート調査をいろんな場所で行いたいです。
- ・138 でアンケート調査。イタセンパラのヨーヨー釣り。

●**自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください**

- ・かるたを読むときにリズムよく読めるよう気を付けるのが難しかった。
- ・幅広い年齢の方と関わることができた。イタセンパラについて詳しく知ることができ、現在の環境状況も知ることができた。
- ・どの魚も奥が深く難しいこと
- ・絶滅危惧種とか伝統文化についてのニュースに関心を持つようになった。
- ・5.7.5 がすぐ浮かぶ。イタセンパラを気にかけるようになった。他の人にイタセンパラについて教えてあげたいと思った。
- ・前よりは自分から行動できるようになった。
- ・アンケート調査でたくさんの人たちと関わったことで、イタセンパラについてのこともいろいろ教えてもらいました。もっとイタセンパラについて考えるようになった。
- ・小さい子への伝え方を発見。話しあいの大切さ。

[愛知県立武豊高校]

日時：平成 29 年 10 月 25 日(水)16:00～18:00

場所：愛知県立武豊高校

対象：生徒 4 名

〈主なヒアリング内容〉



●なぜこのクイズをつくったのですか

- ・子どもにも分かりやすい形で湿地の大切さを伝えられると考えたから。
- ・いろいろな人に湿地のことを知ってもらうため。
- ・湿地の保全についていろいろな人に知ってもらうため。分かりやすく、面白くするため。
- ・湿地の大切さに気づいてもらうため。

●何を伝えたいのですか

- ・湿地の大切さ。楽しさ。面白さ。
- ・湿地がどんな所でどのような生き物がいるのか。
- ・湿地を保全するために人の手による工夫が必要であること。湿地が絶滅してしまうこと。
- ・色々な人に湿地という不思議なものを知ってもらうため。

●今後やってみたいことはなんですか

- ・今までやっていた保全活動や生物学習会の参加側でなく、教えたり、運営したい。
- ・いろいろな所で発表する。
- ・身近な人に湿地について知ってもらいたい。湿地が自分たちの近くにあり自分たちの生活と深く関連があるということを知ってもらいたい。
- ・湿地にいる色々な生物を知りたい。

●自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

〈変化〉

- ・保護の仕方。手を動かすだけでなく、必要性を訴えることが大切だと思うようになった。
- ・湿地の生物や植物について関心が深まった。
- ・湿地にいる生き物、植物についていろいろ学ぶことができた。
- ・湿地の生物や植物について関心が深まった。

〈気付いたこと〉

- ・言葉が難しいので気を付けるべき。

〈感想〉

- ・中学のころからやっていた湿地保全ボランティアのこともあり、だいたい知っているつもりだったが、学ぶことが多かった。
- ・初めはあまり興味がなかったものが少しずつ興味をもつようになった。
- ・最初に比べて発表に対するやる気が出た。皆の湿地知識が深まった。
- ・この活動を通して生物に対する見方が変わりました。

[愛知県立知立東高校]

日時：平成 29 年 10 月 31 日(火)16:30~18:00

場所：愛知県立知立東高校

対象：生徒 5 名

〈主な内容〉



●なぜこのクイズをつくったのですか

- ・ミシシippアカミガメは今、在来種であるイシガメやスッポンの繁栄を防いでいることがいままでの活動で分かり、そのことを周りに伝えたかったから。
- ・ミシシippアカミガメが増えていることを楽しんで学んでもらうため。
- ・他の学校よりも楽しく学べるものをつくろうと思ったから。小さい子に一番効果的だと思ったから。
- ・面白そうだから。実をいうと最初はそこまで関わる気はなかったんですが、いつの間にかすごく深いところまで来てしまったので、自分でも驚いている。
- ・身近にあることを実際に身近に感じてほしい。

●何を伝えたいのですか

- ・外来種であるミシシippアカミガメが在来種のカメたちのじゃまをしていて、外来種の生物は雑食でとても増えやすいこと。
- ・今、外来種があらゆる場所で増えていることと、生き物を捨てないでほしいこと。
- ・ミシシippアカミガメが何でもたくさん食べるからよく増えること。カメはこんなふうにいるんだということ。猿・渡川にいる生物の詳しい名前、ペットを捨てた影響。
- ・カメが普段どのように生活しているのか。やカメと他の生き物との関係など。
- ・カメにとって嬉しいこと、よくないことと、人間との関わり。

●今後やってみたいことはなんですか

- ・猿渡川の植物の調査一年分。カメたちが何を食べるのか。他の生物たちの成長様子調査。カメたちの成長記録。
- ・カメだけではなく、猿渡川にいる魚や植物についてもっと調べたい。特に植物に関しては、時間がなく、深く調査できなかったので、徹底的に調査できたらいいと思う。
- ・カメや川の水中での観察、植物調査。カメのより詳しい食性調査。
- ・もっとカメについて深く知ってみたいのと、今作っているものをよりよく改良していきたいと思う。
- ・もっと人間がカメに及ぼす影響を調べたい。

●自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

- ・周りから勝手に理科系の科目ができると思われるようになった。猿渡川に詳しくなった。見る視点が変わった。
- ・調査研究することはどうということなのか、他の人に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いかを学ぶことができました。また、研究の難しさを知ることができた一方、研究の楽しさも知ることができ、将来、研究をする仕事に就きたいという気持ちがよりいっそう強くなりました。
- ・川の水への抵抗がなくなった。カメに情が移り、殺すことへの抵抗が増えた。あらゆることでこのプロジェクトはとも勉強になった（植物調査やゲーム制作など）。

・たかがカメでここまでできるとは思っていなかったの、度々あぜんとしている。しかし、活動自体は興味深くとても楽しいので、参加して良かった。カメの速描きができるようになった。

・私が好きな景色だけではなく、植物にも生物にも目がいくようになりました。私ってこんな見方ができるんだ・・・と。季節ごとに変わるのは風景だけではなく、もっと細かい所で多くのものが移り変わると知ってすごく色々なことが輝いて見えました！楽しかったー！！

[愛知県立松平高校]

日時：平成 29 年 11 月 7 日(火)16:00～17:30

場所：愛知県立松平高校

対象：生徒 13 名

〈主なヒアリング内容〉

●なぜこのゲームをつくったのですか

- ・子どもたちが分かりやすく、簡単に遊べて楽しく遊べるゲーム。
- ・幼い子供にも楽しんでもらうために!?
- ・いろんな人に竹を知ってもらうため。どんな人でも分かりやすく知れるように。
- ・小さな子でも楽しめるように。
- ・子どもたちに分かりやすく竹を教えるため。
- ・小さい子でも楽しんで竹のことを知ってもらうために。
- ・楽しく色々な人に知ってもらいたい！
- ・竹の問題について学びながら楽しむことで皆に知ってもらえる！
- ・子どもたちに合う遊びで楽しく竹について学んでもらおうと思ったため。
- ・小さい子と親に協力して環境についていろいろな事を学んでいただくため。
- ・小さい子でも遊べるように。また、遊びの中で竹について学んでもらうため。
- ・小さい子だけでなく、その親にも環境問題について学んでほしいと思ったため。自分の知識の深め。仮にその場面に出会った時、自分が何かできたらと思う。
- ・小さい子どもでも分かりやすく、なじみがあると思ったから。誰でもできる。

●何を伝えたいのですか

- ・竹の素晴らしさ。
- ・幼い子や中学三年生に松高のすべてを知って欲しいから。
- ・竹は一種類ではないこと。色々な物に変化できること。
- ・日本の山などで竹がどんな状況か知ってもらうため。
- ・竹をもっと知ってもらうため。環境。
- ・竹が今どんな所で問題になっているかを知ってもらいたい。
- ・環境問題（竹のことについて）現状について。
- ・竹の違い。今と昔の違い。今抱えている問題。



- ・竹を放置していると竹が増えていき、環境問題につながっていくこと。
- ・環境問題（現在と過去の違い）
- ・竹に係る環境の変化を教えるため、真竹（まだけ）と孟宗竹（もうそうちく）の違いを教えるため。
- ・今、日本が持っている環境問題を知って欲しい。松平だけじゃない。松平の活動→家庭クラブの行っていること。
- ・竹のことや環境について。竹は今増えてきてしまって問題になっているので、これを機に興味を持って、私たちに続いて竹のことを考え、使い方を更に広げてほしい。

●**今後やってみたいことはなんですか**

- ・流しうどん（そば）。
- ・タケノコ料理を食べる！！
- ・流しそうめん。
- ・竹を使ってみんなが楽しめるものを作りたい。
- ・たけのこを作って食べ物を作る。竹でもっと新しい遊び道具を作る。
- ・たけのこを取りに行ってみたい。
- ・竹を減らすこと。リメイク。生活品に→木材で作られたものを竹に！
- ・竹を食べたい。遊び道具だけではなく日用品を作る。
- ・多くの人に竹について知ってもらい、さらに身近なものとして竹を利用していけるようにしていきたい。
- ・竹を使ってイスなど家庭に関わるものを作り、いろいろな人に知ってもらうため。
- ・竹を使った遊びや、道具を作ってみたい。
- ・生徒会活動に繋がりたい。「松平」のシンボル。もっと多くの人々に伝えたい。→地域交流。竹での物作り。→家庭クラブ活動の促進。
- ・一人でも多くの人に竹の状況を知ってもらいたい。たけのこ料理の新しい案。

●**自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください**

- ・竹が何種類もあることを知った。
- ・竹がとても好きになっていた。
- ・全く知らなかったこと（竹のこと）に詳しくなった。
- ・山などに興味はなかったけど、家庭クラブ活動を通して色々な知識を知ることができた。
- ・孟宗竹（もうそうちく）、真竹（まだけ）のことを初めて知ったし、中国と日本にあるなんて知りませんでした。
- ・真竹（まだけ）と孟宗竹（もうそうちく）の違いが分かるようになりました。竹について興味をもった（前よりも）。
- ・竹問題を知れた。竹の利用方法について考えるようになった。
- ・今回、子どもたちに竹について知ってもらうため、自分自身何となく販売をしていた。
- ・竹について調べ身近に環境問題になってしまうことがあるのかと危機感を感じてきた。
- ・あまり関わっていないものと思っていたけど、意外な使い方や物になっていると知りました。
- ・竹について興味が出たこと。久しぶりに竹で遊んだので、とても楽しくて、皆に広めたり遊び方を教えたいと思っ

- ・再びリーダーとしての自覚を持てた。家庭クラブ役員の仲が深まった。自分でも環境問題について学べた。進路の選択、人々の協力。「家庭クラブの大きな第一歩」
- ・竹のことをさらに深めることができた。家庭クラブの重要な活動をみんなで協力できて、行動力がもっと身についた。

<成果>

すべての高校の生徒が、それぞれ対象にしている課題は違うものの、地域にとって非常に重要な課題であり、その解決のために行動をしていかなければいけないことや、そのためにわかりやすく伝わりやすいツールを使って、伝えていくことが求められていることを十分認識していることを把握できた。

自分が知ったことで伝えたい気持ちが高まり、一方で悩みながら仲間と協力して環境学習プログラムを作成したことが自信につながり、エネルギーが溢れ、環境学習プログラムに愛着を持っていた。高校生の発言や様子から、各高校が作成した環境学習プログラムを実践できる見本市（お披露め会、交流会）を行うこととした。

(イ) 教員へのヒアリング

<目的>

活動当初とプログラム作成後の教員の変容、環境学習プログラムを作成する過程において教員が把握した生徒の変容と学習の効果について把握し、学校間の連携の可能性や今後のネットワーク形成に必要な要素を抽出した。ヒアリング項目は生徒と同じ内容とした。

- なぜ〇〇〇〇をつくったのですか（〇〇〇は紙芝居やカルタ、クイズなど作成した環境学習プログラムツール）
- 何を伝えたいのですか
- 今後やってみたいことは何ですか
- 生徒の変化、自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

<主な内容>

[愛知県立安城南高校]

日時：平成 29 年 11 月 2 日(木) 16:30~18:00

場所：愛知県立安城南高校

対象：辻本智子先生

<主なヒアリング内容>

- なぜこの紙芝居をつくったのですか
パワーポイントで活動をまとめたから。説明しながらできるから。
- 何を伝えたいのですか
川の生き物調べのおもしろさ。川のきれいさ。
- 今後やってみたいことはなんですか
・朝鮮川の調査。
・安城市内の他の川の調査。
- 生徒の変化、自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください。
・環境（身近な自然）について、深く知れた。親しみを感じた。

[愛知県立木曽川高校]

日時：平成 29 年 10 月 23 日(月)16:30~18:00

場所：愛知県立木曽川高校

対象：堀場弘市先生 松澤安奈先生

<主なヒアリング内容>

- なぜこのカルタをつくったのですか
・小学生にイタセンパラについて興味をもってもらうため。
- 何を伝えたいのですか
・イタセンパラは、地域の宝であること

●今後やってみたいことはなんですか

・野生のイタセンパラを見てみたいイタセンパラキーホルダーを作る。

●自分の変化、気づいたこと、感想、コメント

生徒が少しアクティブになり、イタセンパラ自体を詳しくなるだけでなく、多くの人がどのように守っているのか、みんな（地域の人）の努力に気づくようになった。イタセンパラの大切さを伝えるための工夫を考えるようになり、人との交わりを大切にするようになった。私自身は、魚の名前を覚えた。魚が可愛く見える瞬間がある。

[愛知県立武豊高校]

日時：平成 29 年 10 月 25 日(水)16:00～18:00

場所：愛知県立武豊高校

対象：若山正芳先生

〈主なヒアリング内容〉

●なぜこのクイズをつくったのですか

生徒がこれがいいと決めたから。

●何を伝えたいのですか

湿地とそこにいる生物の不思議さ、珍しさを伝えたい。

●今後やってみたいこと

他の湿地にも行ってみたい。壱町田湿地のボランティアを、部活を通じてやってみたい。

●生徒の変化、自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

積極性が育ちました。立派になったと思います。役割を与えるとやるね君達は!!私のムチャぶりによくついて来てくれました。

[愛知県立知立東高校]

日時：平成 29 年 10 月 31 日(火)16:00～18:00

場所：愛知県立知立東高校

対象：隅田 潔先生

〈主なヒアリング内容〉

●なんでこのクイズをつくったのですか

活動内容を身近に感じてもらうため。また、「ゲーム」という遊戯性を持たせることで「遊びながら知る」という利点があるため。自分の経験からアドバイスしやすかったため。

●何を伝えたいのですか

身近な環境に多くの外来生物が生育していること。人間の活動が様々な（良くも悪くも）影響を与えていること。

●今後やってみたいことはなんですか

植物の同定（本年は初歩的なレベルまでしか実施できていない）。校内での部活動発表、特に校内で周知したい。

●生徒の変化、自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

生徒は、自主的に考えて活動するようになった。特に、問題点に対しては教員から言わずとも自ら意見するようになった。活動への意欲が非常に高まった。活動範囲を広げたいと考えるようになった。「組み立てること」の難しさ、大切さをよく知ることができていた。自分は生徒たちと頻りにミーティングやディスカッションを行うようになった。長期的な研究、活動を現実的な視点から組み立てるようになった。

[愛知県立松平高校]

日時：平成 29 年 11 月 7 日(火)16:00～19:30

場所：愛知県立松平高校

対象：天野真由美先生

〈主なヒアリング内容〉

●なぜこのゲームをつくったのですか

幼児向けで遊びながら竹について親しみを持ってほしい。身近に感じてほしい。10 年ほど続く竹炭活動を何からしの形に残したかった。とても良い活動をしているのにあまり知られていない。

●何を伝えたいのですか

当たり前にある竹林について少し興味をもってもらい、竹を食べてほしい。

●今後やってみたいことはなんですか

小学校、幼稚園で実施、実践していきたい。流しそうめんも年間計画に入れていきたい。たけのこ掘り。

●生徒の変化、自分の変化、気づいたこと、感想、コメントを聞かせてください

期待以上。授業では分からなかった生徒の良さが見えた。イラスト画、協力性、編集技術や 1、2 年生の関係が良くなった。すごく頼もしく感じた。時に意見がぶつかることもあったが、ひとりひとりの意見を尊重して、プログラム完成に繋げることができた。

〈成果〉

すべての教員が生徒とほぼ同じ思いであり、生徒や教員の関係性のよさを感じることができた。また、生徒の変化については、積極性、自主性の高まりが見られたことや、普段に授業で分からない生徒の良さが見えた、など教員が生徒を見る視点の変化にもつながった。

高校生のネットワーク形成には、高校生が主役ではあるが、教員の理解や協力が必須となる。教員も、高校生の変化から、さらに変化を生み出す場を求めているようである。生徒間のネットワークも重要だが、教員間のネットワーク形成により、より多様な活動への深化するのではないかとヒアリング内容から感じた。現段階では、各高校の活動という領域でしか活動展開の検討はされていないが、今回の事業を通してさらに教員の視野が広がるよう展開したい。

(ウ) 自治体へのヒアリング

<目的>

高校生が作成した環境学習プログラムを地域で実践するために、各自治体の環境施策、環境教育施策の状況を把握し、高校と自治体の関係性を育むための情報収集、プログラムの活用の可能性、地域で行われている環境活動や環境学習活動とのコラボレーションの可能性について把握した。

下記の項目を対面にてヒアリングした。

- 〇〇高校の環境活動はご存知ですか
- 〇〇高校が今年度愛知県事業で環境学習プログラムを作成したことはご存知ですか
- 〇〇市では環境学習・環境活動を領域とした施策はありますか。どのような内容のものですか
- 〇〇市では NPO など市民団体が環境学習・環境活動を実施していますか
- 高校生の作成したプログラムの実践や、高校との連携による環境活動の可能性はありますか

<主な内容>

[安城市] 安城市役所 環境部 環境都市推進課

日時：平成 29 年 12 月 8 日(金) 14:30～15:00

場所：安城市役所 環境都市推進課

<主なヒアリング内容>

安城市には、安城市が設置した環境学習施設「エコきち（環境学習センター）」がある。安城南高校の自然科学部の活動紹介や、作成された環境学習プログラムの実践を「エコきち」を活用してできるかもしれない。「エコきち」の施設運営は、安城市が NPO である「エコネットあんじょう」に委託している。NPO との連携の可能性もあるかもしれない。

[武豊町] 武豊町役場 生活経済部 環境課

日時：平成 29 年 12 月 5 日(火) 10:00～10:30

場所：武豊町役場 環境課

<主なヒアリング内容>

武豊高校の自然科学部の生徒が愛知県の「あいちの未来クリエイト部」に参加し、湿地の環境学習プログラムをつくっていたとは知らなかった。武豊町の歴史民俗資料館が知多半島の湿地については詳しく、町内にある壱町田湿地の保全活動等をしている。歴史民俗資料館と連携して活動ができるといい。

[知立市] 知立市役所 市民部 環境課

日時：平成 29 年 11 月 22 日(水) 10:30～11:00

場所：知立市役所 環境課

<主なヒアリング内容>

知立東高校のことはもちろん知っている。知立市と連携もできている。今回の愛知県事業「あいちの未来クリエイト部」に知立東高校が参加していることは知らなかった。知立市にも外来種が多く、特にオオキンケイギクの駆除活動をしていく予定であり、知立東高校の自然科学部のみなさんや生徒さん達と一緒に活動をしていきたいと考えている。

[一宮市] 一宮市 環境保全課

日時：平成 29 年 12 月 6 日(水) 10:00～10:30

場所：一宮市環境センター

<主な内容>

木曽川高校のイタセンバラに関する活動のことは知っていた。ただ、今回生徒達が作成した「イタセンバラかるた」や、「イタセンバラかるた」を使っの環境学習活動のことは知らなかった。一宮市では木曽川の水辺の環境学習活動をしており、歴史民俗資料館ではイタセンバラの展示もしている。作られたプログラム紹介や実践など交流も考えていきたい。

[豊田市] 豊田市役所 環境部 環境政策課

日時：2017 年 12 月 8 日(金) 10:00～10:30

場所：豊田市役所 環境政策課

<主なヒアリング内容>

松平高校の竹林保全の活動、竹炭づくりなどは少し知っていたが、生徒さんが作成した竹に関する環境学習プログラム「たけすご」のことは今回初めて知った。豊田市には、「豊田市自然観察の森」という豊田市の自然環境に関わる自然体験、環境学習をしている団体がある。豊田市自然観察の森では、年に1度「自然ふれあいフェスタ」を開催しており、そこで「たけすご」ができるかもしれない。自然観察の森で活動をしているジュニアもりレンジャーの小学生との連携や、子どもから大人までの多様な世代の学びあいの場、交流の場ができるかもしれない。おもしろそうなので、一度やってみたい。

(工) NPO 等へのヒアリング

<目的>

高校生が作成した環境学習プログラムを地域で実践するために、各地域の NPO 活動を把握し、連携の可能性を探る。地域で行われている環境活動、環境学習活動とのコラボレーションの可能性についても把握した。

<主な内容>

[豊田市矢作川研究所] 主任研究員 洲崎 燈子氏

日時：平成 30 年 3 月 2 日(金)13:00～13:30

場所：豊田市矢作川研究所（豊田市）

<主なヒアリング内容>

今回の高校生の活動は地域の自然を知るとてもいい活動だと思う。愛知県は自然にとっても恵まれているので、ぜひこれからも進めていってほしい。当研究所とすぐに連携というのは難しいかもしれないが、矢作川学校というプログラムを実施しており、講師派遣等もしているので今後何か連携できるかもしれない。また、豊田市では公民館を交流館と呼び、活動の周知のためのチラシ配布などを行っているので、そういう場所に活動紹介を置くなどすると可能性が広がるかもしれない。

[豊田市自然観察の森] 所長 川島 賢治氏

日時：平成 30 年 3 月 2 日(金)15:30～16:00

場所：豊田市自然観察の森（豊田市）

<主なヒアリング内容>

それぞれの高校の特色を出しつつ、小学生から中学生にも分かるような環境学習プログラムをつくっている。プログラムをつくることから小学生や中学生を巻き込んでいけば更に地域と結びつけていけるのではないかと感じた。豊田市の小学校で同じ地域の課題を取り上げて環境学習が取り組まれていればコラボできるかもしれない。自然観察の森では、展示ブースを無償で提供しているので、他の 4 校にも活用いただけるとよい。

[認定 NPO 法人 エコネットあんじょう] 理事長 神谷 輝幸氏

日時：平成 30 年 3 月 6 日(火)15:00～15:30

場所：安城市民交流センター

<主なヒアリング内容>

エコネットあんじょうも安城市の環境課題を市民の手で何とかしよとしている。今回、高校生という若い子どもたちが身近な川に目を向けて活動をしている。特に若い人たちが積極的に取り組んでいることは素晴らしいことだと感じた。若い人たちに期待しているので、若い人たちを応援したい。そして、できる範囲の中で一緒にやっていきたい。

<成果>

自治体、NPO 等地域の活動団体もこの取組への興味と期待がある。今後どう連携するかであるが、いくつかの可能性あることを把握することができた。

<すでに連携により実施を予定しているイベント>

- 愛知県立安城南高校×認定 NPO 法人エコネットあじょう
平成 30 年 3 月 17 日(土)開催 「環境サミット」参加
- 愛知県立松平高校×豊田市自然観察の森
平成 30 年 5 月 (予定) 「自然ふれあいフェスタ」参加



(オ) ファシリテーターへのヒアリング

<目的>

高校での環境プログラム作成過程に関わったファシリテーターに、プログラム作成におけるプロセスや生徒及び教員の変容、気づき、また高校生との学びあいにおけるファシリテーター自身の変化について把握するためにヒアリング調査を実施した。ファシリテーターには、本事業の協働プラットフォームメンバーとして関わっていただいた。

<主な内容>

[愛知県立安城南高校] 白上 昌子氏 (NPO 法人アスクネット 代表理事)

日時：平成 29 年 10 月 29 日(土)13:00~14:00

場所：愛知県ユネスコスクール交流会 (東海市芸術劇場・大屋根広場)

<主なヒアリング内容>

今回、高校の自然科学部というクラブ活動の一環として取り組んで、高校生を対象にした環境の取組を広げていける可能性を感じた。ファシリテーターとして気をつけたことは、最終の目標設定と、全 7 回各回の計画設計とふりかえり、チェックをすることである。プログラムの作成においては生徒の関心の高い生きものだけでなく、生物に興味がない人の興味をそそるような工夫や楽しめる視点を加えることを問いかけ、提案して、その都度確認しながらすすめた。

生徒の思考の転換に時間はかかったが、生徒達のこのプロセスはとても大事で、自分達が学んだことがどうだったのかを整理し、アウトプットすることが必要だった。

生徒は動いている。生徒自身にない発想も、こういうやり方もあるねと情報提供し、問いかけながらやっていくことで、生徒もそうだ、と動いていく。生徒が動き始め、先生がサポートする。よく見えていなかったものが見えてくる楽しさ、こうすると生徒は変わる、クラブ活動が活性化していく、という手応えを先生も感じていた。

高校生はもっと可能性を秘めている。地域での発信力という目的で、出前授業や環境講座で、生徒たちが学んだことを、生徒自身が教える立場になっていくことで、この事業の価値が活きてくる。地元の小学校や地域の NPO 団体とつながり、実践を可能にし、また、そういったことを伝統的にやっているクラブとして学校の一つの伝統となるとよい。教材を上手く活かしてほしい。

[愛知県立木曽川高校] 新海 洋子 (環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー)

日時：平成 29 年 10 月 23 日 (月) 18:30~19:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

<主なヒアリング内容>

木曽川高校の生徒が「イタセンパラ」を思う気持ちの強さを多くの人に知ってほしい。第 1 回の会議では、全生徒に自己紹介してもらい、「なぜイタセンパラなのか」を聞いた。それぞれの理由はあったが、「イタセンパラ」に魅かれている高校生に私自身が興味をもった。「イタセンパラカルタをつくる」というプランはほぼ決まっており、どういつくりかたをするか、誰を対象にどういった内容にするかを生徒同士で考える時間を多めにとった。顧問の先生は心配そうであったが、高校生が高校生自身の言葉で伝えたいことを伝えるかるたにこそ魅力があり

人に伝わる、と岐阜経済大学の森先生の専門性を得ながら、じっくりみんなで話しあった。最初話し合いが苦手な生徒も「伝えたい」気持ちになり発言や会議への向き合い方が変わってきた。他の部活と兼ねての参加でもあり、毎回全生徒が参加するわけではなかったが、そのあたりも生徒同士が支え合いながら、役割分担をしてすすめていた。この取組には2つの要素がある。

1 つは、地域の課題は高校生の言葉や感性をフルに使って環境学習プログラムをつくること、である。もう1 つは生徒が自らの言葉で表現をして伝えあい、話しあい、仲間と作り上げていく作業、コミュニケーションの積み重ね、である。プログラム作りを重視すると、コミュニケーションや作り上げていく仲間との関係性を育むための十分に時間がとれない、コミュニケーションや作り上げていく合意形成、話し合いの時間、関係性を育む時間に多くを費やすとプログラムづくりが遅くなる。この2面を高校生は高校生なりに時間を使い、作り上げたのが「イタセンパラかるた」である。最終回で森先生から最終チェックを受け、イラストや言葉の書き換えが発生したが、見事にクリアした。このプロセスと成果物のクオリティの高さが高校生の自信、自己肯定につながっている。

私たち大人がすべきことは、高校生が活躍できる場をいくつもつくることだという思いを強め、長くもあり、短くもあった「イタセンパラかるた」づくりは終了した。

[愛知県立武豊高校] 浅井 豊司氏（株式会社フルハシ環境総合研究所 代表取締役所長）

日時：平成29年10月25日(水) 17:30～18:00

場所：愛知県立武豊高等学校

〈主なヒアリング内容〉

現場に行って、足で稼いでつくったクイズは身体性があって、すごく楽しかった。現場に行ってみて、不思議や感動がないとここまで面白いものにはならなかったと思う。生徒のみんなが初心者だったからこそ湿地っておもしろいっていろいろな目で見られたことがうまい形で反映されている。

大人は誰一人知恵を授けていなくて、全部生徒が考えた。専門家の先生のアドバイスで少し直したりはしたが、基本は全部生徒が考え、部員の力を総結集させてつくった。高校生のポテンシャルはすごい。

この事業では、生徒の力、先生、学識者の力の掛け合わせでできる、化学変化のようなものを学んだ。金山での場が外に向けて初めてお披露目する場所になる。最初はどきどきすると思うが、高校生が楽しそうにやっていると思うと、楽しいことが好きな人は集まってくれると思うので、臆せずやってもらいたい。ここからがスタートだと思って、活用の部分で生徒のみんなが活躍されるのを楽しみにしている。

[愛知県立知立東高校] 大鹿 聖公氏（愛知教育大学教授）

日時：平成29年11月22日(水)17:30～18:00

場所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

〈主なヒアリング内容〉

カメの調査しかやってきていない生徒達にもっと活動の場を広げたいという顧問の先生が本事業に応募し

た。生徒達自身の学びたいという自主性は低かったが、植物について学びたいという気持ちはあった。

環境学習プログラムとは何か、を学ぶ体験をした。プログラムは、人に話して説明するのではなく、体験しながら理解するものであることを伝えた。生徒達は動いたり、活動したりする方が相手には理解しやすいということに気づいた。また、植物調査はやり始めたが、とても今年のプログラムづくりはできないので、今回はカメのプログラムでいくこととした。生徒達にはどうしても植物を入れたいのなら、入れる方向でもいいが、どうするか自分たちで考えてほしいと伝え、生徒が考え、「カメですごろくが作りたい」と提案が出てきた。

ファシリテーターとして、相手の立場になって説明するように伝えた。生徒達は最初もじもじしていた。前半は動かなかったが、「はっきり言うように」、「それでは伝わらないよ」等と投げかけていく中で、回を重ねるごとに物事を明確にできるようになった。女子生徒もプログラムをつくる時には、やりたい思いが出てくるようになり、主体的に動けるようになった。

また、私と隅田先生とのベクトルが一緒だったので、生徒たちに私の意図が伝わっていない時にも、隅田先生に私の意図が伝わっており普段の部活動で隅田先生から軌道修正してもらえ、やりやすかった。植物ではなくカメをプログラムの題材に選んで、生徒達が複数年築いてきた思いが形にできて、よかった。

顧問の隅田先生は高校生の視野を広げさせたいという思いがあってこの事業に申請した。カメに関する活動だけでは手詰まりを感じていたようだった。生徒達が本事業に取り組んだことで意識が変わったことから、先生も生徒が成長したと思っている。自然科学部だけの活動だけでは小さい活動で終わっていたが、専門家と私と一緒にやる中で、アグレッシブに取り組むことにより、生徒は成長した。

活動を始めた頃は、自分たちの活動を自信なげに説明していた。しかし、新たな課題に取り組むうちに活動の楽しさに触れ、その中に新たな課題を見つけ、意欲をもってプログラムを完成させた。その中には彼らの研究成果と環境への思いが十分に込められ、しかも分かりやすく楽しめる形にできあがった。彼ら自身の変化や成長が見て取れた1年であった。今後の展開や可能性に大いに期待したい。

【愛知県立松平高校】 長谷川 明子氏（1級ビオトープ計画管理士）

日時：平成29年11月15日(水) 14:00～15:00

場所：名古屋市内ミーティングスペース

〈主なヒアリング内容〉

最初は、生徒達は竹のことするらしい、県の事業をうちの学校でやるみたいといった感じだった。生徒達の地元、松平の地域に竹が増え、地域のおじいさん達が竹を伐って竹炭づくりをしている。高校として地域の竹を使っていこうとなり、家庭クラブがリーダーとして地域の竹林に関する活動をするようになった。炭焼きにも関わり、竹炭は高校で袋に入れて、文化際に出したり、プレゼントしたり、売ったりしている。

生徒たちに、このまま竹を放っておいたら10年後どうなるか、といったことを時間軸で考えるきっかけになるようにアドバイスをした。生徒は、自分達が今竹のことを考えないと、今見ている周りの森がどうになってしまうのかという未来を考えるようになった。最初は、竹林をこのまま放っておくとどうになってしまうのか、と聞くと、ほとんどの生徒は放っておけば緑だしいい、と言っていたが、この事業を通じて、「私達が30才になった時に、木が全部なくなってしまって竹ばかりになってしまう可能性がある、それではいけない、今緑があるからいいではなくて、何をし

なくてはいけないのか、その一つにプラスチック製品を竹に代える、このプラスチック製品は竹に代わるのではないかを自分達でチェックしよう」という考えが出てくるようになった。

プログラム作成については、誰に対して何をするのか、何をつくるのか、といった話し合いをした。子ども好きの生徒がいたため、子どもを対象にプログラムを作成することになった。生徒が考えたものは、竹トンボや竹馬といった竹の遊具であった。単に道具で遊ぶだけではなく、遊ぶことを通して「竹の生態」や「竹の現状」を理解し、何ができるのか、を伝えるプログラムを考えることとした。どういものをつくって、どういう形にして、何を伝えるのかをまとめた設計図面のようなものを生徒がつくり、プレゼンテーションをし、それに対するアドバイスをした。活動を通じて竹の持つ力、竹が未来にどう影響するか、竹の遊び道具といったように竹に対する視野が広がった。

そのことを伝える環境学習プログラムを2つ作成した。1つは竹林管理など竹を取り巻く環境を伝えるプログラムである。ボードゲームで、持続可能性はぐるぐるまわって終わりがなく、という生徒たちの話からゴールのないすごろくをすることとした。すごろくをすると、竹、竹を取り巻く環境、いろいろな道具にもなる竹について学ぶことができる。竹けん玉等遊び道具を通して理解してもらい、竹に触った感覚を体験した。モウソウチクとマダケに違いにも気づいてもらえるように考えた。竹に関すること、竹炭がどうやってできるのかを理解するプログラムである。

もう1つはモウソウダケという外来種とマダケに絞って伝えるプログラムである。「カードゲーム」を作成したが、小さい子どもにも竹を理解できるゲーム性が高く単純なものを考えた。

最初は先生がいつも説明や話し、生徒がただ聞いている状況だった。途中から、生徒たちが話し合う状況になり、2年生が中心となって進めた。部長を含めて全員が他のクラブと掛け持ちしていて、時間もとりにくかったと思うが、リーダーの責任感が強く、メンバーもまとまっていた。生徒主体で、先生はアドバイスをし、というすすめかたであった。私の印象では、先生も高校生の仲間の一人という感じであった。この事業をやってよかった。やるべきこととしての意味が高かった。

<成果>

ファシリテーターのヒアリングから、なぜ生徒たちの主体性が育まれたのか、を把握することができた。全ファシリテーターが、高校生の主体性を大切にし、「地域課題を自分事にする」「現場での作業」「話し合うプロセスにおける参加」「作る事ができたという自己肯定感の高まり」を大事にして環境学習プログラムづくりを進めてきたからである。そして、その過程には、「何をだれに伝えたいのか」「どうして伝えたいのか」「何を使って伝えたいのか」を繰り返し繰り返し問い続けながらの作業工程であった。ほぼ同じ経験をした高校生が出会うことで、新しい何かが生まれることを感じさせたヒアリングであった。

(カ) 愛知県ユネスコスクール交流会出展

<目的>

高校生が作成した環境学習プログラムの紹介と実践を行い、高校生の実施した感想や体験した子ども達の反応を把握する。

<概要>

日時：平成 29 年 10 月 29 日(日) 12:00～15:00

場所：東海市芸術劇場・大屋根広場

参加高校：安城南高等学校（生徒 4 名 教員 1 名 校長先生 1 名）

木曽川高等学校（生徒 2 名 教員 1 名）

<主な内容>

愛知県ユネスコスクール交流会での展示ブースへの出店を募集していたため、高校生が作成した環境学習プログラムの実践ができないかと検討し、「あいちの未来クリエイト部」に参加している 5 校のうち 2 校、安城南高校と木曽川高校が参加することとなった。

愛知県立安城南高校 「身近な川の探索帳 クイズで知ろう！ あんじょうしないの川のいきもの」

愛知県立木曽川高校 「イタセンパラかるた」

安城南高校は 4 人の生徒がプログラム「クイズで知ろう！ あんじょうしないの川のいきもの」を実施。子どもや保護者の方々を対象にクイズを展開した。初めて子どもたちに実践するということもあり、高校生は緊張気味ではあったが、子どもたちに「鹿乗川」の環境やいきもの状況を伝えていた。子どもたちも食いつくように紙芝居クイズを見て、答えていた。参加した高校生は、「うまく伝わるか不安だったけれど、やっているうちに楽しくなってきた」と話していた。

木曽川高校は 2 名の高校生がプログラム「イタセンパラかるた」を実施。かるたをし、「イタセンパラがなぜ大切なのか」「イタセンパラがどんな魚なのか」を伝えていた。かるたに参加した人にはイタセンパラバッチがプレゼントされ、イタセンパラを全く知らなかった子どもも大人も、その大切さや、イタセンパラの周りの環境への関心が高まった。かるたの読み札、絵札も面白くわかりやすく作成したことで、身近に感じたようだった。高校生もとても楽しそうで、和やかな雰囲気でのかるた大会となった。

ユネスコスクール交流会で実施したこともあり、教員の参加もあった。特に高校の教員は、高校生が作成したプログラムと知り、その可能性に驚いていた。また、NPO 法人森の学び舎自然学校の活動紹介とワークショップが同じ場所で実施されていたこともあり、お互いのプログラムの紹介、体験もした。また、高校間でお互いのプログラムを体験し、学びあう姿もあった。

最初は緊張して言葉数が少なかった高校生（教員）も帰る頃には親しくなって、お互いの活動への興味が高まっていた。

<成果>

今回は 2 校の参加だったが、高校間、高校生間、小中学生と高校生、地域の人と高校生が短い時間の中で、環境学習プログラムをツールにつながり、お互いの活動や大切にしていることを伝えあう場が大切であり、学びの場として充実したものに場になることを現場から学んだ。今後の企画に活かすこととした。

〈当日の様子〉



(キ) 出前授業

[知立東高校自然科学部]

日時：平成 29 年 12 月 5 日（火）13:55～14:45（50）

実施校：知立市立竜北中学校 1 年 4 組 30 名

実施者：愛知県立知立東高校 自然科学部高校生 6 名（同行 顧問 1 名）

〈主な内容〉

高校生による「カメ」についての 50 分間の授業を行った。高校生が作成したボードゲーム「すごろくカメマス」を使ってゲームをしながらカメの食性や生態、人間の活動が生きものに与える影響を学んだ。

イシガメ、スッポン、ミシシippアカミガメのいずれかを選んでコマをすすめ、止まったマスの植物・動物をエサにしてカメの数を増やす工程で、カメの好物や習性を学びつつ、外来種と在来種のカメの数の違いに触れていった。高校生からは、外来種の問題と人と環境の関わりを感じてほしいというメッセージがあり、そのメッセージを受けた中学生は「人間の活動が生きものや川の環境に影響を与えていることを学んだ。

〈中学生のコメント〉

- ・ミドリガメ（ミシシippアカガメ）は、外来種で、何でも食べるカメです。大量発生しているということで、ペットを飼った人は、責任をもって欲しいです。
- ・全員、親しみやすく、そしてわかりやすく説明してくれるので とても楽しく猿渡川のことを学ぶことができました。
- ・外来生物が多いことがわかったけど、外来生物が悪いのではなく、これを放った人が悪と思った。
- ・とても楽しくやれたのでよかったです。分かりやすく工夫された手作りの材料でとても楽しくカメの勉強ができてとても良かったです。
- ・知立市の自然環境や生物について、知れる機会はありませんと思うので、良かったです。自然環境は、私たち人間にも大きな関係があるんだなと思いました。
- ・カメマスはとっても楽しくて、途中でくださった次期部長の方の説明はとても分かりやすかったです。
- ・スゴロクでしげんのことやせいたいけいがわかり、わかりやすくしゃべってくれて、なんでこうなったかを教えてくれて、すごくわかりやすかった。
- ・川にペットとして飼っていたカメをすてる人がいる事があるという事が授業で分かったので、私は絶対にそんな事がないようにしたいです。

〈高校生のコメント〉

- ・前回の愛知県のイベント「Let's エコアクション in AICHI」でも同じゲームをした。前回との違いは、今回は中学生にゲームを使って授業として教えることで、中学生が自分たちが伝えたかったカメの生態（カメの食性等）に気付いてくれたことが今回の授業では体験できた。中学生に教えるのは楽しかったので、次回はもっとしっかり準備してリベンジしたい。
- ・あまり準備をする時間がなく説明が長くなり、だらだらした感じになってしまった。次回は準備に時間をかけてし

っかりやりたい。

・中学生がゲームを進めていく中で例えばスッポンがゼロになり偏りがあることにハッと気付いてくれたことに感動した。やって良かったと思った。機会があれば次もやりたい。

・人に教えることが今までなかった。今回は相手が疑問をもって、それを自分に投げかけ答えることによって段階的にでき、それを中学生が吸収してくれたことが楽しかった。また次回もしたい。

・前回の愛知県のイベント「Let's エコアクション in AICHI」では色々な人たちがイベントに来ており中には全く興味がないような人にも説明をした。今回は中学生が意欲を持ってきておりとてもやりやすかった。・中学生に学んで欲しいことをちゃんと学んでもらえているようでよかった。自分の声が小さかったので、次は大きい声をだしたい。また、次回は説明する立場ではなく、中学生と一緒にゲームをやる立場でやりたい。

〈担任のコメント〉

普段の授業では教科書に基づいた実験が多く、本日のようなゲーム形式の授業の機会がないので生徒たちにとっていい経験になった。また、外来種の勉強は2年生でするので、今後の学びに繋げていきたい。

〈校長先生のコメント〉

すごく楽しみながら生徒たちは色々なことを学べた。高校生がゲームを考えた時点で高い評価をしたい。改めてすごくを見て一クラスしかできなかったのが残念である。他のクラスでもやりたい。

今日は上手く説明ができなかったや言葉が足りなかったと思うこともあるかもしれないが、皆さんにとって上手くいったということと生徒にとって楽しかったということでは少しギャップがある時がある。今日は生徒にとって楽しい時間だった。今日授業を受けた生徒はいつも模範的な生徒ばかりではない。子どもはとても正直なので、高校生の皆さんの思いが生徒に伝わったのだと思う。生徒は一生懸命ゲームを通して学んだ。

〈知立東高校 自然科学部顧問のコメント〉

それぞれが自分のできる役割をもって、自分の知っている知識やもっているものを自分の言葉で伝えられていたのはよかった。後になってあれを言えばよかったと言葉足らずの部分に気付くことがあったと思うが、次に活かせるいい経験ができた。今回は、中学生の皆さんがいい意味で模範的に授業に参加してくれた。授業前は、授業を聞いてくれない時の対応も考えなければいけないと思っていたが、今回は楽しく授業ができ、生徒にとってもよい経験になった。

〈成果〉

高校生が伝えたいこと、大事にしていることを伝える。中学生は普段とは違った面持ちで高校生を見つめる。高校生と中学生、年齢が近い世代が学びあう場は、非日常的な空間となり、お互いに刺激を与えあった。このプログラムだけで完結するのではなく、学校の年間授業計画に位置付けて、プログラムを一つの教材として活用する可能性をおってほしい。社会、総合的な学習の時間を上手く使ってこのプログラムの時間をもてるとよい。高校生による中学生を対象にした出前授業の実施はまさに ESD 実践である。この取組が他校のプログラムにも汎用されるよう、学校教育とのパイプを作り出すことが重要である。

[愛知県立木曽川高校]

日時：平成 29 年 12 月 21 日（木） 13:40～14:25(45) 14:30～15:15（45）

実施校：羽島市立正木小学校 5 年 4 組 36 名

5 年 2 組 37 名

実施者：愛知県立木曽川高校 総合実務部 5 名（同行 顧問 2 名）

〈主な内容〉

国の天然記念物に指定されている淡水魚「イタセンバラ」についてかるた取りゲームで学んでもらおうと作成された「イタセンバラかるた」を使った 45 分間の授業を行った。8 班（1 班 4～5 名）に分かれて教室の床にかるたを広げ、読み札を聞きながら、絵札を探す小学生。絵札に込められた読み札の内容を説明する高校生の話を聞き知っている小学生の姿に、「イタセンバラ」を通して楽しく未来を考える授業となった。

〈5 年 2 組児童のコメント〉

- ・イタセンバラの生活や楽しさが絵に表せていて、すごくよかったです。
- ・やさしく教えてくれたし、いろいろなアドバイスなどもたくさんしてくれたので、とてもうれしかったです。
- ・生物がすみにくい環境にいることや絶滅危惧種がいるので守っていきたいです。
- ・私たちも学習発表などでクイズなどやるけど、イタセンバラかるたみたいにはできないので勉強になった。
- ・高校生のみなさんのおかげでイタセンバラのことや外来種のがよくわかりました。
- ・今日の授業を受けて、イタセンバラが絶滅してしまわないようにゴミを拾うなどなどのボランティアをすることが大切ということがわかりました。
- ・イタセンバラかるたをしてイタセンバラを助けたいし日本の生きものを守りたいです。
- ・イタセンバラが 2 まい貝にたまごを産むなんて知りませんでした。
- ・今の木曽川はちょっときたなくなっているんで、ぼくも川をきれいにしたいです。
- ・イタセンバラのことがかるたでわかりました。また、楽しいかるたをしたいです。

〈担任のコメント〉

イタセンバラや木曽川にすむ生き物について知ることができてよかった。イタセンバラ以外の生き物にも興味があったと思う。高校生はとても明るく、子ども達に分かりやすいように話してくださって楽しい時間を過ごすことができた。子ども達の中にどんどん入って盛り上げてくれたのもよかった。カルタは学習できるように工夫されていて、絵も上手で素晴らしかった。

〈5 年 3 組児童のコメント〉

- ・授業がわかりやすくて楽しくかるたをすることができました。
- ・かるたをつくったのがすごい。楽しかった。
- ・イタセンバラが天然記念物だということがわかりました。学校で育てている 8 匹のイタセンバラを大切に飼育したいです。
- ・川的环境や生きもののが知れてよかったです。

- ・イタセンパラがこの木曽川にいて川の環境を私たち羽島のみんなで協力し合っていきたいと思います。
- ・人の手によって魚がごろされたり、外来種がきているので、少しでも減らしたいと思います。
- ・イタセンパラが減少しないように少しでも何かやりたいと思いました。
- ・わたしも小学校低学年の人たちにイタセンパラのことをもっと知ってという気持ちを届けたいです。
- ・イタセンパラの重要性がすごくわかった。楽しかった。
- ・みんなが楽しめたり、たくさん学ぶことができたりするかるたをつくってくれたし、とても環境について学べました。

〈担任のコメント〉

本校でもイタセンパラの世話をしているので、子ども達同様よく知っているつもりでしたが、初めて知ることもあり、更に興味が深まった。高校生は話し方やゲームの進め方が上手で感心した。ゲームの進行係以外の生徒さんが小学生の輪に入り一緒にゲームをする姿もほほえましかった。来て頂けて良かった。学級の子も達も大喜びだった。

〈木曽川高校 生徒のコメント〉

- ・小学5年生の児童は、みんな元気で声が伝わりにくかったです。純粋にカルタを楽しむ子もいれば、イタセンパラについて知ろうとしてくれる子もいて、全員にイタセンパラについて知ってもらうために工夫が必要だと思いました。
- ・楽しくカルタをするために、どうしたらいいのか工夫をするのが難しかったです。特に意識したことは、大きな声で話すことと常に笑顔でいることです。また、小学生は純粋に物事を受け止めるので、言葉遣いにも気をつけました。私はこの活動を通して、カルタを作成してよかったと思います。理由は、活動のメンバーと協力しながら作成したカルタで、小学生が楽しそうに遊ぶ姿を見て、達成感を味わうことができました。もっとカルタでイタセンパラを広めたいです。
- ・小学生に授業をするということが、とても難しかったです。最初はどやって教えたらいいかわからなくて、火曜日の時は思わず大声で言ってしまったこともあったけど、だんだんと慣れて、最後は上手くできたかなと思います。
- ・思っていたより楽しそうに取り組んでいて良かったです。初めての経験だったのであたふたすることも多かったですが、無事に終わられてほっとしました。
- ・思っていた以上に元気でこっまで元気になれた。自分から静かになる子が少なく、次のふだを読む時が大変だったが、「静かにしてね」と声をかけると静かになったので、良い子たちだなと思った。

〈木曽川高校 顧問のコメント〉

- ・小学生は反応があり、楽しく、イタセンパラについて学ぶことができたと思われる。漢字には全て「ふりがな」を付けたことにより、低学年でも読み札を読むことができるようになった。今後は、「かるた」だけではなく、「イタセンパラ双六」や「イタセンパラ人生ゲーム」等を作り、広報活動を継続したい。
- ・楽しそうにかるたに取り組む様子が印象的でした。かるたの絵に興味をもってきていたので、絵札を用いたクイズややり取りがもっとできると良いと思いました。生徒と子どもたちの会話が増えるともっとよりよくなる

思いました。

〈成果〉

高校生が小学生に授業をする。高校生にはなかなかできない体験である。「イタセンパラのことを伝えたい」、その思いでかるた大会を行ったが、楽しんでいる子ども達にほっとしたり、声が伝わりにくかったり、あたふたしたり、言葉遣いに注意をしながら小学生に話しかけたり。高校生は高校生でいろいろ考えて子ども達に向き合ったようである。そして、ども達に気づかされるが多かったようだ。

一方、子ども達は、楽しくかるたをしながら自分達も飼育している「イタセンパラ」をこんなに思っている高校生がいるんだ、自分達も『イタセンパラ』を大切にしくちゃ、という思い溢れるコメントがいくつもあった。

小学生は教員とは違う高校生に親近感をもって授業を受ける、この関係性に日常的にはなかなか体験できない学びがあった。高校生と小学生がつながることはお互いに刺激を与えたようである。

高校生が小学校に出向いて授業をすることはなかなか難しいかもしれないが、地域の同じ課題の活動をしているという共通項をもって学びあう場が作られていくことは非常に重要だと気付かされた。高校生のネットワークには、小中学生の参加も必須である。

〈知立東高校〉



〈木曽川高校〉



(ク) あいちの未来を考えた！高校生が伝える“たいせつなこと”交流会

<目的>

愛知県にある5校の高校生が、地域の自然環境をテーマにして5つの環境学習プログラムを作成した。この5校の高校生が作成したプログラムの紹介、体験、交流を通して、高校生によるESDネットワーク拠点づくりを行う。

<概要>

日時：平成30年3月10日(土) 12:00～16:30

場所：ウインクあいち 1202

ゲスト：辻 英之氏(NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事)

茶谷 淳一氏(名古屋短期大学現代教養学科学科長/教授)

野村 佳世氏(Go4BioDiv/中部地域ESDコースレポーター)

内藤 圭祐氏(名古屋国際中学校・高等学校 教諭/中部地域ESDコースレポーター)

参加者：75名(高校生22名 高校教員5名 一般41名 地方事務所1名 EPO中部6名)

<参加高校>

- ・愛知県立安城南高等学校 自然科学部
- ・愛知県立木曽川高等学校 総合実務部
- ・愛知県立武豊高等学校 自然科学部
- ・愛知県立知立東高等学校 自然科学部
- ・愛知県立松平高等学校 学校家庭クラブ活動

<プログラム>

- 高校生コミュニケーション TIME・ランチ
- プログラム紹介
- プログラム体験(一部抜粋)
- ふりかえりワークショップ
- ゲストからメッセージ

<主な内容>

愛知県の地域の自然環境をテーマにした5つの環境学習プログラムを作成した5校の高校生が集まった。午前中は、初めて会う高校生、教員であるため自己紹介と企画説明と交流の時間をもった。午後から、高校での環境活動を通して作成した「イタセンパラ」、「湧水湿地」、「川のいきもの」、「竹林」、「カメ」を題材にしたプログラムを紹介し、それぞれの地域の自然環境の課題や課題の解決に向けての取組と思いを聞き合った。参加者には予め付箋を配布し、プログラム紹介を聞いての応援メッセージを書いて、メッセージボードに貼っていただいた。その後、プログラム体験を行い、他校のプログラムを実際に体験し、質問や意見を交換する等交流した。参加者にはプログラムを体験してのメッセージを書いて、高校生に手渡した。

後半はふりかえりとして、高校混合のグループで「今後やってみたいこと」をテーマにワークショップを行い、それぞれの活動及び考えを共有し、さらには SDGs にも関連させて今後やってみたいことや高校生が主体となるネットワーク形成の足掛かりとなるような意見交換の場を設けた。

●プログラム紹介（一部抜粋）

【愛知県立安城南高校】身近な川の探索帳

作成した「身近な川の探索帳」を紹介する。自然科学部は、一昨年と昨年は酸性雨と河川の水質の関連性を調べる活動をした。今年、僕たちは、身近な川に生息している生き物について詳しく調査したい、それを地域の人たちに伝えたいと考え、愛知の未来クリエイト部に応募した。



7月に活動を始動した。アドバイザーとファシリテーターを迎え、僕たちの川に対する気持ちを認識するところから始まった。8月には本格的な生態調査の方法を、アドバイザーに指導いただき、鹿乗川の調査を行った。鹿乗川の水は、透明度が低かったので生きものはあまりいないと思っていたが、丁寧に採取することで、生きものを見つけることができた。鹿乗川では、魚類、昆虫の幼虫、甲殻類、貝類など合計15種類の生きものが見つかった。これらの生きものの紹介をするプログラムを作成した。

また、鹿乗川の生きものと比較するために、矢作川の生きもの調査を行った。矢作川では、シロタニガワカゲロウ、カマツカ、テナガエビ、ボラ、タモロコを捕まえた。清流にいる、シロタニガワカゲロウの幼虫もいて驚いた。

これらの調査を踏まえて、環境プログラムを3つ作成した。1つ目のプログラムは、「クイズで知ろう！安城市内の川の生きもの！」。安城市内の小学生が川の生きものに興味を抱いてくれるように、クイズ形式でつくった。2つ目は、「川での最終・調査の仕方」。僕たちのように、川の生きものを調査したいと思った大人向けに作成した。3つ目に、「川に行くときの持ち物、注意すること」という川に入る準備や調査のコツを解説した子ども向けマニュアルをつくった。

プログラムを発表してみて、全体的に身近な川の生きものを知らない人が多いこと、若い人よりも年配の方の生きものに対する知識が多いこと、年配の方は生きものの細かな特徴や当時の川の状況をしっていて教えていただいた。また、この調査で身につけた探索方法を、上流などの違う場所で実行してみたい。

〈参加者の応援メッセージ〉

- ・安城市にそんなにたくさんの生物がいるとは思いませんでした。安城市のミリョクを見つけた気分です。
- ・「川の生き物を調べるときのマニュアル」というのが自分たちにはないアイデアでとてもいいものだった。・クイズ形式だと分かりやすく良いと思いました。また川の調査のマニュアルはあるとすごく便利だと思うので私も欲しいです。
- ・27年度から引き続き調査をし、まとめていることにおどろきました。作成プログラムも段取りがとれており感心しました。体験談からの工夫の一言はとても興味をもてました。



- ・安城にそんな川があるとは知らなかった。もっと子どもたちが川に親しめるようにプログラムを普及してもらいたい！

【愛知県立木曽川高校】イタセンバラかるた

木曽川に生息している国の天然記念物のイタセンバラをみんなに楽しく分かりやすく知ってもらうために「イタセンバラかるた」を制作した。イタセンバラは木曽川の中流域に生息している淡水魚でタナゴの仲間、えらの近くの黒いあざと秋の繁殖期にオスのお腹の色がきれいな婚姻色に変わることが大きな特徴である。木曽川中流域は川



幅が広く流れがとても緩やかで、川岸には川の本流と一部がつながっているワンドやたまりがある。イタセンバラは1974年（昭和49年）に国の天然記念物に指定された。現在では、大阪平野、富山平野、濃尾平野の一部にしか生殖していない絶滅危惧種である。

地域の宝であるイタセンバラを守るためにかるたをつくった。イタセンバラかるたの遊び方を紹介する。3～6人で一人が読み手になる。間違えた絵札を取った場合はお手つきとなり一回休み。絵札のひらがなの枠には、黄色と白色がある。黄色の絵札はイタセンバラに関する札で得点が2点、白色の絵札は環境問題などに関する札であり得点は1点である。最後に各自が獲得した絵札の得点を計算し、一番高い得点を得た人が勝ち、同点の場合はじゃんけんを決める。

小学校でイタセンバラかるた大会を実施した。5年生 133人が選んだお気に入りの札を紹介する。1位は「せ」の「センバラ センバラ 地元のじっちゃん言っていた」、2位は「り」で「理解しよう いなくなっちゃう 危険性」、3位は「ち」で「地域の宝 みんなで 守ろう」である。みなさんもお気に入りのかるたの札をみつけてほしい。楽しくイタセンバラについて学んでほしい。そして、地域の宝を一緒に守りたい。

〈参加者の応援メッセージ〉

- ・カルタの説明からなんか楽しい。いつのまにか“イタセンバラ”に親近感がわいてきました。
- ・かるたがとても楽しそう伝えたいことがつまっていると感じていいなって思いました。
- ・「楽しさ」を通じて地域のことを学べる仕掛け。
- ・小学校で学年でのカルタ大会を開いたというのもすごかった。教訓がかかるただと伝わりやすいと思う。
- ・動画がすばらしい！カルタの内容がいい！！イタセンバラ好き。



【愛知県立武豊高校】湿地を学ぶ冒険

学校周辺の湿地とそこに生育する希少な生き物の保全についての調査を発表する。武豊高校は知多半島のなかほどにあり、学校周辺の吉町田湿地は愛知県の天然記念物に指定されている。そして、学校から2キロほど離れた場所には常滑市の大谷湿地がある。大谷湿地を調査した。



「ラムサール条約」は、湿地の保護に関する国際条約である。水鳥を食物連鎖の頂点とする湿地の生態系を守る目的で制定された。日本では 50 カ所の湿地が登録されている。ラムサール条約の定義では現在、日本には 821 平方キロメートルの湿地があるが、明治・大正時代と比べて名古屋市 4 つ分という広い湿地が失われた。名古屋の藤前干潟は、ゴミの埋め立て処分場をつくる計画のために消滅の危機があったが、市民の反対運動などで阻止された。

学校周辺の湿地はラムサール条約で保護されていない、湧水湿地というタイプの湿地である。湧水湿地には泥炭がほとんどなく、土砂がむき出しになっている。そして面積規模が小さく、教室より小さなものもある。植物遺体の分解が早く泥炭ができにくい暖かい地域に分布している。そして、里山のような、ひとの生活とつながりが深いところに成立している。

湧水湿地には、モウセンゴケやシラタマホシクサといった植物やハッチョウトンボが生息している。武豊町の吉町田湿地では、しばらく確認されおらず絶滅してしまったようだ。しかし、吉町田湿地には、食虫植物のシロバナナガバノイモチソウなど、貴重な生物が存在している。吉町田湿地も農地開発で無くなってしまおう危機があった。危機を知った武豊町は湿地を含む 11,000 平方メートルを保護地に指定し、周囲をフェンスで囲い、貴重な植物群落を保護した。今でも木道を整備したり、周りから進入する植物を取り除いたり、水道水で乾燥しないようにするなど、いろいろな保全活動が行われている。メンバーにも湿地を守る活動に参加している。

湿原とそこに生きる生物は貴重であり、守るべきものである。そのためにはまず、湧水が涸れないように環境を整えることが大事である。周囲に木が茂っていれば、根から水を吸って土地の乾燥が進んでしまう。また、湿地の植物に光が当たらなくなると、光合成がしにくくなるため周辺の木の伐採が必要になる。湧水湿地の保全には手を加えないでそっとしておくのではなく里山を守るように手を加えることが必要だ。いつまでも貴重な湿原を残していきたい。

〈参加者の応援メッセージ〉

・湿地について知らなかったのですが、発表のクイズで知ることができました。湿地は私自身が考えていたよりも多いことがわかりました。また実際に見てみたいです。これからもがんばってください！！

・クイズの選択肢が絶妙で（どれが答えかすぐわからない）とても楽しめました！

・大切な自然である湿地がなくなっていることを初めて知りました。湿地の写真を見て湿地のまわりは豊かで美しいなあと思いました。

・湿地について常識とは違うことを知ることができて良かった。続けて保護活動に頑張ってもらいたいです。

・続きのクイズはやくやりたい！って思えました。うまい！



【愛知県立知立東高校】すごろくカメマス

「すごろくカメマス」を紹介する。知立東高校自然科学部は、猿渡川で多数生息しているカメの生態の調査活動を行っている。調査した結果、猿渡川でのカメ捕獲数の割合は、ミシシippアカミガメ（ミドリガメ）という外来種が75%を占め、残りの25%は、スッポン、イシガメ、クサガメが捕獲された。そこで、「ミドリガメはなぜこんなにも多いのか？」について疑問を持ち、活動でききる時期の違いではないのかと考えたことから、季節ごとの捕獲数の比較を行うことにした。まず、季節ごとの捕獲数について、結果として、ミドリガメは3月から9月の間も捕獲できたが、スッポンは夏だけ活発であることがわかった。



また、食べるものの差も要因ではないかと考え、カメのフンを調査した。その結果、イシガメとクサガメは草、スッポンは動物、ミドリガメは草も動物も食べ、ごみまでも食べることがわかった。カメが食べている動植物は何かという新たな疑問を抱き、カメが食べている動植物を特定しようと調査した。調査の結果、ミドリガメの雑食性はイシガメ、スッポンより強いこと、摂食量もミドリガメが一番大きいことがわかった。

調査結果を地域の人たちに知ってほしいと考え、「すごろくカメマス」というゲームを作成した。サイコロを投げてカメを進める。カメの数はコインであらわし、数字の分だけカメを増やすことができる。カメの種類ごとに増える量は異なる。また、すごろくを進める中でカメに関わる自然現象及び人間活動を表現したイベントカードがある。一例として、人間の活動に関するイベントとして「ペットとして飼われていたカメが捨てられる」というカードがある。カメが無事に冬を越せるかどうか、カメの冬眠を表現した冬眠カードもあり、「冬眠に成功」だとカメを減らすことなくゲームを進行できるが、「冬眠に失敗」では全員または特定の種類のカメが死亡する。

このすごろくを通して、外来種のミドリガメが地域の川に非常に多いこと、また外来種は雑食性が強いことを地域の人たちに知ってもらいたい。

〈参加者の応援メッセージ〉

・ミドリガメが増殖している理由について導入から一緒に疑問に思い、さらに知っていききたいと興味をそそられました。

・きちんとした裏付けのもとに考えられたゲームだと改めて実感しました。すごい！

・ミドリガメにどう対策すればいいのか？もやもやします。

・ミドリガメが増えていく理由をしっかりと調査してスゴロクにまとめてスゴイなーと思いました。外来種の問題のきっかけになりますね。

・調査結果をもとにすごろくを作成していて、すごいと思いました。フンをどのように分析したのか、知りたかったです。



【愛知県立松平高校】竹遊びゲーム「たけすご！・カードゲーム」

高校がある松平地区の竹林を活用して竹炭製品の開発・販売を行ってきた。しかし、この地域の竹林や自然環境の抱える問題について、深く考えたことがなかった。そこで、地域の竹林の問題について学び直し、里山のあり方を考え、それを踏まえて改めて竹を活用する意味を伝えることにより、竹でつくられた製品等に親しみや興味を持つきっかけとなるプログラムを作成し



た。そして、松平の竹林や自然を地域の人たちと共に、より良いものにしていきたいと考えている。プログラム完成までの活動を簡単に紹介する。

初回の活動は、金城学院大学で専門家に日本人と森とのかかわりについて講義していただき、森林、里山、荒地など日本が抱えるさまざまな環境問題について知った。講義のあとは、キャンパス内にある竹林で竹の種類や竹林の管理について教わり、実際に孟宗竹を伐採した。初めての経験だったが、楽しく作業を進めることができた。その後、流しそうめんを楽しんだ。キャンパス内にある里山の散策をし、日光が適度にあたるように、森林を管理することの大切さを学んだ。

次に、松平高校周辺の竹林や里山の状況を確認し、竹がはびこっている様子であるとわかった。そこで、幼児、小学校低学年向けに、『楽しみながら、学べるプログラム』を目標にプログラムを作成した。さまざまなアイデアがでたが、提案に対して、それだともうこういう場合はどうなるのか、わかりにくいのではないかなど議論し、また、試作中のプログラムを実際に1年生のメンバーに体験してもらおう等し、人にわかりやすく伝えるプログラムを完成させた。是非プログラムのアトラクションを楽しんでいただきたい。

〈参加者の応援メッセージ〉

- ・活動中の様子などがとても分かりやすかった。発表が上手だった。調査対象を使って遊ぶのに対象に親しみを持つのにいいと思った。
- ・活動も楽しくやっているようで良かった。楽しさは感染するのでどんどん楽しさを広げていってください！
- ・作業の楽しさがプレゼンから伝わってきました。身近な自然が変化していくことへの気づきができてよかったと思います。
- ・竹でもいろいろおもちゃが作れてあなどれないと思った。
- ・竹林の環境問題があるのを知らなかったのでもっと多くの人に知ってほしいと思いました。



●プログラム体験

前半に2つの高校、後半に3つの高校のプログラム体験を同時に行い、プログラムの後にメッセージを書き、高校生に渡した（以下一部抜粋）。

〈前半 15分〉

【愛知県立安城南高校へのメッセージ】

- ・クイズの形が冗談を混ぜたもので楽しみながら川のことや川の生物を知ることができました。自分の高校で調べている猿渡川とは違う川の環境などで生息している生物が異なっていて聞いていておもしろかった。
- ・たのしいクイズと解説のバランスがよかったです。安城の川について学ぶことができました。その土地だけの生物についても知りたいです。
- ・生きものについて楽しく学ぶことができました。メンバーの個性もよく出ているなと感じました。今回の川の調査をふまえて今後どのような調査につなげて後輩さんに引きついでいくのか楽しみです。

【愛知県立武豊高校へのメッセージ】

- ・湿地について知らなかったのですが、発表のクイズで知ることができました。湿地は私自身が考えていたよりも多いことがわかりました。また実際に見てみたいです。これからもがんばってください！！
- ・湿地のことがよくわかる「知ってほしい」という気持ちが伝わってきました！
- ・発表おつかれさまでした。私は豊田市の職員で、武豊高校さんが作成されたスライド内にありました八並湿地を管理しています。湿地のことやそこで暮らす生物のことをたくさん学ばれていてとても嬉しくなりました。是非機会があれば矢並湿地にもお越しください。

〈後半 20分〉

【愛知県立木曾川高校へのメッセージ】

- ・とても楽しいかるたをありがとうございました。同じ高校生として応援しています。
- ・「イタセンパラ」の調べたことをカルタにして遊びながら伝えたのがとてもいいなあ思いました。それに加えて、カルタの絵がとても素敵で、短く工夫した言葉がキャッチーで、最後にマグネットをもらったことで、家に帰ってからも思い出しますね。
- ・カードの絵がとてもキレイでまた文面もよく考えられていて感心しました。バレー部の2人の笑顔もステキでした。読み手、進行がスムーズで楽しめました。

【愛知県立知立東高校へのメッセージ】

- ・イシガメが好きなのでイシガメでチャレンジしましたが完敗でした。やはりミドリガメは強いですね。自然界の生存競争が体験できてわかりやすかったです。
- ・イベントカードや冬カードで小ガメが増えたり減ったりするのは、さいころを転がして小ガメを増やすよりドキドキして楽しかったです。すごろくの周回数によって季節を変えるというのも私だったら思いつかないと思うのですがいいと思いました。ただ、ミシシッピアカミミガメは子ガメの数がかも多すぎてカメを選んだ時点で勝者がほぼ決まってしまうことに後で気づいて、アカガメは強いと思いました。

・スゴロクを通してカメの生態系を知れたのは良かったです。スゴロク楽しかったです。すごく凝っているなと感心しました。ミシシippアカミガメやスッポンのことは知っていましたが、イシガメのことはあまり知らなかったので今度調べてみたいなと思いました。

【愛知県立松平高校へのメッセージ】

・プログラムの発表おつかれさまでした。そしてプログラムを体験させていただき、ありがとうございました。地域のことをよく学びゲームで楽しく分かりやすく生かされていて、とても関心いたしました。私は豊田市役所で環境学習の担当をしています。今回作っていただいた松平高校さんのプログラムを参考に業務に活かしていければと思います。

・スゴロクもジャンケンもとても子ども向け要素が詰まっていたのしかったです。イラストもかわいく印象に残ります。ぜひ利用してみたい、こどもに提供してみたいと思いました。

・プログラムをしている人がみんな笑顔になっていて良かった。地域でどんどん広げて下さい。活躍期待しています！

●ふりかえりワークショップ

「今後やってみたいこと、つながってやってみたいこと、SDG s を意識しながら・・・。」をテーマに、高校混合の5チームに分かれてワークショップを行った。プログラム紹介で他校の取組を知り、プログラム体験で体感した他校のプログラムと自分の取組を照らし合わせながら、新たな発想でこんなことをしてみたい、つながったらこんなことができるといった意見が交わされました。最後に SDGs の 17 目標に紐づけました。

A グループ

- ・クイズを通して認知度をもっと詳しく調べてみたい。
- ・他の高校と一緒に川の調査をする・他校との連携 — 湿地に 行きたい！、竹林に行きたい。
- ・竹イカダで川くだり
- ・クイズだけでなく、湿地でスゴロク！
- ・川でもすごろくのようなゲームをつくってみたい。
- ・湿地の生物調査！！ — 海の生物調査 — 海に行きたいわたし たちの行った川にカメがいなかった理由を知りたい。
- ・木曽川付近の植物調査
- ・同じ高校でカルタをやりたい！学校での認知度を高めたい！
- ・老人ホームなどでゲームをやりたい。社会人に向けてゲームをやりたい。
- ・自分の学校で発表をして生徒に少しでも知ってもらおう！



B グループ

- ・クイズ — 生活への転用
- ・絶滅危惧・天然記念物 知ってほしい → 守るぞ！繁殖・放流・定着
→拡散 →イベントにつながる？
- ・自然豊か — 地域の宝
- 川 — 遊び場、他の生物
 湿地 — 知ってほしい、大切にしてほしい、水の生物
- ・ミドリガメ強い — イシガメ、スッポンキツイ — ミドリガメ駆除しよう
- ・川への影響考慮



C グループ

- ・愛知の他の市や地域にもイタセンパラを知ってほしい。
- ・他の高校が調査していることをもっと知りたい。
- ・知識を付けてもっと湿地について知ってもらおう。
- ・川にいる生物の違いや川自体の違いを意見交換したい。
- ・それぞれの川の違いとつながりを知りたい。
- ・各校が製作するにあたって工夫したことなど聞いて自分たちのものをよりよくしたい。
- ・もっといろんな川へ行って生態の調査をしたいです。



D グループ

- ・湿地ができる原因を知りたい。
- ・北海道と地域の湿地の違いを知りたい。
- ・北海道の湿地に行きたい。
- ・問題の解決策まで考えていきたい。
- ・自分たちも伝えて他の学校から伝えてもらう。
- ・自分たちが考えたものを愛知だけでなく日本中に伝えていきたい。
- ・絶滅危惧種などがもし実際に絶滅した場合人々はどう感じるか。
- ・タガメとゲンゴロウの生態と生息地の今と昔の違い、その原因。
- ・共通点を考えてみんなでやりたい。(例、地球温暖化)



E グループ

- ・共同ボランティア・小さな子へ高校生で共同してやるもの
カメ捕獲など
- 外来生物を釣って食べる (ブラックバス)
- ・小～高校までで合同授業→山や川など



生き物を見る

自然学習など

・高校生が所有する池や土地をつくる → 飼う・育てる

空地、空き家、放置された山？、ビルの屋上

・イタセンパラかるた、すごろくカメマス → 商品化！！ → 小学校、施設の教材に置く

・もっと交流をしたい！！今日のように！！他の学校も！！

・コラボ！共同作成

・イタセンパラの何かできないかな。隠れる場所を『竹』で作る！

・愛知県と環境省が頑張っ欲しいなあ・・・。

●ゲストからメッセージ

辻 英之氏（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター）

長野県の人口 1,700 人くらいの泰阜村、川でつながった上流から来た。泰阜村には高校がないため、あまり高校生と触れ合うことがなく、とても新鮮だった。地域のことをきちんと調べていて、そのデータを証拠にプログラムがつくられていて説得力があると思った。地域の環境や歴史、風土、人の営みから離れたプログラムはきっと支持されない。みなさん自分の足元をしっかりと見ているプログラムだったので感動した。そして、獲得した知識を自分のものだけにしないで、世の為、人の為、地域の為、地球の為に使って初めて意味がある。自分のちょっとした言葉が周りの高校生にすごい影響を与えるかもしれない。自分の言葉を侮ってはいけない。誰かのつぶやいた言葉にハッとさせられることがあるので、調べたこと、学びをオープンにしていくことを大事にし、自分の為だけに使わないでほしい。今日は色々な世代の人と交流したので、世代を超えて付き合っていてほしい。



茶谷 淳一氏（名古屋短期大学現代教養学科）

高校生のみなさんがここまでやるのかとびっくりした。最後の時間にみなさんはやりたいことを考えた。ボードゲームはすごく考えられていると思った。私は辻さんと一緒に泰阜村に学生を連れて行って合宿をし、泰阜村の村づくりをしている。それで学生達が大きく変わる。初めはコンビニがない、信号がない、虫がたくさんいる、絶対嫌だと言っていた学生も最後は本当にこの村に来て良かったと言う。そして、村役場で村長を始めとして村の人に村の魅力を活かした村づくりを提言する。そうすると村の人も変わる。村の人にとっては当たり前で自信がない地域でも、若い人達にこういうよいものがある、こういうよいものを守っていきましょうと言ってもらおうと行政が元気づく。みなさんのそのような新鮮な感覚を行政は持っていない。ぜひその新鮮な感覚を大人に伝えてほしい。そして、もっと地域の人たちと交流して、地域の人たちが自信を持てるようにしてほしい。



野村 佳世氏（岐阜市立境川中学校教諭/社会人ユース ESD レポーター）

みなさんはとても自分の地域を大切に、生きものを大切にしている愛がある。情熱がかたちになったということは本当にすごいことだと思った。これがゴールではなく、ここをスタートとしていろいろな地域に発信してほしい。また、企業や社会をつなげるパイプ役として活躍してほしい。

内藤 圭祐氏（名古屋国際中学校・高等学校 教諭/社会人ユース ESD レポーター）

それぞれの発表を2つの視点で見た。安城南高校は川を2つ比べて比較していた。知立東高校はミドリガメの数の多さから何で多いのかという疑問を持って仮説を立てて検証している。これは大学の研究のステップにあたり、そういう要素があると思って見ていた。木曽川高校の「イタセンパラかるた」はそこに関わることを始点に他と差別化していた。武豊高校は、クイズの中で日本の何倍、名古屋の何倍という身近なところで例を出してイメージしやすいようにしていた。松平高校はすごろくだが、本当はもつと竹に触らせたかったと思った。途中で竹の風車を回すミッションなどが入っていて、すごろくをやりながらもう一つの目的を中に入れるやり方。この三つに共通するのは、企業のものをつくる商品化する時のステップなのだろうと思った。この研究とものをつくる商品をつくるという2つのステップが両方入っている取組みが全体として素晴らしいと思って見ていた。一番大事なポイントだと思うのはワークショップである。いろいろな意見がでて、高校生同士それぞれがやってきたことが交錯して、新しくこうしたいという意見がでてきたことがすごく大事である。後は出てきた意見の実現の可能性を探してほしい。高校生は自分達が思っている以上にいろいろなことができる。例えば、SNSでグループをつくる、高校生団体を立ち上げるなど様々なことができる。そして、高校生個人としても将来進路選択の時に自分が働くイメージを持つ時に環境に優しい企業の方がいいかもしれない。そういうかたちでいろいろな社会の選択をしていくことにつながっていくのではないかと思った。

●アドバイザー 大鹿 聖公氏（愛知教育大学教授）

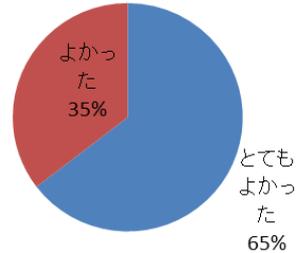
自分たちが地道にやっていることが実はすごいことなのだと気づくためには、他のものを見ないといけない、他の人とつながらないといけない。今日のように他との違いを見られると、もっとこういうことが出来たのではないかと新しい可能性が見えてくる。1つでやっているプログラムだといえるものができる。でも、プログラムとプログラムをつなぐと1たす1が2ではなく、3にも4にも5にも10にもなることを今日みなさんが少しでも理解してくれたらいいと思う。普段何気にあるものにいろいろな人たちは気づいていないので、みなさんがやっていることはそういうことをいろいろな人たちに知ってもらうツールになるし、すごく役に立つ。つくって満足するのではなく、いろいろな人たちに伝えてほしい。

ものをつくるのが大事なのではなく、一番の成果は素敵なものが出来たことではなく、みなさん自身が成長できたことである。こういうものを通して人は変われることを学んでもらいたい。みなさんが変われるなら他の人たちも変わる。みなさんが成長した分、周りの人たちも成長できるようにいろいろな人とつながってほしい。私自身もこの1年を通して成長できた。これからも続けてほしい。

<参加者アンケート> 回答者 48 名 / 参加者 75 名

■ 環境学習プログラム交流会に参加されていたかがでしたか。

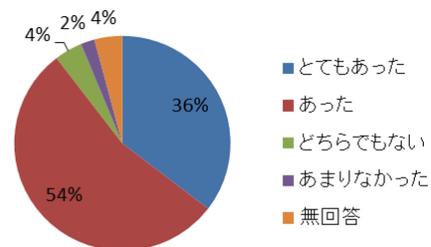
とてもよかった	31 名
よかった	17 名
ふつう	0 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名
無回答	0 名



- ・みんなで意見を交流できてよかった。
- ・高校生が小中学生や一般市民向けに分かりやすく、楽しく環境学習を学べるプログラムを教えてくれていると知り、感動しました。
- ・高校生の感性で調べ、それを形にしているので私たち大人の想像を超えていた。
- ・高校どうしの交流ができてよかった。
- ・楽しかった。自分の高校生の時を思い出し、今の高校生のレベルの高さに驚いた。
- ・たくさんの高校生と交流ができてよかったです。
- ・他校の人の意見を聞いて仲良くなれたから。
- ・発表の方法や内容など勉強になることが多かったから。
- ・高校生が一生懸命やっている姿がよかった。
- ・未来を担う若い高校生を主役にこういった交流会が行われることはとても有意義だと思いました。
- ・それぞれ高校生が真剣に考えているのがよかった。
- ・高校生が頑張っている姿を見て刺激を受けました。
- ・違う視点から見られた。
- ・生徒らが自発的に進行させている姿が見られた。話すこと、聞くことが年度の初めより大きく成長していた。
- ・無知な状態からでしたが、愛知県内の様々な環境問題を知れました。

■ 環境学習プログラム交流会での気づき、得るものはありましたか。

とてもあった	17 名
あった	26 名
どちらでもない	2 名
あまりなかった	1 名
なかった	0 名
無回答	2 名



- ・生徒にとって、とてもよい機会でした。
- ・高校生とふだん接することがなく、こんなに真剣に考え、取り組んでいるのか。また、作ったプログラムやプレゼンなども自由な発想で面白かった
- ・各校のプログラム、テーマで知らないこと、気付かされるようなことがたくさんありました。
- ・私たちはつい 2030 年までの目標達成のための行動を考えてしまいますが、今日参加させて頂いて、その先、その先を生きる世代へ伝えていくことが実はもっと大切なんだなあと知ることができました。参加できてよかったと思います。
- ・自分たちにも取り入れることができる内容もあった。ぜひ、レンタルしたいと感じた。
- ・環境問題の重さについてもっと考える必要があると思いました。
- ・普段、高校生と交流する機会がそもそもないため、新鮮で貴重な体験でした。高校ごとに個性があった。
- ・高校生の力は大きいと思う。また、高校ではいろいろな活動ができる。

- ・自分たちの学んだことや他校とコラボして多くの人に伝えるべきだと思いました。
- ・これからのために他の学校からアドバイスや意見をもらった。
- ・高校ごとに視点も違い、協力することでもっと良いものになると思った。
- ・他の地域でも似たようなものがある、それぞれに特徴があったから。
- ・調べた川のの違いで生息している生物が全然違って驚きました。
- ・自分がやっていた環境に対する意識とは別の環境に対することを学びました。
- ・もう少し時間がほしいかな。少しバタバタでした。

〈成果〉

5校の高校生22名が集結し、プログラム紹介、プログラム体験、高校混合チームでのワークショップ、リレートークを行い、お互いを知り合うステップが進み、会場の場が温まるのと同時に、高校生間の関係性が近くなった。ワークショップにおいては、「他校とつながってのプログラムの実施」「他校のプログラムに参加したい」「小中学校、高校の合同合宿でプログラムを実施する」「共同でボランティア活動をする」など、つながることにより影響力のあるプログラムになることを十分理解した上での意見が出されていた。また、各プログラム紹介の後に参加者の応援メッセージ、プログラムを体験したあとの参加者のメッセージを届ける時間を設け、高校生への今後のエールを送った。

愛知県は尾張地区と三河地区の文化や風土が違っており連携して何かをすることが少ない、と言われていたが、高校生の活動はそういった枠組みではなく、同じ世代が興味を持ったことをもっと知りたい、という高校生の感覚でのつながりをつくっていた。高校生の柔軟な考え方、感受性が他校のプログラムのもつ意味と価値を受け止め、自分たちの活動に、さらには連携して活動することの価値に気づいた。

高校生同志、高校間、高校生と大学生、高校生と大人がつながり、同じ目線で愛知の環境を学び合う場となった。こういった場の重要性と必要性を浮き彫りにする交流となった。

課題はどう継続させ、成果を積み重ね、持続可能な地域づくりを担う次世代の基盤としていくかである。アンケートにあったように、この企画・運営も高校生に任せる方法もある。今後検討を要する。

カ 評価会議の実施

(ア) 構成メンバー

浅井 豊司氏（㈱フルハシ環境総合研究所 代表取締役社長）
葛原 祐季氏（株式会社キャッチネットワーク ディレクター）
白上 昌子氏（NPO 法人アスクネット 代表理事）
関 利春氏（愛知県環境部環境活動推進課）
長谷川 明子氏（1 級ビオトープ計画管理士）

(イ) 会議内容

日時：平成 30 年 3 月 10 日（土）17:30～20:30

場所：ウインクあいち 1202

参加者：12 名（評価会議メンバー5 名 アドバイザー1 名 地方事務所 1 名 EPO 中部 2 名 オブザーバー-GEOC1 名、愛知県職員 2 名）

<評価会議メンバー>

浅井 豊司氏（㈱フルハシ環境総合研究所 代表取締役社長）
葛原 祐季氏（株式会社キャッチネットワーク ディレクター）
白上 昌子氏（NPO 法人アスクネット 代表理事）
関 利春氏（愛知県環境部環境活動推進課）
長谷川 明子氏（1 級ビオトープ計画管理士）

<アドバイザー>

大鹿 聖公氏（愛知県教育大学教授）

<主な内容>

本事業における各高校での取組、高校生の変容、高校と地域の関係づくり、交流会での高校生間のつながりづくりを踏まえて、高校生の環境・ESD ネットワーク形成の必要性とその効果について意見交換をした。

また、今年度事業の成果を次にどう生かすのか、どう展開していくのかについて意見、提案を出し合った。5 校の環境学習プログラムは完成し、交流会でのプログラム体験でも好評を得るクオリティの高いツールではあるが、今後どう生かしていくか、環境学習プログラムをツールに人をつなげてく、ネットワークを形成する作業をどう起こしていくかについて協議をした。また、成果を把握するために、ワークショップで高校生が考えた「今後やってみたいこと」を再度見直し、高校生の思いを再確認した。

地域との連携において、すでに小中学校の出前授業やユネスコスクール交流会での体験など行っているものの、各高校の自治体や NPO など環境活動団体と連携をして、高校生が地域で活躍できる仕組みづくりの必要性も話された。安城市と豊田市の NPO とはすでに連携をし、各高校がイベントに参加することとなっている。このつながりをいかに継続させていくか、他地域においてはつながりをつくり、高校生による地域課題をテーマにし

た環境学習プログラムの実践場所をつくっていくかが課題であることを共有した。

もう 1 点、高校生の変容や成長を評価し、高校生にフィードバックすることの重要性が話された。自信、自己肯定につながるため、生徒の変容を把握する共通の仕組みの検討が必須であることを共有した。

他校のプログラムと自分のプログラムを重ねて、共通のプログラムやコラボによる多様なプログラムに変容する可能性についても話された。高校生が、自分の地域だけではなく、他校との関係性の中で他地域を知り、気づきや学びを行動に結びつけていくようなネットワーク形成が望まれる。高校生がやってみたいことが実現できるようサポート体制が必要である。

<出された意見> 一部抜粋

● 成果と課題について

・高校生が年間通じて今回の課題に取り組めたことに意義が大変深かった。高校生と大人がコミュニケーションをとることがなかなかない。そういう場づくりという意味では大変意味深かった。しかし、高校生が自身の成長に気付いていない感じがあった。今回の経験は普段の学校生活とか普段の生活にかなり影響する。これからの将来に影響する。その辺りの気付きを演出することができたのではないかな。もう一つの課題は評価システムである。こういった活動の経験が受験や就職につながってくる。何らかの評価ができるとうい。

・思った以上のクオリティがあった。このプログラムをどう普及していくのか、紙媒体や動画を上手く活用してどう広げていくのか。クオリティが高いために広がらないのもったいない。ニーズとマッチングさせるのは難しい。今後の課題である。

・スタート時何も知らない高校生が、「知ること」で変わっていった。その姿に未来を感じた。知る機会が重要であり、さらに、もっと広める方法を考えないといけない。

・高校生はまだ閉鎖的な環境で生きているため、自分が住んでいない他校の環境課題について 5 校みんなで知りあえたことで視野が広がる良い経験になった。

・高校生の言葉で説明を受け、こういう思いがあって、このプログラムを作ったという発見がまたあった。思い思いに熱い思いの入っているプログラムができあがった。今年 1 年で終わらないように引き続きつながりをつけて行くことの大事さを強く感じた。

・最初会った時にやる気のなかった生徒もいたが、今日久しぶりに会ったらとみんなやる気になっていて全国で発表したい、高校生でため池を作って生きものを生息させる、などの発言や夢がでていた。すごい。ステキな人を作る事業だった。プログラム作成においても生徒は成長したが、今日のワークショップでもかなり生徒たちは成長した。

・プロジェクト型のテーマ型の学習を取り入れることを文科省が進めている。しかし、全生徒にプロジェクト型の学習をすることは難しい。教員自体も、これまでの知識伝達型の授業から体験活動に行こうしていくことに課題がある。プロジェクト型の学習は高校の現場ではニーズが低い。高校の今の教育スキームでは実施が非常に難しい。多様な学校に多様なチャンスを与えているのがこの事業である。成長する、知る、体験するチャンスとなり、多様なアプローチをしながら高校生の成長の場面を作っていくという役割があった。

・高校生同士がお互い体験できたことがすごくよかった。高校生の感想をリレー式で発表したこともよかった。高校生が話しやすくなり、発表した生徒同士も友達になっていた。他の高校と交流したいと常々言っていたことがかかってよかった。プレゼンテーションを聞いて思ったのは、笑いが入っていること。笑いがあると楽しみにも元気にも薬にもなる。ワークショップで高校をミックスしたのがよかった。お互いに何をしているのか一人ずつ話したことがよかった。

・高校生には次を考えてほしい。伝えたあとどうするのか、という気づきのフォローが必要である。アクションにつなげてほし

い、アクションにつながると効果が上がり、SDGs に向けてのアクションのために作れたと落とし込んでいくことができる。

・評価については、最初に評価といふか変化の項目を決め、生徒の一つ一つの変化を自分で確認する作業がよい。自身の学びの質が高まったことを認識し、高校生の自信につながる。

●成果の活かし方について

[知立東高校が地元の中学校で出前授業]

身近な高校生が教えたことで、中学生への授業に向き合い方が違って良かった。中学生にとっての身近さと、高校生の説明に説得力を感じていた。コミュニケーションが活発になり、授業の雰囲気もよかった。中学生は「聞かないといけな」「あのお兄さん達頑張っているね」といった雰囲気があった。

授業の最後に部長が「ペットを捨てるな、外来種は悪くない。ペットを捨てる人間が悪い」と熱く語った。外来種の話が先生がすると「外来種は人間生活に悪影響だからだめです」と言う。高校生は「外来種も生き物で生きている。それを勝手に捨てる人間が悪い」と話した。中学生にとってアンケートに「ペットを捨てないように」とあった。生徒の思いがダイレクトに伝わっている。校長先生も「高校生が中学生に教えることを考えていなかったが、ある意味ある可能性を感じると話していた。日程が平日に限られるため調整が難しいという課題はある。

[今年の成果をどうつなげ、社会化していくか]

・今年 は 1 年目、高校生が繋がりたいと思っていることや、つながることで新たな可能性があることを把握した。まだその段階である。そして、高校生が SDGs に関心を持ち、今日のワークショップで取り入れた。この高校生のポテンシャルを可視化し、社会化するスキームが必要である。

・プログラムを校に地域ネットワークをつくる。高校を拠点にするのは難しいのではないかな。

・プログラムでよかったことはテーマが地域の自然環境だったことである。総合的な学習の時間が根付いている小学校では毎年 4 年生 5 年生が同じテーマで学習しており、確実に 5 年生は 4 年生に伝えている。今回の取組みも高校生が中学生に教える時に学び方が全く違うと同じように、高 3 の先輩が後輩達へ伝えていくという校内での仕掛け方を校内の先生がきちんと理解してつないでいくといった仕掛けが学校内でできるとよい。ただ単に教材だけ渡すのではなく、先輩から後輩達に伝えていく仕組みをどのようにつくり上げていくか、その地域の自然環境を守るのは自分達だという伝統をどうつくるかといった話である。

・高校生がプロジェクトベースで人が関わって学んでいる。大人がバックアップしてやっている現状を見て、今地域活動をする人がどんどん増えているという実感がある。そういう人達を活用して、地域活動ベースでの活動にできないか。世代間を超えるといったメリットがある。地域活動を募集して、そこに予算をつけて学校を通じて応募してもらおう部活動、もしくは土日の活動的なプロジェクトベースでできるというアイデアはある。

・地域にいくつもの行事があり、子ども達が出向いて行くことは往々にしてある。それを仕組み化する、もしくは実践を通して実践が仕組みになっていくことはできる。例えば、安城南高校であればエコネットあんじょうが実施する年 2 回の生き物観察会に必ず安城南高校の自然科学部の高校生がお手伝いする、自分達が作った教材を事前学習として地域の人や子ども達にレクチャーをする。来年も実施するから後輩達に伝えていかないとけないというミッションが生まれる。自然科学部の 1 つの伝統行事のように仕組みになる。場が無ければ教える機会、学ぶ機会もないため、連携の拠点とそういう仕組みをつくる。それが、例えば木曽川高校ではどこが拠点になるだろうか、松平高校はこの拠点か、と連携先を見つける。地域の学習機関をつなげながら学校と地域の持つ理想図をどのようにつなげていくかという仕掛けをしていくと、地域に高校生だけではなく他の年齢層にも広まっていく。

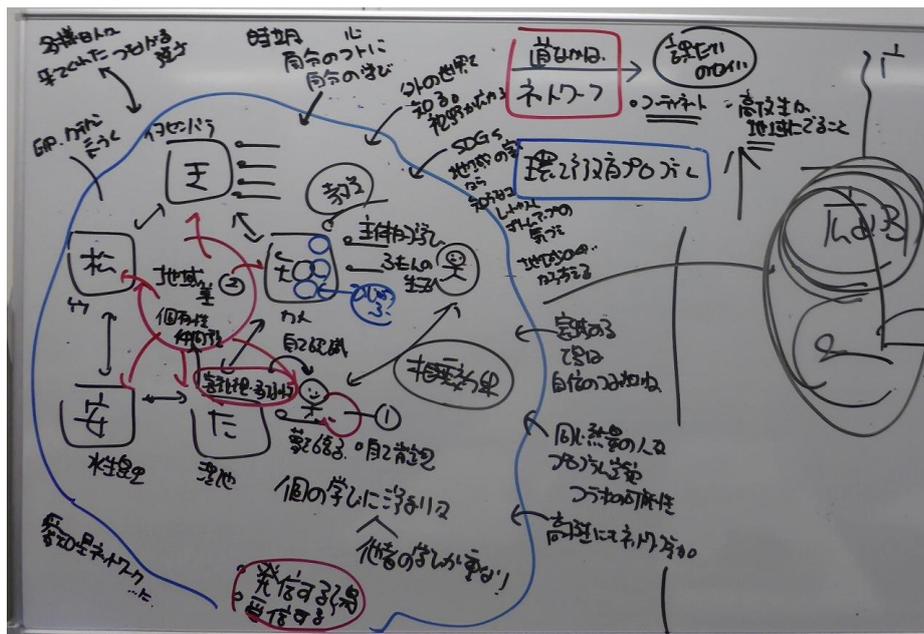
・できない要因は簡単に出せるが、学校でなければいけないとか地域でなければいけないとはなく、どこでもやれるようになったらよい。やれる時にやれたらいい。ただし絶やさないようにしたい。そういう発想にしないと地域活動は地域によって異なるため、同じようにできることでもない。知立なら知立、安城なら安城で今ならばここでできる、今の高校生ならやれるが次にできなければ地域に任そうと考えられる地域になってほしい。それがこのネットワークであり仕組みである。

・高校の中でどう継承するか、と地域の外とどう継承するかについては、学校の中で伝える方法と地域に伝える方法は違っているし、地域によっても違う。

・コーディネーター的な役割を果たす人、機能がないとネットワークの維持はできない。高校だけでやることは難しいので、ネ

ネットワークをつくるコーディネート機能の部分が必要である。

- ・行政の政策は切れるからつながる組織がないということがあるからそろそろ考えていかななくてはいけない。
- ・地域のネットワーク形成やパートナーシップは成功したか、どこまで成功したのかと問われたら、愛知県と環境省が行政間のパートナーシップを組めたことでここまで来ている。こういうパートナーシップがもっと行政間で出来るといいと思う。可能性がある。
- ・行政間の連携がなければ、SDGsの達成は無理である。そのためのモデル事業でもある。
- ・EPOという事業の形態はいろいろなフレキシブルに対応できる緩衝材のようである。土台づくりをした愛知県とコラボレーションでき、次の要素やスキームが見えるようになった。



<アドバイザーのコメント>

愛知県の事業に参加した5校の高校生が開発した教育プログラム。彼らは自分たちの活動を基に、自分たちの地域や仲間を理解し、環境問題を発信していった。その5校の高校生を混じり合わせることで、どのような効果が見られるか、ネットワークを構成することでどのような未来が見えてくるか、そのような期待で開催したフォーラム。その中で、お互いの高校生の素晴らしさや、地域の環境問題の実態、そして自身の成長の自己評価を見いだしていた。また、同じ自然環境を調査しながらも、対象とする生物や課題が異なることで、作られるプログラムや発信の方法が異なることを認識できた。そんな彼らが交流することで伝えたい思いが1つではなく、2つ、3つと増えていく。また内容も1たす1が2ではなく、3や4として充実していく。そんな可能性が高校生に見いだすことができた。

SDGsが目指す2030年、そんな時代を中心として牽引していくことになる高校生だからこそ、彼らが伝えるからこそ、子どもたちを始め、あらゆる世代に伝わるのだと思う。成長した彼らだからこそできることではないだろうか。そんな彼らをつなぎ、ネットワークを発展させることで、よりよい社会を見いだす可能性が作られる。そんな期待が膨らんだ事業であったと思う。

(2) 関係主体との連携等

①全国事務局

- ・毎月月次報告を提出した。
- ・EPO 連絡会にて、本業務の進捗状況の報告と成果報告会の企画、本業務の成果のとりまとめ方法等について意見交換をした。

・第 1 回全国 EPO 連絡会議

日時：平成 29 年 6 月 7 日（水） 10:00～15:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

・第 2 回全国 EPO 連絡会

日時：平成 29 年 10 月 12 日（木） 13:00～17:00

場所：ウインクあいち

・第 3 回 EPO 連絡会

日時：平成 30 年 1 月 16 日（火） 10:00～15:15

場所：地球環境パートナーシッププラザ

- ・「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、全国事務局と WEB 会議を行い、効率的・効果的な情報共有・相互参照を行った。

②EPO 中部運営会議委員

業務実施期間において、適宜意見、アドバイスを得た。

③その他

地方 EPO とは支援計画や内容、拠点の変容等について情報共有を図った。ESD 活動支援センターとは、事業の報告、フォーラムや交流会への広報、参加依頼を行った。

(3) アドバイザリー会議への協力

・第 1 回アドバイザリー会議

日時：平成 29 年 6 月 8 日（木） 10:00～12:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：1 名

・第 2 回アドバイザリー会議

日時：平成 29 年 10 月 30 日（月） 13:00～15:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：1 名

・第 3 回アドバイザー会議

日時：平成 30 年 2 月 27 日（火）16:30～17:30

場所：地球環境パートナーシッププラザ

参加者：2 名

〈アドバイザーのコメント〉

全国 8 カ所で展開された ESD 事業。北海道から九州まで、社会教育施設を中心とした施設を拠点とした活動、企業を中心とした拠点事業、大学生が中心となる活動など、さまざまな拠点事業について、その成果と課題について報告が行われた。一見すると、それぞれの拠点での一定の成果が見られ、今後への期待が膨らむと同時に、継続性について課題が多く挙げられた。また、今後の成果を一般化していくためのツールであったり、客観的な評価方法が求められることになる。ESD も SDG s も知らない人々に波及していくため、今後のさらなる事業を 1 年単位でなく、複数年でじっくりと腰を据えて展開していかなければと感じた。



（４）伴走支援のポイントの可視化及び全国事務局が行う成果報告会への協力

連携拠点及び関係者の変化につながった伴走支援について考察し、他の拠点でも汎用できるポイントを可視化した。

また、可視化した内容を成果報告会において発表し、地方 EPO 及び全国事務局に共有した。・成果報告会に出席した。全国事務局から指定のあった「ペチャクチャ形式」（PP20 枚、20 秒）で報告をした。

●平成 29 年度環境省環境教育・学習における「ESD 推進」のための実践拠点支援事業 成果共有会

日時：平成 30 年 2 月 27 日（火）13:00～16:00

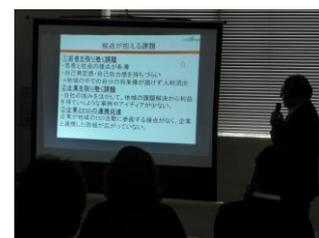
場所：地球環境パートナーシップオフィス

参加者：32 名（EPO 中部 2 名）

〈主な内容〉

全国の 8 つの EPO が集まり、各地で実践する「ESD 推進のための実践拠点支援事業」全 16 事業の成果を報告し、共有した。報告は「ペチャクチャ」という形式で、1 事業につき PP スライド 20 枚、1 枚 20 秒でプレゼンテーションを行った。EPO 中部は、「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」、「高校生による環境・ESD 活動拠点ネットワーク構想事業」について、各事業の概要、取り組み内容と事業の対象者のコメントも含めた事業成果を報告した。

参加者は各事業の発表を聞き、付箋によいところ、改善点を記入し、ボードに添付し共有した。全国の活動事例に刺激を受け、今後の拠点と地域との連携をどのように形成していくかの相互参照を行った。



〈報告の支援拠点/EPO〉

- ・三笠市立博物館（三笠ジオパーク内）/EPO 北海道
- ・森の交流館（国営滝のすずらん丘陵公園内）/EPO 北海道
- ・秋田市地球温暖化防止活動推進センター/東北 EPO
- ・静岡県地球温暖化防止活動推進センター/関東 EPO
- ・那須どうぶつ王国・なががわ水遊園・宇都宮動物園/関東 EPO
- ・愛知県の高校生が環境学習(ESD)に取り組む活動拠点/EPO 中部
- ・揖斐川流域地域/EPO 中部
- ・びわ湖大津館/近畿 EPO
- ・和歌山県立博物館/近畿 EPO
- ・鳥取県地球温暖化防止活動推進センター/EPO 中国
- ・植物館、動物園等（宇部市ときわ公園内）/EPO 中国
- ・エシカル ESD> 土佐山田ショッピングセンター> ハレルヤスイーツキッチン（菓子工場）/四国 EPO
- ・公園 ESD> 善通寺五岳の里市民の集いの丘公園> 東雲後援の一部/四国 EPO
- ・日南市子育て支援センターことこと/EPO 九州
- ・熊本県環境センター及び関係する環境学習拠点/EPO 九州
- ・北九州まなびと ESD ステーション/EPO 九州



（５）報告書の作成

本業務の実施内容及びその成果について取りまとめ、報告書と概要がわかるパンフレットを作成した。また高校生が作成をした「環境学習プログラム」の紹介動画を、環境省の YouTube に掲載した。



4. 本事業の成果と課題

(1) 支援拠点の変化

① 揖斐川流域環境学習等連携事業

昨年度からの継続事業であり、昨年度は揖斐川流域を視野に入れた教材をつくる、という共通目標を掲げ、上流、中流、下流にある拠点や人々をつないだ。つなぐツールとしての「ESD 教材」は作成したが、どのように活用するか、が重要課題であった。

今年度の命題は、「流域」をテーマに、持続可能な社会を考え行動する人材の育み（ESD）を、作成した ESD 教材を活用したプログラムで実施できるかであった。

そこで検討したのが、「ESD 教材に出演する拠点、人々、風景に出会うツアー」の実施である。バーチャルでない、動画と紙媒体のみ情報ではなく、実際に出向き、揖斐川を見、揖斐川流域に暮らす人々に出会い、何に気づくか、何を学ぶか、その時に ESD 教材は活用できるのか、にチャレンジした。

対象は小学生、中学生、親子、学校教育か社会教育か、日程は日帰りか、1泊2日か、午後のみか、プログラム内容は上流から下流までをまわるのか、上流から中流、中流から下流と分けて実施するのか、等プラットフォーム会議で喧々諤々議論をした。

流域にある高校の生徒を対象に1泊2日、ESD 教材に登場する施設や人々に出会うツアー「揖斐川流域 ESD ツアー」を行うこととした。対象や企画内容、参加する高校が決まり、訪問する施設や人々との打合せを終えた次の課題は、ツアーの中で、ESD と SDGs にどう取り組むかであった。

プラットフォーム会議に、今回のツアーの参加する高校の教員にオブザーバー参加いただき、以下のようなコメントを得た。

「新学習指導要領が導入され、高校においても主体的で対話的で深い学び、社会に開かれた教育課程の重要性がうたわれる。また、大学入試制度が変わり、地域課題をテーマにした学習が必要になる。今後の教育内容や課程の変容に伴い、この揖斐川プログラムが有効な教材になるのではないか。」

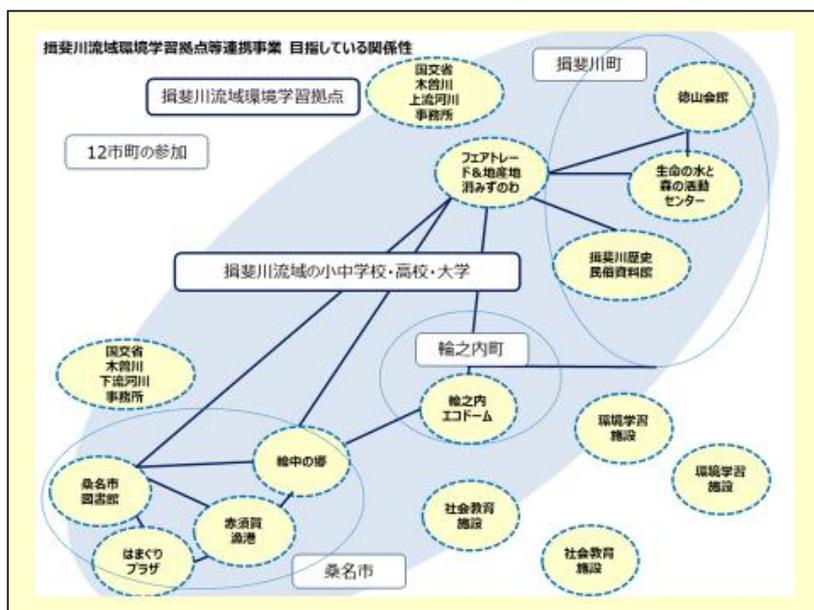
ESD の構成概念はツアーそのもののコンセプトであり、ESD が育みたい力と態度に関しては、ツアーやフォーラムでの参加型体験学習で育まれる、と確認をした。SDGs に関しても、17 の目標を意識して各拠点の取組や各拠点の取組をつなぐことで学びの多様性を豊かにすることを共有をした。

そして、ツアーに参加した高校生の気づきや学びから、各拠点、流域での取組が ESD や SDGs 達成に向けていかにつながっているかを把握することとした。次代をつくる高校生が本事業の有効性や活用方法などジャッジするプロセスとした。ジャッジをする場として、ツアーの報告会を重ねた「揖斐川流域未来フォーラム」を実施した。

これまで記してきたとおり、高校生の本事業への評価は高かった。さらに、SDGs への関心もあり、ツアーで気づいたこと、学んだこと、これから知りたいこと、やるべきことを SDGs に関連付けながら意見交換をしていた。高校生が各拠点、流域という拠点の、持続可能な地域づくりに寄与していることを提示した。各拠点や流域連携による拠点が、高校生の評価によってさらに役割を認識し、取組の質が高まった。各拠点や、流域連携による拠点を活用することで、ESD の推進がより進むことを見出した。

2年にわたり実施した本事業は、まだまだ課題やすべきことはあるものの、高校生の視点や感性から有効性を見出し、活用・汎用の可能性を広げることが出来た。いかに継続していくかが、一番の課題である。

●流域にある各拠点をつなぎ、拠点連携によるネットワーク拠点を形成

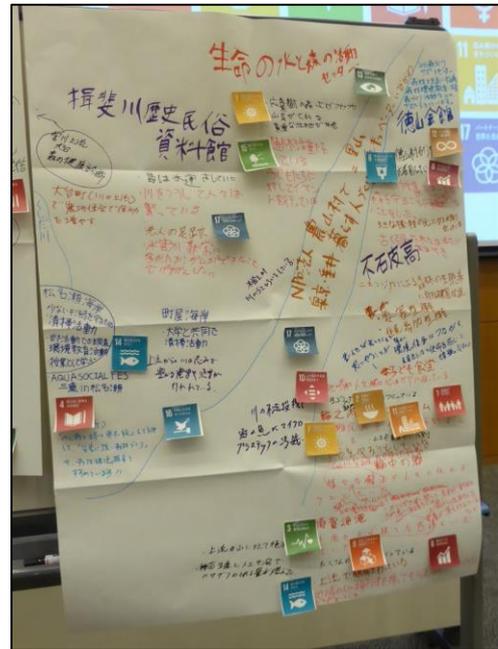
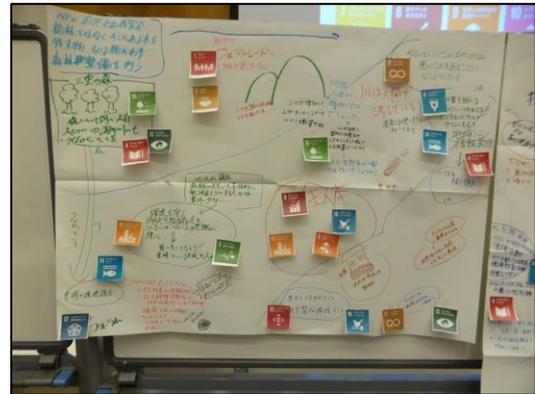


●流域における各拠点、拠点連携による拠点とSDGSを連関させると・・・



● 高校生がワークショップで見出した流域における持続可能性

各拠点の取組や流域の取組をSDGSに紐づけ、ツアーでの経験、気づき、学びから流域全体でSDGs達成にどのようにしたら近づけることができるかを話し合い、下記のように落とし込んだ。



② 高校生の環境学習・ESD ネットワーク形成事業

本事業では、高校を拠点の核とし、高校と高校、高校と地域を結び、高校が取り組んでいる環境学習・ESDを推進するネットワークの形成を目指した。さらに、このネットワークが何を生み、地域にどのような影響を与えるかについて検討をした。

ア 拠点の関係性の変化

「あいちの未来クリエイト部」（愛知県事業）は各高校がテーマとしている課題に関する調査をし、環境学習プログラムを専門家とファシリテーターの参加を得て作り出し、地域で実践する事業である。初年度である今年度は5校が参加し、それぞれの環境学習プログラムを作成した。

本事業においては、「あいちの未来クリエイト部」に参加した5校を拠点の核とし、作成した環境学習プログラムを使って地域をつなぎ、5校間、各校と核のある地域との連携によるネットワーク化を行った。

まずは、5校を対象に、環境学習プログラムをどう思うか、どのように作成したかのヒアリングを、生徒、教員を対象に、プログラム作成会議の最終日に行った。

「なぜイタセンパラなの？」「なぜカメなの？」「湿地のどういうところが好きなの？」と各校の生徒に質問をすると、参加していた生徒の半数は、「最初は関心なかった」と答えた。その生徒たちがプログラムを作成し終え、「もっと調べてみたい」「子どもたちに伝えたい」「地域で実践したい」と言い出した。最初は消極的だった生徒も回を重ねるごとに発言回数が増え、今ではプレゼンテーションをするようになった。

教員の多くが、最初はどうすすめるべきか、生徒はやりとおすのか、等課題を抱えていた。しかし、専門家を交えての学習会やファシリテーターによる参加型会議を行ううちに、教員は生徒に任せるようになり、生徒の感性と力を信じて、サポートに徹し、高校生が伝えたいことを高校生の言葉で伝えるツールを作成することができた。

5校のヒアリングを終えて、高校生の「がんばり」を地域にもっと伝えられるように、高校生の伝えたい気持ちを活動に結びつけられるように、各高校のある自治体・地域の環境団体ヒアリングをした。自治体も環境団体も各校の取組を十分には把握しておらず、説明をすると高校生の活動に興味関心を持ち、一緒に出来ることもあるかもしれない、と話された。すでに、小学校、中学校での出前授業や、地域の環境団体のイベントに参加するなどの予定がある。

次に考えたことは、5校の高校生が会うことで、新しいエネルギーが生まれ出せるのではないかと、である。各校をヒアリングする中で、他校の取組に関心をもつ生徒がたくさんいた。また、愛知県のユネスコスクール交流会では、2校が参加し、それぞれのプログラムの説明を受け体験をした。生徒はお互いのプログラムを評価し合いながらとても近くなっていた。初めて会う高校生の関係性の作りかたを垣間見、5校の高校生の交流会のプランが具体化した。

それぞれ5校のプログラムにはこだわりがあり、思いが詰まっている。

交流会では、各校の思いを聞きあい、プログラムを実際に体験し、5校一緒に何かできることはないか、やってみたくはないか、を話し合うことした。多様な人が集まることでより豊かになると考え、5校以外の高校、高校の教員、教育委員会、大学生、高校のある自治体職員や環境活動団体等に参加を促した。他校のプレゼンテーションに聞き入る生徒、プログラム体験をし、自分のプログラムとコラボレーションできないかと考える生徒、何かみんなで一緒にとりくみたい、小中学生を対象にした合同合宿をするのはどうかな、といった提案が出された。参加した大人も高校生の地域課題を調査し、プログラムという形にし、活動しようとしている姿を見て、大人がすべきことに向き合った。高校生を中心に、多様な人がそれぞれの立場からアドバイス、提案、共感しあう場となった。

このコミュニケーションの場こそ、持続可能な地域を作り出す人々のコミュニティである。

意見をだし、意見を重ね、否定することなく、それぞれの思いやアイデアを重ね、新たなものをつくろうとしているプロセスこそがESDである。

高校の生徒がつながることで可能になった場である。

高校生がつながることで、人を動かす、地域を動かすエネルギーが生み出された。

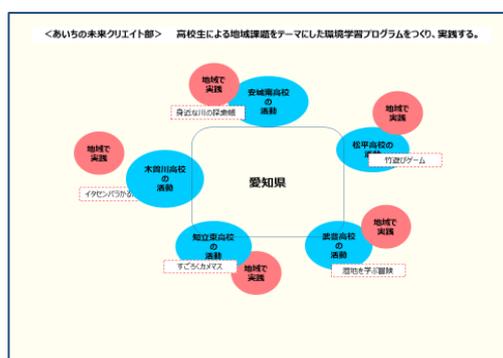
課題は、いかに継続するかである。

もう一つの課題は、参加した高校生一人一人が、地域のつくり手、担い手であり、「私が未来をつくっている」という認識がもてるよう、この活動の成果をフィードバックすることである。

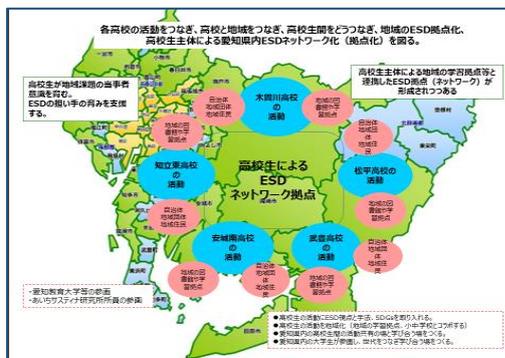
今後、高校生は社会にでて、様々な職業につき、社会の担い手として存在することとなる。その時のこの経験が少しでも活かされるよう、第三者である大人が「頑張っている高校生の変容」を認め、持続可能な地域社会のつくり手、担い手として尊重し、生徒の思いを具現化するサポートが重要となる。

高校が、高校生がくっつき離れ、アメンバーのように存在し、関わる高校、高校生、多様な主体が成長する、育まれる拠点ネットワークを目指す。1年目だが、手ごたえはあった。1年目の成果とプロセスにおける課題、改善点を活かして、主体的で対話的で深い関わりのある、社会価値のあるネットワークを目指す。今ないものを今あるものを多様に組み合わせ、活用して作り出すことが求められている。

〈事業当初の関係図〉



〈事業後の関係図〉



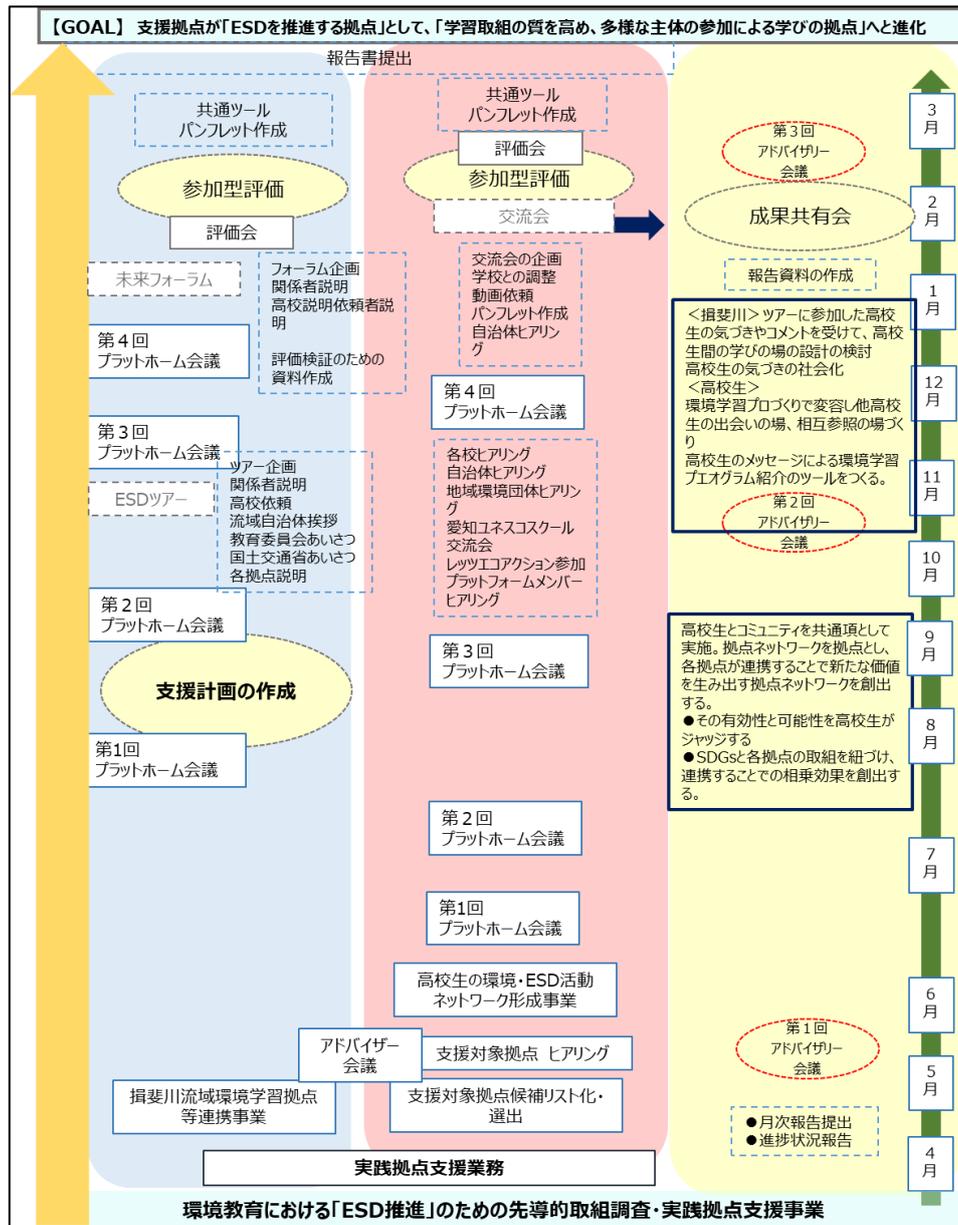
5. 総括

(1) 実践拠点支援の成果

① 各拠点支援のスケジュール

本事業は下記のようなスケジュールで 2 つの事業を並行しながら支援をし、2 つの拠点の特徴を活かした業を実施し、新たな価値を見出す拠点ネットワーク形成を試みた。

全国事務局が実施するアドバイザー会議にも出席し、全国の状況を把握し本事業にインプットできる要素を取り入れながら、進めた。



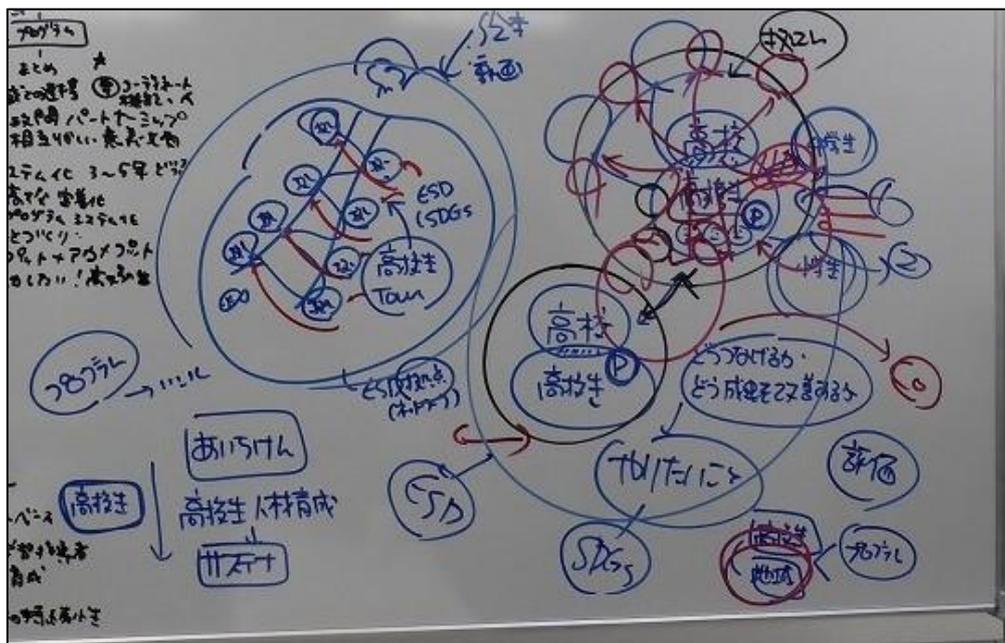
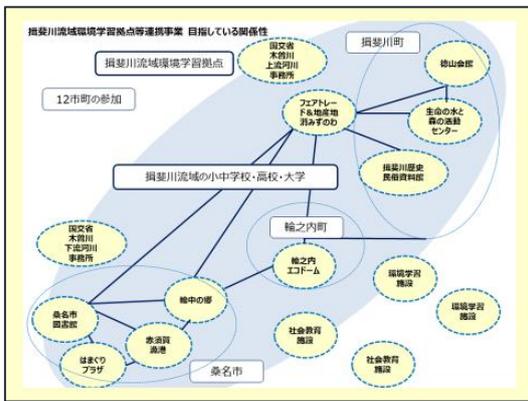
②各拠点支援の成果

2年目となる「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、高校生参加による高校生の本事業の評価を得ることとし、ツアー及びフォーラムを開催した。先に述べたとおりである。

今年度からの「高校生の環境・ESD 活動拠点ネットワーク形成事業」では、昨年度支援実施した「泰阜ひとねる大学」の大学生と泰阜村の人々との関係性の育みによる ESD 活動拠点の形成の成果を活かし、今年度は高校生間の育みによる ESD 活動拠点の可能性、高校生と地域の連携による ESD 活動拠点の可能性をテーマに、高校を核とした高校と地域、高校と高校の拠点連携による拠点ネットワークの形成を目指し、その有効性と可能性を見出した。

③2ヶ所の支援拠点の特徴と共通項

下記の関係図にあるように、2つの事業には、それぞれの特徴と共通項がある。



特徴については、以下の表にまとめた。

	項目	揖斐川流域環境学習拠点等連携事業	高校生の環境・ESD 活動拠点支援ネットワーク形成事業
支援拠点の特徴	対象	揖斐川流域の高校生とあらゆる世代	5校の高校と各地域、愛知県内
	型	広域発展型コミュニティ（流域コミュニティ/「流域」の価値を明らかにし、流域連携によるESDプログラムの作成、実施）	・高校と地域連携コミュニティ（高校を核とし自治体、環境活動団体との連携による活動の実施） ・高校間コミュニティ（参加した5校のネットワークによるコミュニティ）
	拠点	上流・中流・下流にある拠点の連携による揖斐川流域	・5市町村 ・5高校
	フィールド	流域全体	・高校のある市町（安城市、一宮市、武豊町、知立市、豊田市）
	実施者	流域内環境学習拠点、学校、社会教育施設の職員他、活動するすべての人	5校の高校生（教員）
	カリキュラム	揖斐川流域 ESD ツアー 揖斐川流域未来フォーラム	5校が作成した環境学習プログラムの展開と連携による事業の展開

共通項は、「拠点連携」「高校生の参加」である。

「拠点連携」に関しては、一つの拠点のプログラムへのアプローチではなく、各拠点の取組やプログラムを核にしながら、つながることで補完性を帯び各プログラムの影響力を高めるために「連携」をし、各拠点のプログラム、連携によってつくられた新たなプログラムの有用性を見出した。

「高校生の参加」に関しては、「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、高校生が参加するツアーを実施し、参加した高校生のツアーでの気づきや学びから、本事業の有用性や可能性を可視化することを目的とした。次代をつくる高校生の評価を得たい、という主旨でもあった。

「高校生の環境・ESD 活動拠点支援ネットワーク形成事業」については、5校の高校生が地域の環境課題を環境学習プログラム化する愛知県の事業と連携をして、高校生が地域で環境活動を積極的に展開できるように、高校生間のつながりによって新たな ESD プログラム作成やイベントの実施を可能にすることができるか、を検証するために行った。

③各拠点の目標達成

本事業の目標である、「ESD 推進拠点として学習の質を高め、多様な主体の参加による学びの場に進化したか」について、下記の2つの指標で評価し、下表のとおり整理した。2事業とも目標を達成していると捉えた。

- 拠点のプロセスデザイン力を養成したか
- 学びのサイクルを組み込み、ESD 実践をより深め、広げることができたか

「拠点連携」「高校生の参加」という共通項については、2015年にスタートした「ESDに関するグローバル・アクション・プラン（GAP）」においても、「ESD国内実施計画」においても、優先分野として「ユース」「地域コミュニティ」が重要視されており、本事業はそのモデルプランになったといえる。

		揖斐川流域環境学習拠点等 連携事業	高校生の環境・ESD 活動拠点 支援ネットワーク形成事業
目 標 の 達 成	拠点のプロセス デザイン力を養 成したか	ESD 教材を活用し、高校生を対象にした「揖斐川流域 ESD ツアー」や「揖斐川流域未来フォーラム」を実施した成果から、プログラム企画実施に至るプロセスにおいて、多様なステークホルダーの参加、関係性の育み等の点でのプロセスデザイン力が育んだ。	・高校と地域がつながることで、作成した環境学習プログラムの実行性が高まることや、地域連携のためのプロセスの育みを可能にした。 ・高校生の交流会を実施したいことで、高校生間、高校間の連携を可能にするプロセスを共有した。
	学びのサイクル を組み込み、 ESD 実践をより 深め、広げること ができたか	ESD 教材を活用し、「揖斐川流域 ESD ツアー」や「揖斐川流域未来フォーラム」を実施したことで、高校生を対象にしたプログラムの実施、その成果と効果を踏まえて、多様な主体を対象にしたプログラム作成の可能性を提示することができた。拠点と多様な連携方法の可能性による、豊かな ESD プログラム実践を可能にした。	・高校と地域の連携による環境学習プログラムの実施により、対象や場所に対応する形でのプログラム実施が可能になった。地域展開の可能性を広げた。 ・高校生の交流会によって、お互いの環境学習プログラムを相互参照することができ、お互いの地域課題を共有や、連携によるプログラム実施、各現場に出向くツアーや共通課題をテーマにしたプログラムを作成、実施など新たな展開の可能性が見られた。

(2) まとめ

①なぜ「拠点連携」を支援したのか

全国の会議に出席すると、中部は1つのハード拠点（例えば、動物園、環境学習センター等）の支援ではなく、ネットワーク形成を重きに置いている、という発言をよく聞く。

一つの拠点の支援をし、既存のプログラムのブラッシュアップ、ESD化を進めることも重要な役割である。しかし、中部では、拠点の支援を、各拠点の連携を支援することによって、結果的に各拠点の支援につながるアプローチで実施した。

例えば、「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、流域にある一つの環境学習拠点を支援し、プログラムのブラッシュアップ、ESD化を図るのではなく、「流域」という視野で、流域にあるいくつかの拠点や人々、活動とつながることで、各拠点の持っている資源を活かし評価しあいながら、「流域」全体の持続可能性のデザインをし、各拠点の役割を最も有効に活用できるプログラムの実施、ブラッシュアップを図るというプロセスである。そして、その有効性のジャッジを、次代を担う高校生の参加を得て行った。次代の視点で本事業の評価を得てフィードバックすることが、各拠点、拠点連携による拠点に対して新たな刺激となり気づきになると考えた。

高校生は見事に評価し、指摘し、大人にも十分知られていない世界の目標であるSDGsで示した、各拠点、各拠点連携による今後の取組の重要なヒントを得ることができた。

「高校生の環境・ESD活動拠点ネットワーク形成事業」も同様である。当初は、各高校が地域の環境課題をテーマにした環境学習プログラムを作成し、地域で展開をする、というプログラムであったが、本事業と連携することで、地域での展開を広げ、高校生間（拠点間）の連携の可能性と、高校による提案を見出した高校生が高校生同士行ったワークショップで見出したことに意味がある。大人は高校生の見出した可能性や提案に対して真摯に向き合い、具体化する方策を作り出す役割を担う。

一つの拠点を対象に実施していたら見いだせない広がりや深まりがある。各拠点が持つ資源を重ね、補完し合い、さらに新しいものを作り出そうという発想から、地域を変えていくプロセスが見えてくる。

ネットワークが形骸化することなく、持続可能な社会づくりに役に立つものとして存在するためにも、各拠点が自立し、自立した拠点が連携することで、地域が、社会が変容する、関わる人々が成長するネットワークが必要とされている。このネットワークがSDGsの達成に近づく重要な役割を担う。

②なぜ高校生、なのか。

今年度実施した2つの拠点の支援においてはいずれも「高校生」の参加を得た。次世代である高校生に、本事業がどう映り、どういった反応、評価をするか、が今後のESD事業の重要な要素になると考えたからである。

本事業における2つの拠点の取組が「人ごとになるのか」、それ以上に「関心をもつことがないのか」「参加をえることができるのか」、今後地域の重要な担い手となる人材との協働のヒントを得ることを目的とした。

実際、高校生にこのような事業への参加を促すことは難しい。今回もかなり苦戦をした。

しかし、参加すると、高校生は急速に変容する。モノを見る目、感じかた、サステイナビリティへの感度が変わっていく。そこに可能性がある。

しかし、まだまだ、次世代が参加する場、こういった場を作り出すサポート、が十分でない。これから生きる次世代、高校生は、地域や社会、人々、地域課題に触れる、出会う機会が必要である。

今回のように、ツアーやフォーラム、交流会に参加した高校生の「変容」が証である。高校生にはポテンシャルがあり、学校教育においても、地域学習においても、家庭でも、どこにおいても、「自分達が未来をつくるんだ」「社会を変えるんだ」、その力が高校生にはあることを自己認識化する作業が必要である。

一つの高校の取組だけでは難しいプロセスである。

拠点連携はそれをも可能にした。

今回の2つの事業で、高校生から気づかされたことは、高校生が「当事者意識をもつと変わる」、「つながることを求めている」、「持続可能な社会づくりのプロセスにおいてジャッジメントできる存在である」ということだ。

そして、そこに行きつくためには、高校生の思いに寄り添い、高校生の声を聞き、高校生が「やりたいこと」を口に出せる関係性の育みが必要である。ヒアリングやワークショップという手法を積極的に採用しているのは、それを可能にする手法だからである。

実践拠点支援には多様な可能性がある。拠点を支援することで、最終的に何を変容したいのか、そのためにはどんなプランやどんな手法が有効なのか、誰と一緒に作り上げる作業が必要なのか、誰が参加するのかよいか、など、全体デザインの設計とプロデュースする力にかかっている。



おわりに

今年度は、前年度からの継続的連携拠点として揖斐川流域環境学習等連携事業の継続、新たな連携拠点として高校生の環境学習・ESD ネットワーク形成事業を伴走支援し、いずれも短い期間で多様なステークホルダーの参加を得ながら地域の拠点に関わり、拠点のもつリソースを最大限生かしながら、新たな可能性を提示する、というモデル事業として実施した。

事業の実施に当たっては、どの程度の可能性を見出すことが出来るのか、誰と何をしたら見出せるのか、を常に考え、取り組んだ。そして、各拠点の連携、ネットワーク支援にこだわり、高校生の参加を得た。

拠点の支援では、次世代の可能性を見出し、拠点と次世代、地域と次世代をつなぎ、今あるものをつなぎ、新たなものを生み出す拠点となるよう伴走支援を行った。

こうした伴走支援を通じて、各拠点の既存の取組を組み合わせることで、ESD の視点を取り入れた新しい学びを発信・推進でき、拠点に携わる人々や訪れる人々も、拠点への新たな価値を見出すことができることが明らかになった。

電子媒体収録資料

参考資料1 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業

- 1-1 評価会議議事録
- 1-2 第1回プラットフォーム会議
- 1-3 第2回プラットフォーム会議
- 1-4 第3回プラットフォーム会議
- 1-5 第4回プラットフォーム会議
- 1-6 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 評価・検証 報告書（紙媒体有）
- 1-7 月次報告
- 1-8 成果共有会で使用したPP
- 1-9 支援計画・振り返りシート
- 1-10 成果物
 - ① 揖斐川流域 ESD ツアーチラシ
 - ② 揖斐川流域未来フォーラム
 - ③ 揖斐川流域パンフレット「ようこそ 揖斐川流域へ」

参考資料2 高校生の環境学習・ESD ネットワーク形成事業

- 2-1 評価会議議事録
- 2-2 第1回プラットフォーム会議
- 2-3 第2回プラットフォーム会議
- 2-4 第3回プラットフォーム会議
- 2-5 第4回プラットフォーム会議
- 2-6 月次報告
- 2-7 成果共有会で使用したPP
- 2-8 支援計画・振り返りシート
- 2-9 成果物
 - ① 高校生の環境学習・ESD ネットワーク形成事業紹介チラシ、パネル
 - ② あいちの未来を考えた！高校生が伝える“たいせつなこと”交流会チラシ
 - ③ パンフレット「とびだそう、みらいへ キラキラあいちの高校生」

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Aランク〕のみを用いて作製しています。